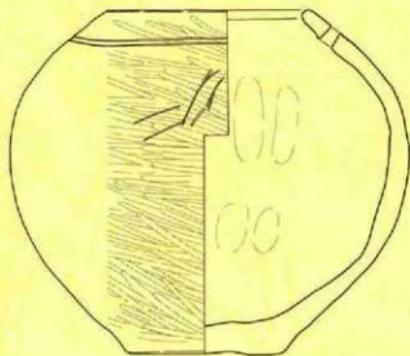


比 恵 30

—比恵遺跡群第69・70・71次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第671集



2001

福岡市教育委員会

比恵30正誤表

比恵遺跡群第70次発掘調査報告

ページ	誤	正
36	SC03(第3図・図版2)	SC03(第3図・図版3)
39	SC44(第5図・図版2)	SC44(第5図・図版3)
	SC48(第5図・図版2)	SC48(第5図・図版3)
40	SC57(第5図・図版2)	SC57(第5図・図版3)
43	SC72(第8図・図版2)	SC72(第8図・図版3)
44	SC89(第8図・図版2)	SC89(第8図・図版3)
46	SD01(第11図・図版3)	SD01(第11図・図版2)
47	SD02(第11図99~102・図版3)	SD02(第11図・図版2)
50	出土遺物(第13図)	出土遺物(第13図99~102)
	SE55(第11図・図版3)	SE55(第11図・図版2)
52	SE56(第11図・図版3)	SE56(第11図・図版2)
53	SK81(第15図・図版3)	SK81(第15図・図版2)
56	SP106(第15図・図版3)	SP106(第15図・図版2)
	SP210(第15図・図版3)	SP210(第15図・図版2)
	SP346(第15図・図版3)	SP346(第15図・図版2)
63	SC89出土遺物	53, 54はSC72出土遺物

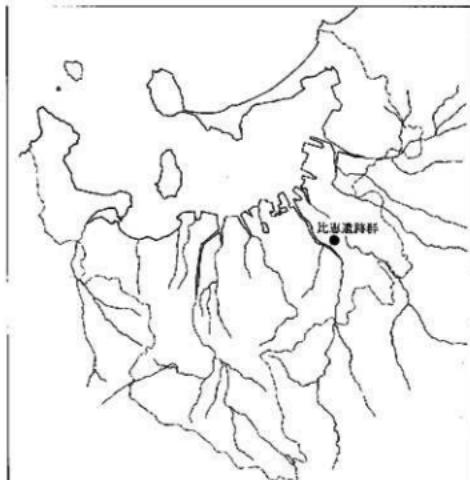
比恵遺跡群第71次発掘調査報告

ページ	誤	正
69	SC01(第1図・図版2)	SC01(第3図・図版2)
71	出土遺物(第3図1~7・図版6)	出土遺物(第3図1~7・図版5)
	出土遺物(第4図8・図版6)	出土遺物(第4図8・図版5)
72	SD01(第6図・図版2・3)	SD01(第6図・図版2)
73	出土遺物(第8~10図29~67・72・図版6)	出土遺物(第8~10図29~67・72・図版5)
80	SE03(第11図・図版4)	SE03(第11図・図版3)
	出土遺物(第12図73・図版7)	出土遺物(第12図73・図版6)
	SE04(第11図・図版4)	SE04(第11図・図版3)
	SE05(第11図・図版4)	SE05(第11図・図版3)
	出土遺物(第12図76~80・図版7)	出土遺物(第12図76~80・図版6)
	SE06(第11図・図版4)	SE06(第11図・図版3)
	出土遺物(第12図81~87・図版7)	出土遺物(第12図81~87・図版6)
81	SE22(第11図・図版4)	SE22(第11図・図版3)
	SE84(第11図・図版4)	SE84(第11図・図版3)
82	出土遺物(第12図88~93・図版7)	出土遺物(第12図88~93・図版6)
83	出土遺物(第14図94~97・図版7)	出土遺物(第14図94~97・図版6)
	出土遺物(第14図98~99・図版7)	出土遺物(第14図98~99・図版6)
	SK18(第13図・図版5)	SK18(第13図)
	出土遺物(第14図100・図版7)	出土遺物(第14図100・図版6)
	SK23(第13図・図版5)	SK23(第13図・図版4)
	出土遺物(第14図101~105・図版7)	出土遺物(第14図101~105・図版6)
86	SK24(第13図・図版5)	SK24(第13図・図版4)
	出土遺物(第14図106~112・図版7)	出土遺物(第14図106~112・図版6)
	SK61(第13図・図版5)	SK61(第13図・図版4)
	SK76(第13図・図版5)	SK76(第13図・図版4)
	出土遺物(第14図115~117・図版7)	出土遺物(第14図115~117・図版6)
	SP60(第13図・図版5)	SP60(第13図・図版4)
	出土遺物(第14図119~121・図版7)	出土遺物(第14図119~121・図版6)
87	SP56・SP165(第15図122・図版7)	SP56・SP165(第15図122・図版6)
	遺構検出中出土遺物(第15図124・図版7)	遺構検出中出土遺物(第15図124・図版6)

比 恵 30

—比恵遺跡群第69・70・71次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第671集



遺 跡 略 号 HIE-69 HIE-70 HIE-71
遺 跡 調 査 番 号 9925 9942 9955

2001

福岡市教育委員会

序

現在、国際化の流れの中で、アジアにより一層開かれた国際都市を目指し、まちづくりを進めている福岡市は、古くからアジア大陸との交流を通じて発展してきました。本市では、この交流を物語る文化財の保護、活用に努めていますが、開発によりやむを得ず失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は、博多区比恵遺跡内の各種開発事業に先立って行われた第69次、70次、71次の発掘調査を報告するものです。調査の結果、各調査地点で弥生時代から中世に至る遺構、遺物が発見され、当時の生活を復元する上で多大な成果を挙げることができました。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまで、費用負担などのご協力を賜わりました山田勝利様、有限会社ケンソーの吉永憲正様、大島康弘様をはじめとする関係者の方々及び地元の方々には多大なご理解とご協力をいたきました。ここに感謝の意を表するとともに、本書を文化財保護や普及、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

目 次

比恵遺跡群の立地と環境

本文目次

1. 遺跡の立地.....	1
2. 周辺の遺跡.....	1

挿図目次

第1図 比恵遺跡群と周辺の遺跡 (1/5,000)	2
第2図 比恵遺跡群調査区位置図 (1/15,000)	4

表 目 次

表1 比恵遺跡群調査一覧.....	3
-------------------	---

比恵遺跡群第69次発掘調査報告

本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経過.....	7
2. 調査体制.....	7
II. 調査の記録	
1. 調査の経過.....	7
2. 井戸 (SE)	11
3. 貯藏穴 (SU)	12
4. ピット (SP)	24
5. 小結.....	24

付 編 比恵遺跡69次調査で出土した赤色物質の保存科学的調査

加賀市埋蔵文化センター比佐陽一郎・片多雅樹27

挿図目次

第1図 調査区位置図1 (1/5,000)	8
第2図 調査区位置図2 (1/500)	9
第3図 全体図 (1/100)	10
第4図 SE01、02実測図 (1/40)	11
第5図 SE01、02出土遺物 (1/4)	11
第6図 SU03、04、05実測図 (1/40)	13
第7図 SU03出土遺物実測図 (1/4)	13
第8図 SU04出土遺物実測図1 (1/4)	14
第9図 SU04出土遺物実測図2 (1/4)	15
第10図 SU07実測図 (1/40)	16
第11図 SU07出土遺物実測図1 (1/4)	17
第12図 SU07出土遺物実測図2 (1/4)	18
第13図 SU07出土遺物実測図3 (1/4)	19
第14図 SU08、09、10実測図 (1/40)	20
第15図 SU08、09、10出土遺物実測図 (1/4)	21
第16図 SU26、27実測図 (1/40)	22
第17図 SU26、27出土遺物実測図 (1/4)	23
第18図 SP06実測図 (1/30)	24

図版目次

図版1	1. 西半全景 (東から)	2. 東半全景 (西から)
	3. SU04 (南から)	4. SU04上層
	5. SU05 (西から)	6. SU07 (西から)
図版2	1. SU09 (南から)	2. SU09十層
	3. SU026 (南から)	4. SU026土層
	5. SU09出土遺物 (128)	6. SU026出土遺物 (142)

比恵遺跡群第70次発掘調査報告

本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経過	33
2. 調査体制	33
II. 調査の概要	
1. 調査地点の位置	34
2. 調査概要	34
III. 調査の記録	
1. 遺構と遺物	36
(1) 穴穴住居址	36
(2) 据立柱建物	45
(3) 清	46
(4) 井戸	52
(5) 土壙	53
(6) ピット	54
(7) その他の遺物	57
2. 小結	58

挿図目次

第1図 調査区位置図 (1/500)	34
第2図 調査区遺構配置図 (1/100)	35
第3図 穴穴住居址実測図 1 (1/60)	37
第4図 穴穴住居址出土遺物実測図 1 (1/4, 1/3, 1/2)	38
第5図 穴穴住居址実測図 2 (1/60, 1/40)	40
第6図 穴穴住居址出土遺物実測図 2 (1/4, 1/3)	41
第7図 穴穴住居址出土遺物実測図 3 (1/4)	42
第8図 穴穴住居址実測図 3 (1/60, 1/20)	44
第9図 穴穴住居址出土遺物実測図 4 (1/4, 1/3)	45
第10図 据立柱建物実測図 (1/60)・出土遺物実測図 (1/4)	46
第11図 清・井戸実測図 (1/100, 1/50, 1/40)	48
第12図 清出土遺物実測図 (1/4, 1/3)	49
第13図 清・井戸出土遺物実測図 (1/4)	50
第14図 井戸出土遺物実測図 (1/4)	51
第15図 上壙・ピット実測図 (1/40)	54
第16図 土壙・ピット出土遺物実測図 (1/4, 1/3)	55
第17図 ピット・その他出土遺物実測図 (1/4, 1/3, 2/3)	56

表目次

表1 穴穴住居址一覧表	59
表2 据立柱建物	59
表3 清一覧表	59
表4 井戸一覧表	59
表5 上壙・清表	59
表6 ピット一覧表	59

図版目次

図版1 1. 調査区北東側全景 (北西から)	2. 調査区南西側全景 (北西から)
図版2 1. SD01 (北北西から)	2. SD01・SD02 (北から)
3. SE55遺物出土状況 (南東から)	4. SE56遺物出土状況 (北から)
5. SK50遺物出土状況 (西から)	6. SP106遺物出土状況 (西から)
7. SK81遺物出土状況 (東から)	8. SP210遺物出土状況 (西から)
9. SP346遺物出土状況 (東から)	
図版3 1. SC03 (南南東から)	2. SC44 (西から)
3. SC57遺物出土状況 (北東から)	4. SC57壳器状況 (北東から)
5. SC48 (南から)	6. SC89壳器状況 (南東から)
7. SCT2 (北西から)	8. SCT2内SK95粘土除去後 (北から)
9. SCT2内SK95粘土除去後 (北から)	

図版4 SC03・SC44・SC48・SC57・SC89・SD01各出土遺物
図版5 SD01・SE55・SE56・土塙・ピット・その他各出土遺物

比志遺跡群第71次発掘調査報告

本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経過	67
2. 調査体制	67
II. 調査の概要	
1. 調査地点の位置	68
2. 調査経過	68
III. 調査の記録	
1. 遺構と遺物	69
(1) 穫穴住居址	69
(2) 捕立柱建物	71
(3) 溝	72
(4) 井戸	80
(5) 上塙	83
(6) ピット・その他出土遺物	87
2. 小結	88

挿図目次

第1図 調査区位置図 (1/500)	68
第2図 調査区遺構配置図 (1/200)	折り込み
第3図 穫穴住居址実測図1 (1/60)・出土遺物実測図 (1/4)	69
第4図 穫穴住居址実測図2 (1/60)・出土遺物実測図 (1/4)	70
第5図 捕立柱建物実測図 (1/60)・出土遺物実測図 (1/4)	72
第6図 溝実測図 (1/100、1/60)	74
第7図 SD02上塙実測図 (1/50)	75
第8図 溝出土遺物実測図1 (1/4)	76
第9図 溝出土遺物実測図2 (1/4)	77
第10図 溝出土遺物実測図3 (1/4)	78
第11図 井戸実測図 (1/40)	81
第12図 井戸出土遺物実測図 (1/40)	82
第13図 土塙・ピット実測図 (1/40、1/30)	84
第14図 上塙出土遺物実測図 (1/4、1/3、1/2)	85
第15図 ピットその他出土遺物実測図 (1/4、1/3)	87

図版目次

図版1	1. 調査区南東側全景 (北東から)	2. 調査区北西側全景 (北東から)
図版2	1. SC01 (東から) 3. SC02・SD25 (北から) 5. SD01北西側 (北西から) 7. SD02北側 (東から)	2. SC01内P1遺物出土状況 (北から) 4. SD01南東側 (北西から) 6. SD02南側 (西から)
図版3	1. SD02遺物出土状況 (北西から) 3. SD02中央付近遺物出土状況 (東から) 5. SE03完掘状況 (北西から) 7. SE05完掘状況 (東から) 9. SE22完掘状況 (東から)	2. SD02西側遺物出土状況 (北から) 4. SD02東側遺物出土状況 (東から) 6. SE04完掘状況 (北東から) 8. SE06完掘状況 (西から) 10. SE84遺物出土状況 (北西から)
図版4	1. SK07完掘状況 (北から) 3. SK23遺物出土状況 (南西から) 5. SK61完掘状況 (北西から) 7. SP60断面 (北東から)	2. SK08完掘状況 (北西から) 4. SK24遺物出土状況 (東から) 6. SK76遺物出土状況 (北東から) 8. 作業風景

比恵遺跡群の立地と環境

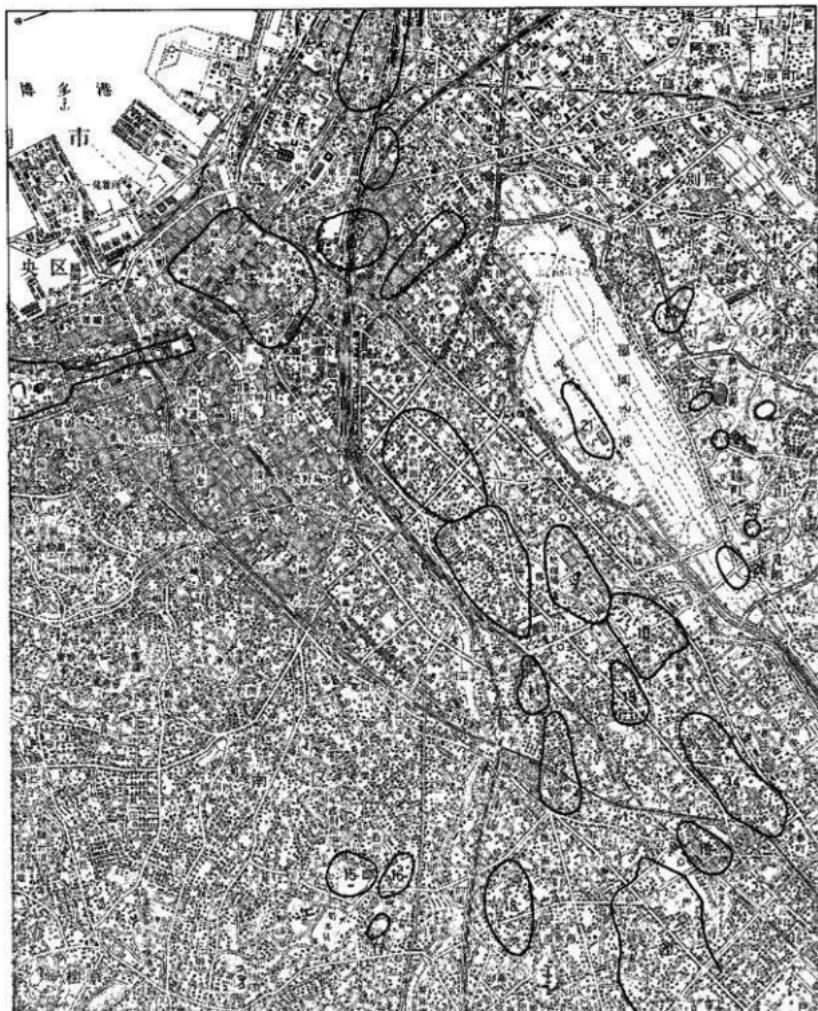
1. 遺跡の立地

福岡平野は、東から南にかけて背振、三郡山塊に囲まれ、北は博多湾に面し、南北に伸びる丘陵と沖積平野を交互に連ねて形成される。その沖積平野を、西から宝見川、樋井川、那珂川、御笠川、宇美(多々良)川が貫流し、それぞれの河川により開析された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。ここでいう狹義の福岡平野とは、御笠川、那珂川流域の旧席田郡の一部、那珂郡、御笠郡に当たる部分で、この福岡平野を中心として周辺に重要な遺跡群が点在する。比恵遺跡群は福岡平野の中央部に位置し、平野を北西方向に流れる御笠川と那珂川とに挟まれた洪積台地上に立地している。現在この地域は、標高約6m前後の平坦な都心部を形成しているが、これは戦前の区画整理事業や都市開発の影響によるものであり、古くは、小規模の開析谷が複雑に入り組んだ、八つ手状の景観を呈する低丘陵であったと推定される。比恵遺跡群の立地する台地は、花崗岩の風化疊層を基盤とし、その上部に粗砂・細砂・黒茶~褐色シルト(腐蝕土様)・阿蘇山の火砕流による八女粘土・鳥栖ロームが形成される。比恵遺跡群は主にこの鳥栖ローム層上面、削平された部分は鳥栖ローム下位層もしくは八女粘土層で遺構が検出される。

比恵遺跡群では、主に弥生時代前期以降古墳時代に至る時期の生活跡が調査されてきている。古くは旧石器時代にさかのぼり、ナイフ形石器が出土している。縄文時代は前期・突帯文土器期の遺物が散見される程度で遺構は検出されていない。弥生時代前期以降になり、遺構・遺物とともに急増していく。弥生時代前期は、遺跡の北西部で貯蔵穴が確認され、前期末までには各所で竪穴住居址、貯蔵穴、水田、甕棺墓等が検出され始める。中期に入ると、中央台地に甕棺墓群が造営され、中期後半~後期に至る時期には、遺跡全域に竪穴住居址、掘立柱建物、井戸などが濃密に分布するようになる。墓域も近接して造られ、段丘を区画するような大溝が掘削される。後期中頃~終末に至る時期にも集落は継続して営まれ、古墳時代にいたって、方形周溝墓が造営される。古墳時代中期でいったん減少した集落は後期に入ると再び増加し、6世紀後半~7世紀前半頃までの大型掘立柱建物、柵列が検出されており、「那津官家」関連の施設の可能性が指摘されている。これ以後の官衙的遺構は那珂遺跡群に検出されるようになる。比恵遺跡群では、この後、古代の遺構がまばらに散見され、中世にいたり、都市として機能していくようである。

2. 周辺の遺跡

比恵遺跡群の周辺には、弥生時代~古墳時代を中心とする遺跡が多く分布する。比恵遺跡群の谷地形を挟んだすぐ南には那珂遺跡群が立地する。弥生時代前期から後期までの集落が展開しており、特に青銅器生産の拠点の一つといえよう。さらに遺跡の範囲内には、古墳時代初頭に築造された那珂八幡古墳、6世紀後半に築造され、福岡平野最後の首長墓と考えられる東光寺剣塚古墳が所在する。那珂遺跡群の南には弥生時代前期末から中期にかけての集落、前期から後期前半の墓地が検出された諸岡遺跡群がある。朝鮮系無文土器と弥生時代前期末の十器が共存するあり方が注目される。さらに比恵遺跡群の南東には板付遺跡が位置する。縄文時代晚期にさかのぼる水田址とこれに伴う水利施設、弥生時代前期から後期の環濠集落や甕棺墓群が確認された国指定史跡である。さらに南へ向かい、近年調査が増加しつつある井戸遺跡を経て、「奴國」の中心遺跡とされる須恵遺跡群に到達する。このように比恵遺跡群の立地する台地には、多くの重要な遺跡が存在している。



1 箱崎遺跡	7 比恵遺跡	13 諸岡遺跡	19 雜鈴隈遺跡	25 天神森遺跡
2 吉塚本町遺跡	8 那珂遺跡	14 斎野遺跡	20 須玖遺跡	26 下月隈C遺跡
3 壬杵遺跡	9 那珂石休遺跡	15 和田B遺跡	21 衣居遺跡	
4 福岡城	10 板付遺跡	16 野多日遺跡	22 席田青木遺跡	
5 博多遺跡	11 五十川高木遺跡	17 野多日枯瀬遺跡	23 久保園遺跡	
6 吉塚遺跡	12 井尻遺跡	18 H佐遺跡	24 宝満尾遺跡	

第1図 比恵遺跡群と周辺の遺跡 (1/50,000)

表1 比東遺跡群調查一覽

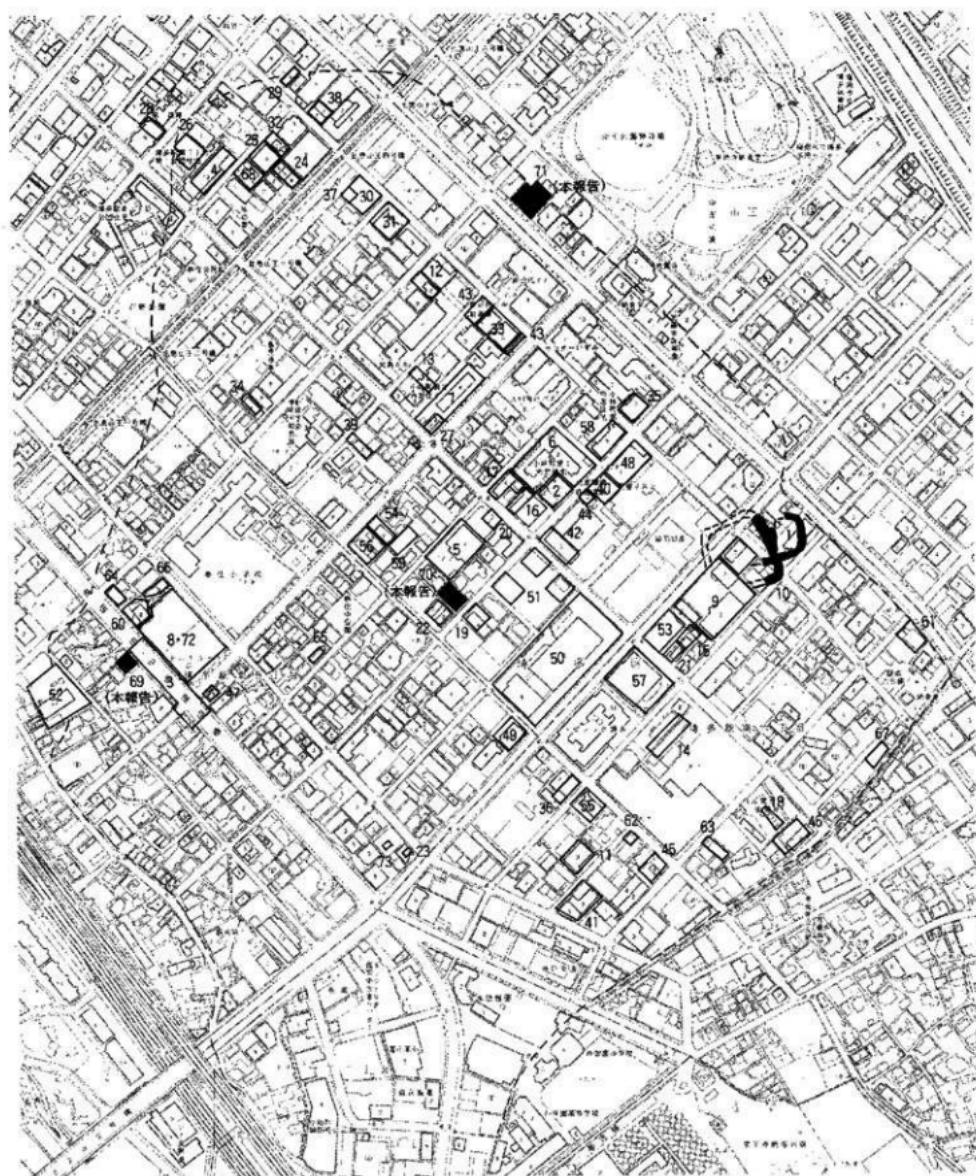
文 號	題名	所在地(市町村(郵便番号))	圖書類別	著者・翻訳者		主な著述者・著者
				著者	翻訳者	
1	新多喜作「新多喜作の日記」	1926-1939	上級小説	新多喜作		1
2	新多喜作「新多喜作の日記」	1900	上級小説	新多喜作		4
3	新多喜作「新多喜作の日記」	1906-1907-1908	上級小説	新多喜作		2
4	7932 新多喜作「新多喜作の日記」	1300	791113-802420	新多喜作		3
5	81411 新多喜作「新多喜作の日記」	1600	810413-810713	新多喜作		1-5
6	8228 新多喜作「新多喜作の日記」	2644	820505-820905	新多喜作		5
7	8329 新多喜作「新多喜作の日記」	210	830702-831100	新多喜作		7
8	8330 新多喜作「新多喜作の日記」	2240	830917-840418	新多喜作		8
9	8564 新多喜作「新多喜作の日記」	1635	850407-850524	新多喜作		9
10	8536 新多喜作「新多喜作の日記」	1600	850510-851000	新多喜作		10
11	8546 新多喜作「新多喜作の日記」	18-24	850621-860131	新多喜作		11
12	8515 新多喜作「新多喜作の日記」	1600	850624-860124	新多喜作		12
13	8617 新多喜作「新多喜作の日記」	1500	860101-860191	新多喜作		13
14	8632 新多喜作「新多喜作の日記」	8-57	860808-860926	新多喜作		14
15	8736 新多喜作「新多喜作の日記」	7-94	870808-870926	新多喜作		15
16	8777 新多喜作「新多喜作の日記」	11-17	870927-871023	新多喜作		16
17	8826 新多喜作「新多喜作の日記」	10-36	880802-880901	新多喜作		17
18	8932 新多喜作「新多喜作の日記」	7-88	880903-881000	新多喜作		18
19	8850 新多喜作「新多喜作の日記」	19-32	890505-890626	新多喜作		19
20	8861 新多喜作「新多喜作の日記」	6-6	890608-890626	新多喜作		20
21	8865 新多喜作「新多喜作の日記」	1-82	890613-890713	新多喜作		21
22	8866 新多喜作「新多喜作の日記」	1-82	890614-890713	新多喜作		22
23	8872 新多喜作「新多喜作の日記」	3-7	890621-890626	新多喜作		23
24	8917 新多喜作「新多喜作の日記」	1-7	890622-890619	新多喜作		24
25	8924 新多喜作「新多喜作の日記」	1-73	890623-890626	新多喜作		25
26	8952 新多喜作「新多喜作の日記」	1-34	890624-890626	新多喜作		26
27	8971 新多喜作「新多喜作の日記」	10-18	891008-891028	新多喜作		27
28	8988 新多喜作「新多喜作の日記」	3-40	891003-891024	新多喜作		28
29	9004 新多喜作「新多喜作の日記」	3-29	120 900410-900428	新多喜作		29
30	9012 新多喜作「新多喜作の日記」	21-23	370 901005-901020	新多喜作		30
31	9018 新多喜作「新多喜作の日記」	21-23	390 900604-900713	新多喜作		31
32	9023 新多喜作「新多喜作の日記」	45-52	135 900501-901113	新多喜作		32
33	9029 新多喜作「新多喜作の日記」	1983-2	965 901004-910206	新多喜作		33
34	9043 新多喜作「新多喜作の日記」	1983-2	966 901005-910206	新多喜作		34
35	9061 新多喜作「新多喜作の日記」	1-100	450 900101-910200	新多喜作		35
36	9064 新多喜作「新多喜作の日記」	1-100	191 900101-910200	新多喜作		36
37	9104 新多喜作「新多喜作の日記」	2-22	170 910422-910529	新多喜作		37
38	9109 新多喜作「新多喜作の日記」	3-32	70 910505-910517	新多喜作		38
39	9124 新多喜作「新多喜作の日記」	1-162	210 911006-911213	新多喜作		39
40	9167 新多喜作「新多喜作の日記」	7-26	390 910604-910726	新多喜作		40
41	9211 新多喜作「新多喜作の日記」	34-52	540 912113-920524	新多喜作		41
42	9221 新多喜作「新多喜作の日記」	7-23	756 920706-921119	新多喜作		42
43	9232 新多喜作「新多喜作の日記」	1-154	354 920820-930210	新多喜作		43
44	9261 新多喜作「新多喜作の日記」	1-100	326 920820-930210	新多喜作		44
45	9277 新多喜作「新多喜作の日記」	3-34	89 920820-930210	新多喜作		45
46	9240 新多喜作「新多喜作の日記」	6-123	288 930201-972714	新多喜作		46
47	9245 新多喜作「新多喜作の日記」	7-11	182 930104-972714	新多喜作		47
48	9255 新多喜作「新多喜作の日記」	7-93	450 930106-950321	新多喜作		48
49	9313 新多喜作「新多喜作の日記」	20-31	513 930202-930616	新多喜作		49
50	9322 新多喜作「新多喜作の日記」	49	486 930628-940626	新多喜作		50
51	9334 新多喜作「新多喜作の日記」	1-86	1041 930606-930906	新多喜作		51
52	9361 新多喜作「新多喜作の日記」	1-159	885.5 940610-940919	新多喜作		52
53	9415 新多喜作「新多喜作の日記」	2-27	109 940625-940922	新多喜作		53
54	9416 新多喜作「新多喜作の日記」	15-20	181 940110-941122	新多喜作		54
55	9420 新多喜作「新多喜作の日記」	1-154	182 940110-941122	新多喜作		55
56	9426 新多喜作「新多喜作の日記」	1-154	526 940106-941107	新多喜作		56
57	9541 新多喜作「新多喜作の日記」	20-31	2030 951115-960126	新多喜作		57
58	9603 新多喜作「新多喜作の日記」	2-73	728 960402-960426	新多喜作		58
59	9597 新多喜作「新多喜作の日記」	20-21	131.3 960107-961020	新多喜作		59
60	9698 新多喜作「新多喜作の日記」	1-100	166 960106-960906	新多喜作		60
61	9673 新多喜作「新多喜作の日記」	2-82	407 971027-971031	新多喜作		61
62	9720 新多喜作「新多喜作の日記」	6-82-87	272 971027-971034	新多喜作		62
63	9738 新多喜作「新多喜作の日記」	7-12-14	305 970620-970929	新多喜作		63
64	9739 新多喜作「新多喜作の日記」	7-12-14	178 970620-970924	新多喜作		64
65	9739 新多喜作「新多喜作の日記」	11-23	143 970802-980210	新多喜作		65
66	9772 新多喜作「新多喜作の日記」	16-25	97 970802-980203	新多喜作		66
67	9807 新多喜作「新多喜作の日記」	7-75	200 980101-980504	新多喜作		67
68	9807 新多喜作「新多喜作の日記」	7-75	201 980101-980504	新多喜作		68
69	9812 新多喜作「新多喜作の日記」	1-99	313.9 990101-991116	新多喜作		69
70	9865 新多喜作「新多喜作の日記」	1-100	862.6 990106-990926	新多喜作		70
71	9942 新多喜作「新多喜作の日記」	1-99	313.9 990101-991116	新多喜作		71
72	0009 新多喜作「新多喜作の日記」	7-13-14	1874 000905-000919	新多喜作		72
73	0068 新多喜作「新多喜作の日記」	1-100	100 010001-010006	新多喜作		73

凡例

- 番号は脚本の講義登録番号を表す
比原一郎著「北原通勝」(「北原通勝(8)」)『昭和文庫』昭和文庫新編第174集。1968年「北原」の後の数字は1968年発行「北原通勝(5)」昭和の表記番号を表す
年表一覧「昭和文庫新編文化部書目年表(昭和)」1989年度
附註一覧「昭和文庫新編文化部書目年表(昭和)」1989年度
主な一覧「昭和文庫新編文化部書目年表(昭和)」1989年度

文

- 1 鹿嶋山，「廣雅釋名小西一章」，《史記》57, 68, 74, 79。九洲光次，1956-1957。
2 古川信重，「東洋古代葬火研究」見てられての佐藤敏雄，「阿蘇火葬：氏族死研究全報」
3 古川信重，「考古學：『鹿島』——福岡市古墳地層的發掘」；日本古社公報1950。
4 福岡市考古委員會，「北山遺跡——第6次試掘（附物質）」；『福岡市考古文化財研究』
5 福岡市考古委員會，「北山遺跡——第6次試掘（附物質）」；『福岡市考古文化財研究』
6 福岡市考古委員會，「北山遺跡——第7次試掘」；『福岡市考古文化財研究報告書』
7 福岡市考古委員會，「北山遺跡——第一次試掘衣表」；『福岡市考古文化財研究報告書』
8 福岡市考古委員會，「北山遺跡——第9、10次試掘報告」；『福岡市考古文化財研究報告書』



第2図 比恵遺跡群調査区位置図 (1/5,000)

比恵遺跡群第69次発掘調査報告



遺跡略号 HIE-69
遺跡調査番号 9925

例　　言

1. 本書は博多区博多駅南5丁目109において平成11年度に福岡市教育委員会が実施した比恵遺跡群第69次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸、高橋健治が行った。
3. 遺物の実測は長家、林田憲三、高橋健治が行った。
4. 製図は長家、山根ひろみ、坂元雄紀が行った。
5. 写真は長家が撮影した。
6. 本書で用いる遺構番号は全体で通し番号にし、報告の際には番号の前に遺構の性格を示す略号を付して表記している。また遺物番号も通し番号としている。
7. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から $6^{\circ} 18'$ 西偏する。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
9. 本章の執筆・編集は長家があたった。

遺跡調査番号	9925		遺跡略号	HIE-69
調査地地番	博多区博多駅南5丁目109			
開発面積	238.01m ²	対象面積	238.01m ²	調査面積
調査期間	1999年6月28日～7月15日		分布地図番号	37-0127

I. はじめに

1. 調査に至る経過

平成11年3月21日付けで山田勝利氏より福岡市教育委員会宛に博多区博多駅南5丁目109の物件238.01m²に関して共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。(事前審査番号10-2-672)。申請地は周知の埋蔵文化財包藏地である比恵遺跡群(分布地図番号37-0127・遺跡略号HIE)に含まれており、周辺においても各種開発に伴い発掘調査が行なわれている地点である。このため埋蔵文化財課では平成11年5月6日に申請地内において試掘調査を実施し、土坑・ピット等の遺構を確認した。この結果を受け申請者に対して遺構が存在する旨を回答しその取扱について協議を行った。この結果建築物の基礎工事等で遺構の破壊が避けられないため、発掘調査を行ない記録保存を図ることで両者の協議が成立した。以上の協議を受けて委託契約を締結し平成11年度に発掘調査、平成12年度に資料整理・報告書作成を行うこととした。

発掘調査は平成11年6月28日～平成11年7月15日の期間で行った(調査番号9925)。調査対象地は申請地全体の238.01m²で、調査面積は150m²である。また遺物はコンテナ9箱出土している。

現地での発掘調査に当たっては地権者である山田勝利氏をはじめとして関係者の皆様方には発掘作業についてご理解を得ると共に多大なご協力を賜わりました、ここに記して謝意を表します。

2. 調査体制

事業主体 山田勝利

調査主体 教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第2係長 力武卓治(現任)

調査庶務 文化財整備課 谷口真由美(前任) 御手洗清(現任)

調査担当 調査第2係 長家伸

調査作業 石川洋子 鶴見サ子 古賀典子 有田恵子 田中トミ子 福場真由美 北条こず江

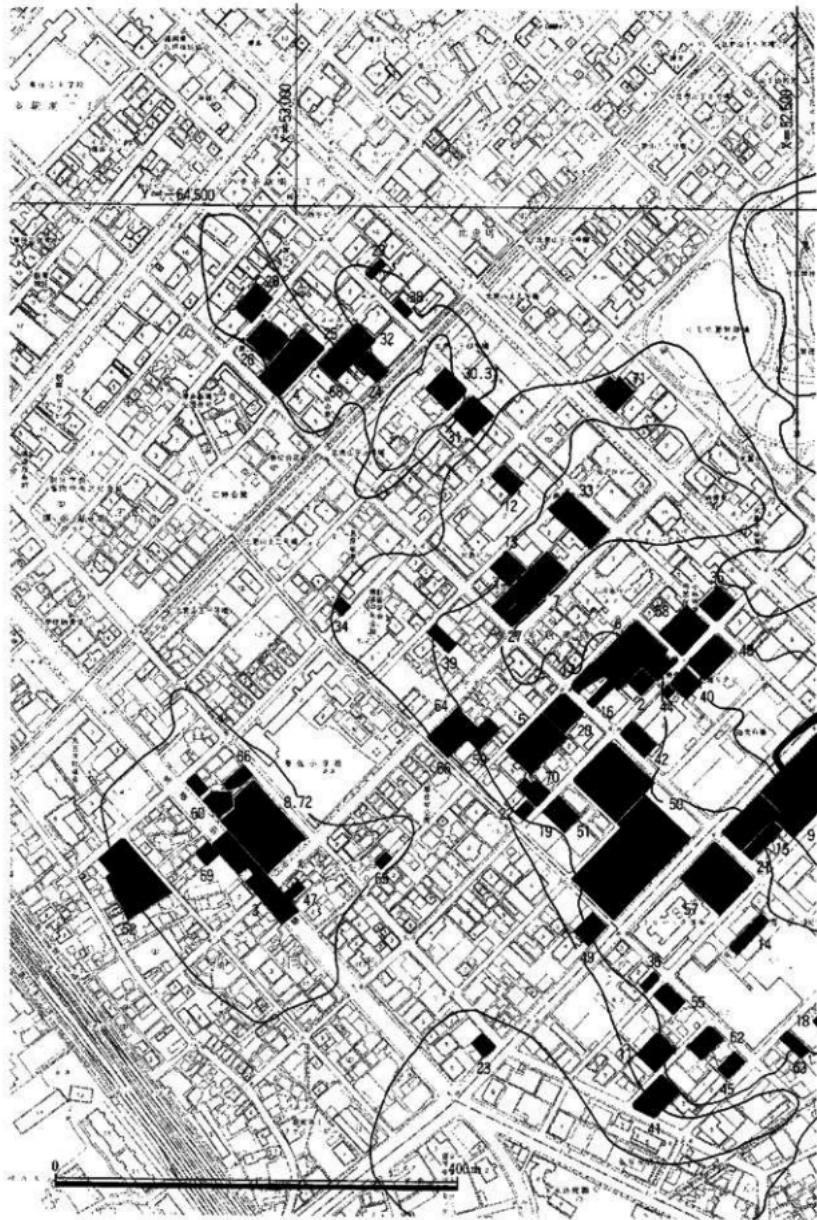
整理作業 持丸玲子 鍋山治子 森田裕子 木村文子 金子二三枝 泉本たみ子 幸田信乃

塚本よし子 山田政治 西田文子 川上藤幸 高橋健治

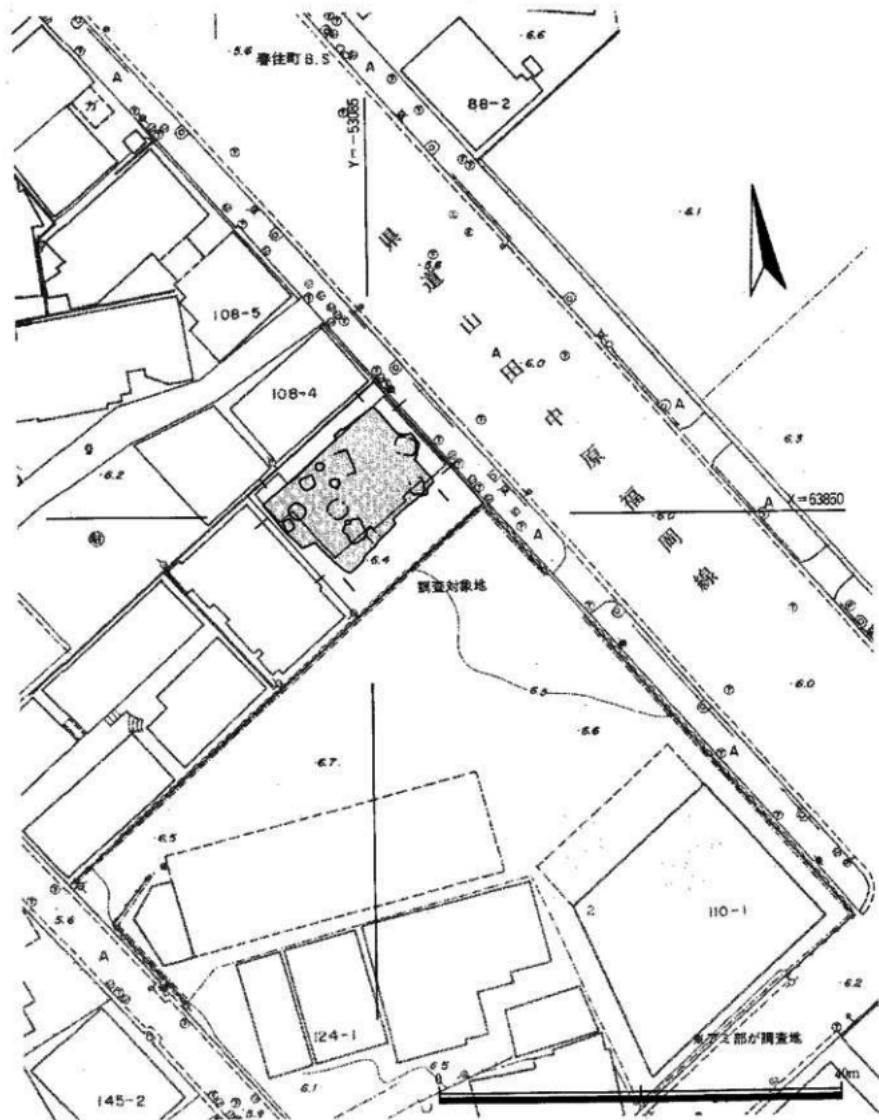
II. 調査の記録

1. 調査の経過

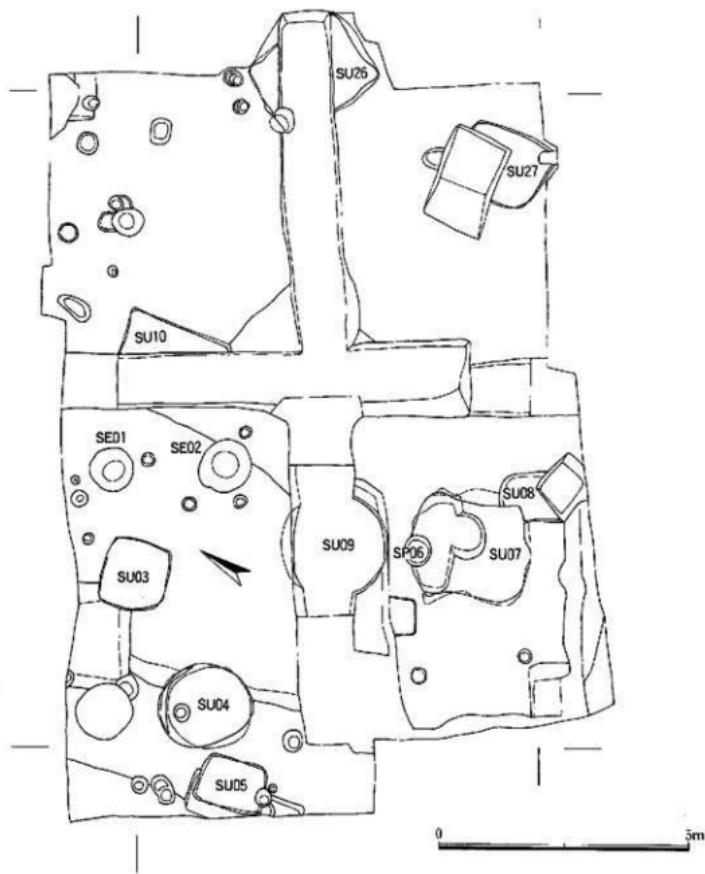
対象地は調査前には戸建て住宅が立てられており、これを解体撤去後に調査に着手した。調査前の標高は西側6.1m、東側5.9mである。聞き取りによると対象地周辺では戦後の区画整理で1m程度のカットが行なわれてあり区画整理以前は申請地東側が小高い高まりになっていたとのことである。本調査区は比恵遺跡の北西部にあたり、周辺の試掘結果などから本来は台地本体との間に川河川が貫流する島状の洪積丘陵にあたると考えられる(第1図参照)。調査はまず重機による表土除去から行い、遺構面である島栖ローム層上面を露出させたのち人力による遺構確認・掘り下げ作業を行った。なお廃土を場内で処理する必要から、最初に対象地の西側半分の調査を終えた後廃土を反転し東側の調査を行うこととした。



第1図 調査区位置図1 (1/5,000)



第2図 調査区位置図2 (1/500)



第3図 全体図 (1/100)

遺構面は表土を10cm~40cm除去したところで露出した鳥栖ローム層上面で、遺構面標高は西側で6m東側で5.7mを測る。遺構面の傾斜はなく擾乱・削平により遺構面の高低ができる。

擾乱・削平で遺構の残存状態は良好とはいえないが、弥生時代後期の井戸2基、前期の貯蔵穴9基、その他ピットを検出している。また注目すべき遺物としてピット(SP06)から出土した辰砂があげられる。出土は県内で4例目で、これについては巻末に本市埋蔵文化財センターで行なった分析結果を提示している。

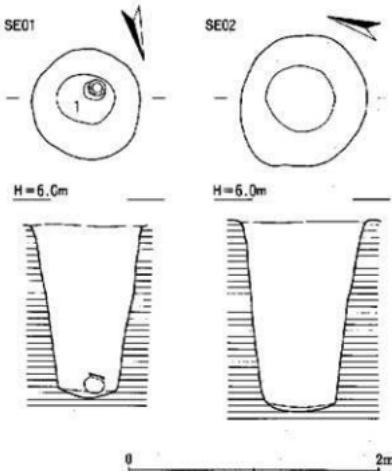
2. 井戸 (SE)

井戸は調査区中央部分の北側で2基検出している。北側をSE01、南側をSE02とする。

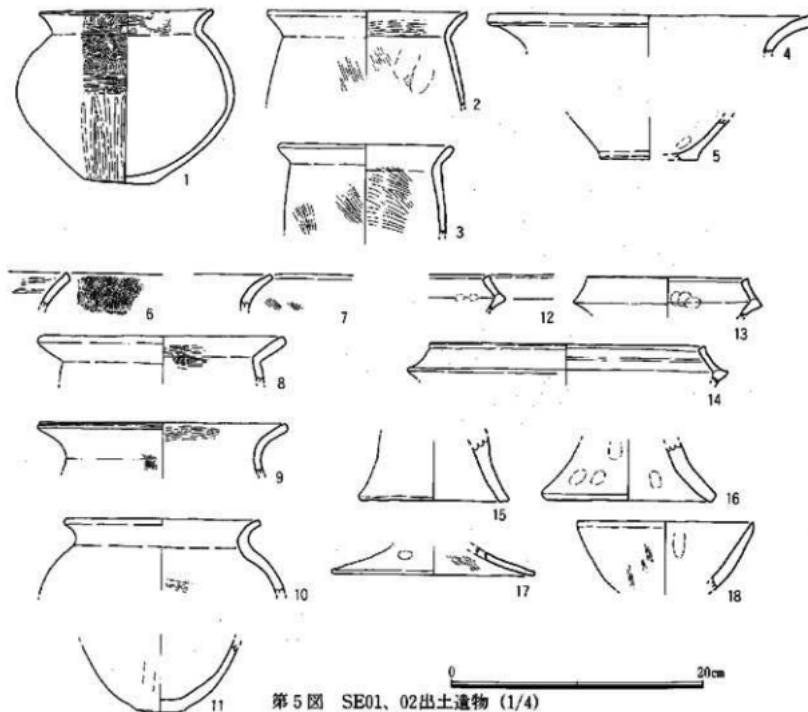
SE01 (第4図)

平面径90cm、底面径45cm、深さ135cmを測る。壁は底面に向かってすばりながら直線的に掘り下げられている。掘削は鳥栖ロームにとどまっており下位の八女粘土には至っていない。埋上は鳥栖ロームブロックを含んだ暗褐色土である。底面からわずかに浮いて完形の壺が正置されている。弥生時代後期前半に位置付けられる。

出土遺物（第5図 1~5） 1は底面出土の完形の壺である。底部はほぼ平底である。胴部外面上半は縦刷毛の後に横方向のミガキを行い、下半は縦方向のミガキを行なう。内面は口縁部に横刷毛を残し、胴部はなでによる。2~5は甕である。



第4図 SE01、02実測図 (1/40)



第5図 SE01、02出土遺物 (1/4)

2は脇部外面縦刷毛、内面は横刷毛の後なでを行なう。口縁部内面には横刷毛を行なう。3は脇部内外に刷毛目が残る。4は口縁部破片で内外面横なで。5は2次的に熱を受ける。

SE 02 (第4図)

平面径100cm、底面径55cm、深さ150cmを測り、SE01より一回り掘り方規模の大きな井戸である。壁は底面に向かってすぼまりながら直線的に掘り下げられている。SE01同様掘削は鳥栖ロームにとどまっており下位の八女粘土には至っていない。埋土は鳥栖ロームブロックを含んだ暗褐色土である。弥生時代後期後半～終末に位置付けられる。

出土遺物（第5図 6～18）6～9は甌の口縁部破片である。6・7は外面に縦刷毛を行なう。7以外には内面に横刷毛が残る。10は甌の口縁部である。器面が荒れて調整は不明瞭であるが、脇部内面の一部に横方向の刷毛目が認められる。11は底部破片である。外面には板なでを行なない、内面はなでである。底部は小さなレンズ状を呈する。12～14は複合口縁の甌口縁部である。口縁屈曲部より上はわずかに外反気味に立ち上がり、端部は上方に摘み上げる。12・13の屈曲部内面には棒状工具の刺突により器面を押えた痕跡が残る。15・16は器台である。17は高杯の脚部である。焼成前に穿孔が行なわれる。18は鉢である。外面には縦方向の板なで刷毛が行なわれる。内面は指揮の後横なでを行なう。

3. 貯蔵穴 (SU)

9基検出している。形状は円形・（長）方形のものがありレーパートリーに富んでいる。調査区が狭いため分布状況に規則性などは見出せない。

SU03 (第6図)

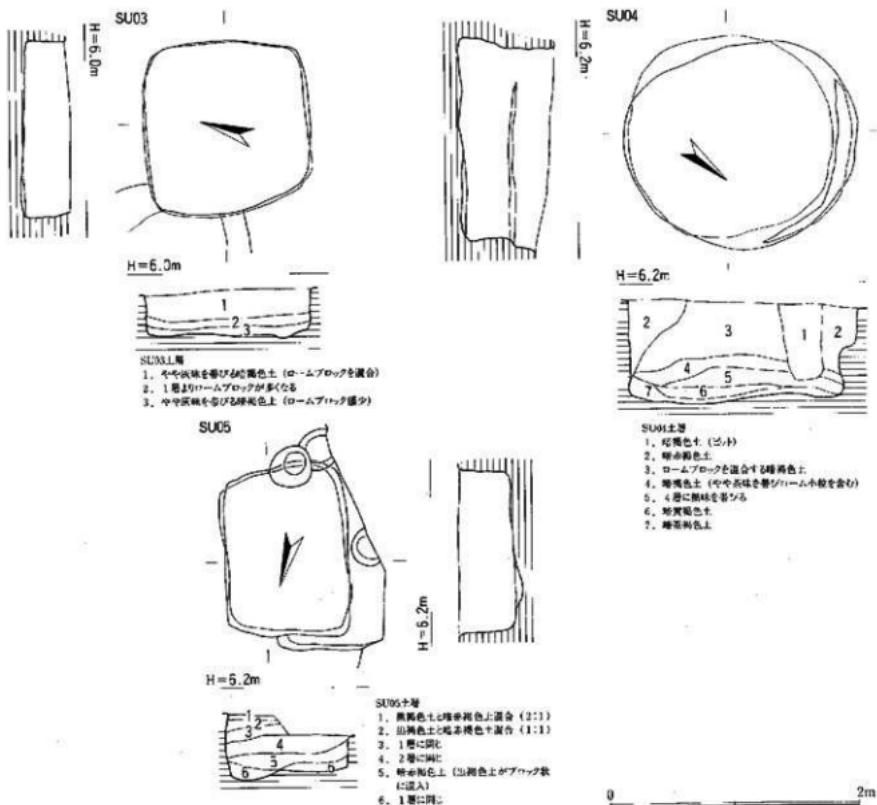
平面隅丸方形を呈し、一边約1.4mを測る。検出面からの深さは40cmで壁はほぼ直立する。底面は一部に緩くくぼむ部分があるが、全体にはほぼ平坦である。埋土は変化が少なくロームブロックの混入度によって分層している。弥生時代前期末頃に位置付けられる。

出土遺物（第7図）19・20は小型の甌である。19は肩部に沈線状の段を有する。外面は丁寧な横ミガキを行い、内面は口縁部近くは横ミガキでこれ以下はなでである。20は底部である。端部は外側に張り出し、上げ底となる。内面はミガキを行なう。21・22は甌である。21は如意状口縁部外面に刻みを行なう。外面縦刷毛、口縁部内面に横刷毛が残る。22は口縁部外面に断面三角形の粘土帯を貼り付ける。また口縁下にも三角形の突帯を貼り付ける。23は甌の口縁部である。内外面に横ミガキを行なう。24は基部を欠損した玄武岩製の石斧である。身の幅7.3cm、厚み3.5cmでやや扁平である。刃先に使用時の擦痕が残る。重量525gを測る。25は石包丁の木製品である。

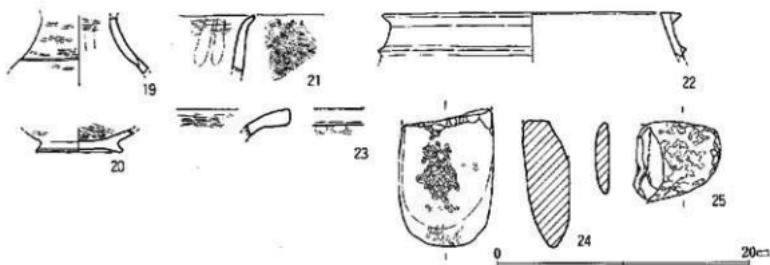
SU04 (第6図)

平面はやや歪な円形を呈し、径1.9～1.6mを測る。検出面からの深さは80cmである。壁は現状では底面付近がわずかに抉れるのみであるが、土層観察から本来はフ拉斯コ状に掘削されていたことがわかる。また北側には一段幅の狭い平坦面を有している。底面は全体に継やかな凹凸が多く残る。埋土は3層にロームブロックが混入し、4～7層にはブロックの混入がほとんど見られない。4層以下に特に大破片が多く含まれる。弥生時代前期後半に位置付けられる。

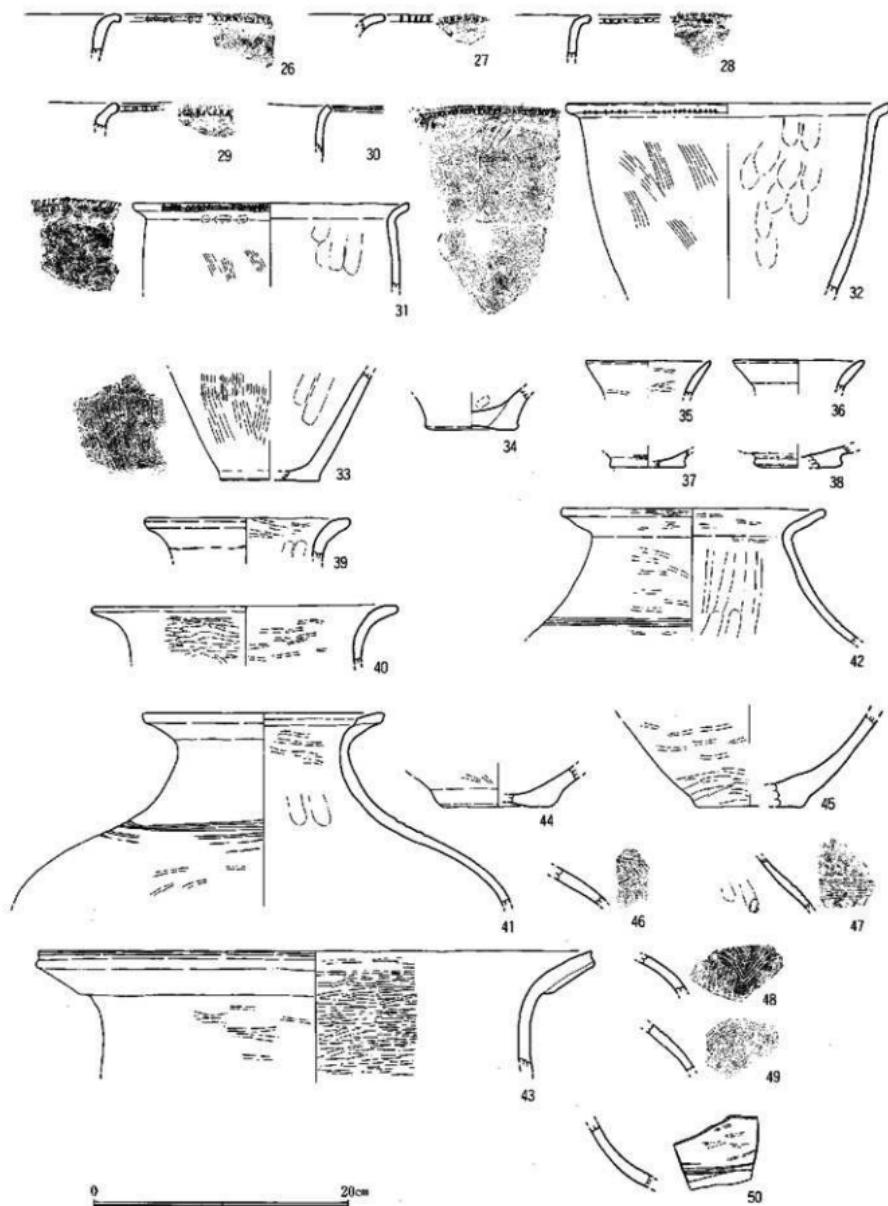
出土遺物（第8・9図）26～32は如意形口縁を呈する甌である。口縁部の屈曲が強くなるものが多い。基本的には口縁下端部に刻みを行なうが、27・31は全面に施し、30には刻みが行なわれていない。31・32には外面に縦刷毛が行なわれる。33・34は甌の底部である。33には外面に縦刷毛が施され、脇部下端には横方向の削り状の調整が行なわれる。34は外面にミガキ状の板なでを行なう。外底面は上げ底となる。35・36は小型甌の口縁部である。内外面ミガキを行い、36は外面に継やかな段を有す



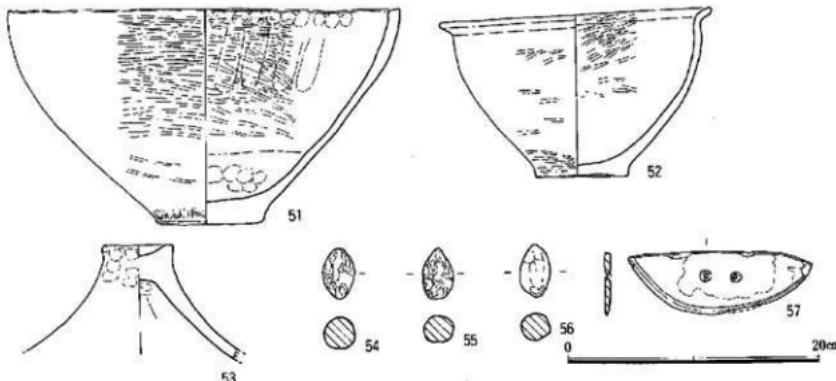
第6図 SU03、04、05実測図 (1/40)



第7図 SU03出土遺物実測図 (1/4)



第8図 SU04出土遺物実測図1 (1/4)



第9図 SU04出土遺物実測図 2 (1/4)

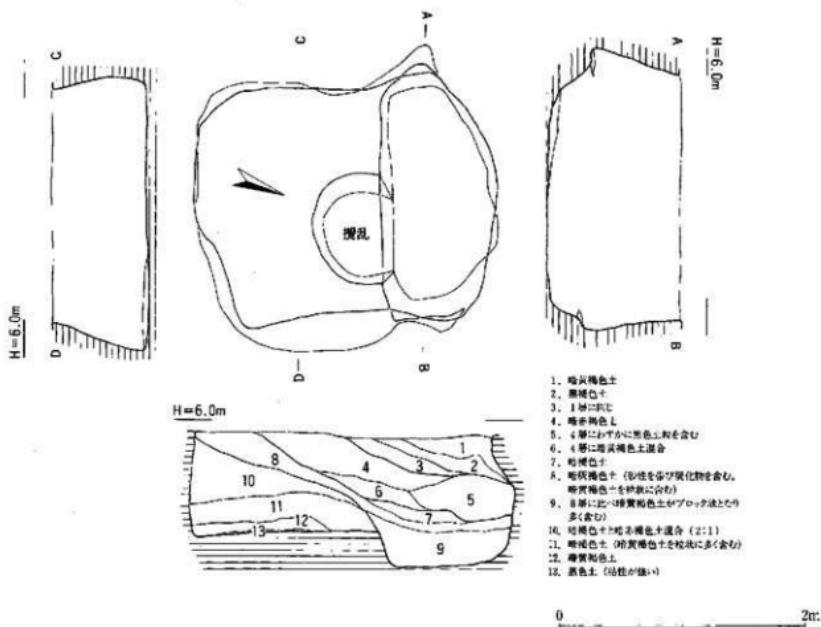
る。37・38は小型壺底部である。平底で外面には丁寧な横ミガキを行なう。39~43は中・大型の壺口縁部である。39は口縁部下端外面に粘土接合痕跡が残り痕跡的な稜をつくるが、明瞭な粘土帶の貼り付けは認められない。また口縁部外面は横なでである。40は端部を強く外反させる。外面横ミガキを行なう。41は口縁部上面に粘土帶を乗せる。内面は頸部までミガキを行なう。肩部外面には5条の沈線が巡る。42は口縁部を「く」字状に屈曲させる。肩部外面に2状の沈線が巡る。内面のミガキは口縁部の屈曲部分までである。43は口縁部外面に粘土帶を貼り付け肥厚させている。44・45は壺の底部である。外面横ミガキを行なう。46~50は文様を有する壺の胴部破片である。46は無輪羽状文、47・50はヘラ描きの沈線、48・49は重弧文である。51・52はともに完存に近い鉢である。51は口縁端部は内傾し、端面を指揮している。外面は横ミガキを行なうが底部直上は纏刷毛を行なう。内面は底部近くまで横~斜めのミガキを行い、下半1/4ほどから指揮を行なう。52は口縁部を「く」字状に屈曲させる。調査はミガキによる。底部は外縁を肥厚させるためやや上げ底状となる。53は蓋である。外面天井部がくぼみ、上部には指頭痕が残る。54~56は土製の投弾である。重量は20g、19g、19gを測る。57は粘板岩製の石包丁である。孔の心々間で2.3cmを測る。

SU05 (第6図)

平面隅丸長方形を呈し、長軸1.4m、短軸1mを測る。検出面からの深さは55cmで壁はほぼ直立する。底面は南半分はほぼ平坦であるが北側は緩やかな凹凸が多い。埋土は全体に黒褐色土と暗赤褐色土の混合土で構成され、堆積状況は水平に近く人為的な埋め立てが行なわれたものと考えられる。遺物は小破片が数点出土するのみで時期は不詳である。

SU07 (第10図)

平面は中央部分がややくびれた帯状隅丸長方形を呈し、長軸2.4m、短軸1.8mを測る。検出面からの深さは110cmで調査区内の貯蔵穴ではもっとも残存状況が良好である。短軸方向の東西両壁はオーバーハングし、長軸方向の南壁はほぼ直立している。底面は南側が平坦で、北側は沿いに30cmほど深く掘り込まれている。埋土は1~9層が南端側から流入した状況を示しており、本来の形状としては出入り口が南端部分につき、断面はL字に近いものであったと考えられる。また10~13層は1~9層に先行する埋土と考えられ、埋没後の掘りなおしが想定できる。この際掘りなおす前の貯蔵穴は10~13層の堆積状況から断面フラスコ状に近いものと考えられる。遺物は本調査検出遺構のなかで最

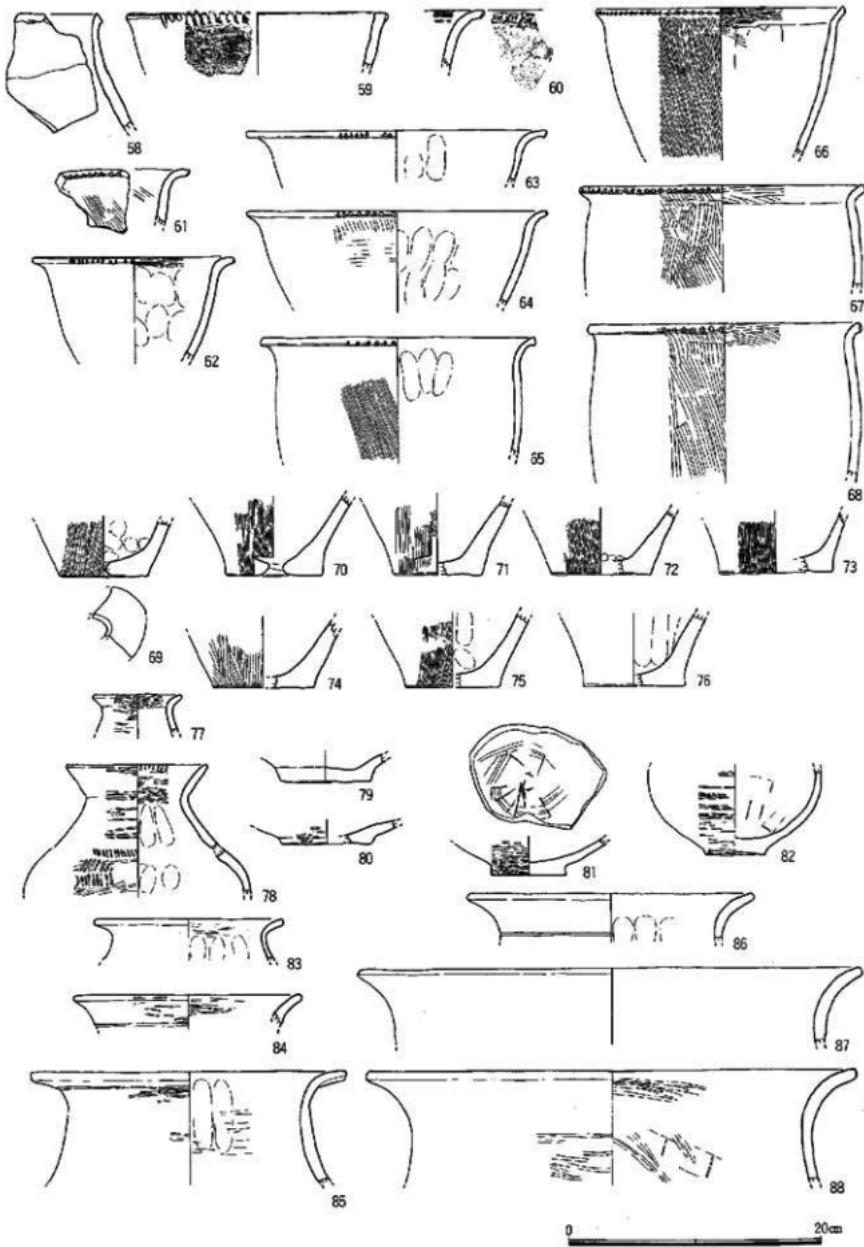


第10図 SU07実測図 (1/40)

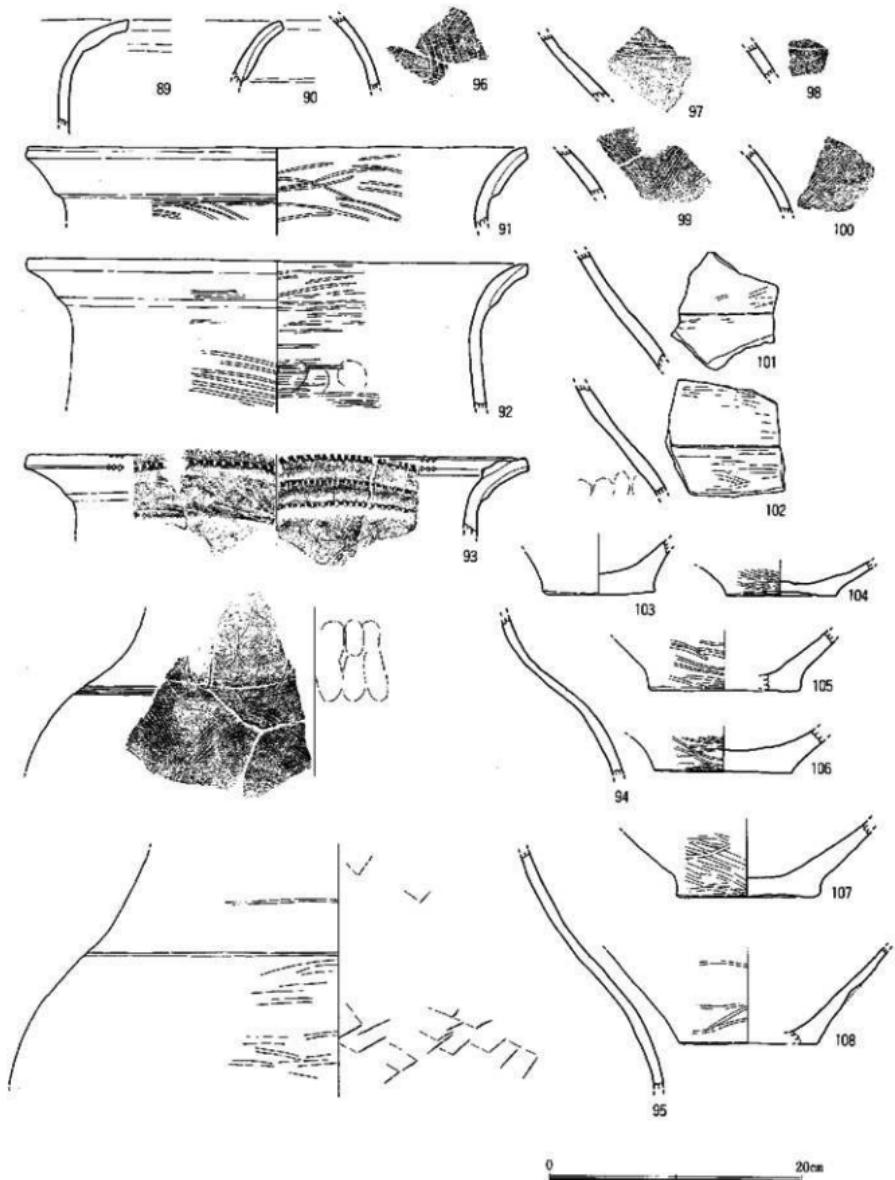
も多くコンテナ9箱出土している。また図示した遺物中65・78・81・88・93・95はSU09出土遺物との接合資料である。弥生時代前期後半に位置付けられる。

出土遺物 (第11~13図)

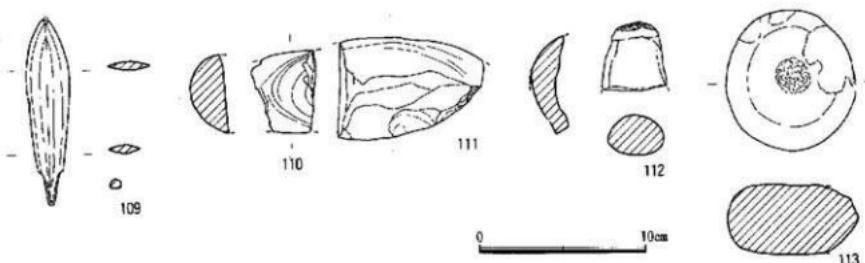
58~76は甕である。58・59は宽带文系である。60は口縁端部を折り返し丸く仕上げる。端部の刻みはほぼ全面に対して行なわれる。61は外外面に刷毛目が残る。62は口縁部内面に横刷毛を行い、外面は縱方向の丁寧な板なでによる。63は口縁部内外面は横なでを行なう。胴部外面は丁寧なでである。61・62の刻みは端部全面に行なわれている。64は肩曲部外面に縱刷毛を行い、その下には横刷毛が残る。また横刷毛の下は丁寧な縱方向のなでを行なう。61・62・65は2次的な焼成を強く受ける。剥落が進むが外面に縱刷毛が残る。また口縁端部を垂下させている。66~68は外面縱刷毛、口縁部内面横刷毛を行なう。66は口縁部外面に一部横なでを行なう刷毛目が消える部分がある。いずれも刻みは下端部に行なわれている。69~76は底部破片である。69・70には焼成後の穿孔が行なわれている。69~75は外面下端部分まで縱刷毛を行なうが、76は板状工具による縱方向の丁寧なでを施している。内面はいずれもなでによる調整を行なう。77~82は精製の小壺である。77は肩曲部分に痕跡的に稜を作る。78是有軸羽状文の彩文を施すが顔料はすでにほとんど剥落し、痕跡的であるがわずかに赤色顔料を残す。調整は外面及び口縁内面に丁寧な横ミガキを行なう。胴部内面には接合痕跡が残る。79~82は底部である。81は胎土・色調・接合関係などから78と同一個体の可能性がある。内面には螺旋状に板状工具の小口痕が残る。82は胎土に砂粒を比較的多く含む。外面は横ミガキを行い、内面には工具小口



第11図 SU07出土遺物実測図 1 (1/4)



第12図 SU07出土遺物実測図 2 (1/4)



第13図 SU07出土遺物実測図 3 (1/3)

痕が残る。83～108は中・大型の壺である。いずれも口縁部の外反は比較的強い。口縁部外面は84・85・89・90・91・92・93が段を有し、86は沈線を刻んでいる。84は内外面に赤褐色の化粧土を塗布する。また93は内外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、口縁上端・下端および内面粘土帯の両端部の4箇所に刻みを施している。94は肩部に3条の沈線をめぐらせその下に重弧文を刻む。95は肩部に1条の沈線を巡らせる。96～102はヘラ描きの文様である。96是有輪羽状文、97・101・102は肩部の沈線、98・99・100は重弧文である。103～108は壺底部である。胴部外面は103は板状工具によるなでを行なうが、他は横ミガキを行なう。また外底面はミガキもしくは丁寧なでにより平滑に仕上げられる。103・108は2次的な焼成を受けている。109はほぼ完存する頁岩製の柳葉形磨製石鎌である。重量19gを測る。110・111は堆積岩性の大型蛤刃石斧である。石質は同じで同一個体の可能性が高いが接合しないためここでは両者を図示する。破面以外は非常に平滑で敲打等の痕跡は観察できない。112は砂岩性の砥石の転用品である。先端に敲打痕が残る。113は風化の著しい砂岩製の磨き石である。

SU08 (第14図)

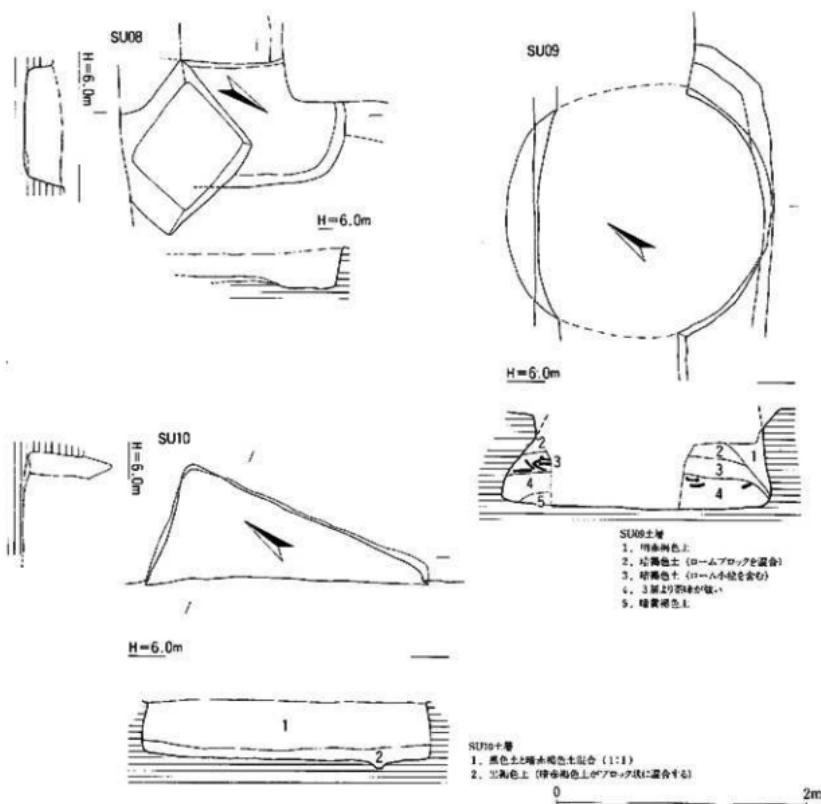
SU07に西側のコーナー部分を切られる。規模・形状はSU05に近い。南側を擾乱で久くが幅1mの平面隅丸方形を呈する貯蔵穴である。検出面からの深さは25cmである。底面は一部に緩くくぼむ部分があるが、全体にはほぼ平坦である。埋土は黒褐色土である。出土遺物および切りあい関係から弥生時代前期中頃一後半に位置付けられる。

出土遺物 (第15図 114～117) 114～116は壺である。114は口縁部外面にわずかに段が作られる。肩部には3条の沈線が巡る。調整は外面ミガキ、内面は頸部までミガキを行い以下は胴部中位まで縱方向の指なで、下半はなでを行なう。115には沈線の後にヘラ状工具による施文を行なう。116は小壺の底部である。117は蓋の口縁部であろうか。

SU09 (第14図)

平面は径2m弱の円形を呈するが、中央を大きく擾乱されており残存状態は不良である。検出面からの深さは80cmで壁はオーバーハングし断面フラスコ状となる。底面は全体にはほぼ平滑となっている。3・4層中から遺物が多く出土する。遺物にはSU07との接合資料(65・78・81・88・93・95)があり、弥生時代前期後半に位置付けられる。

出土遺物 (第15図 118～131) 118～126は甕である。118～123は口縁部～胴部上半の破片である。口縁部の屈曲は比較的強く、胴部はやや丸みを帯びる。口縁部の刻みは118以外は端部全面に行なわれる。胴部の調整は118・122は外面なでによるが、122は屈曲部分に縦刷毛が残る。この他は外面縦刷毛を行なう。また120のみ口縁部内面に横刷毛を行なう。124～126は底部から胴部下半である。外



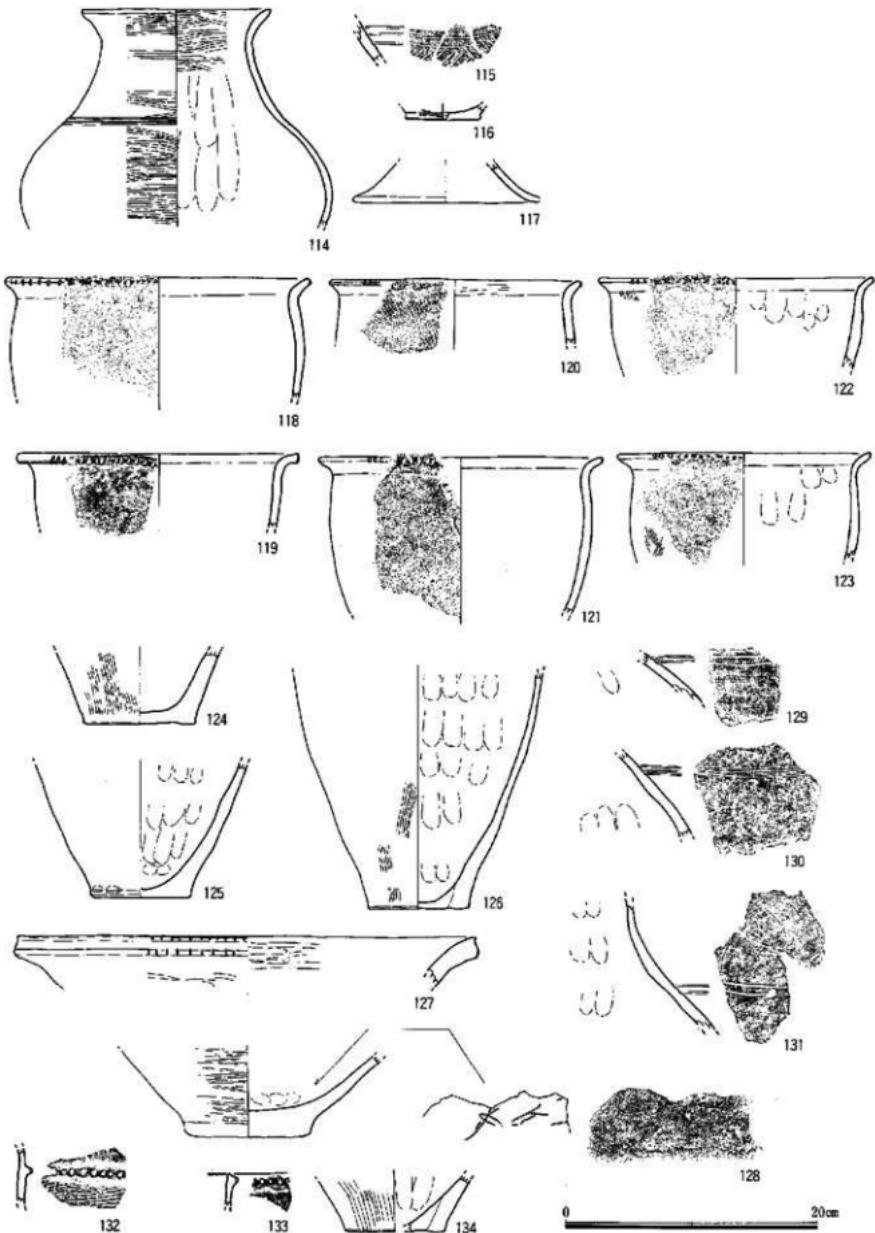
第15図 SU08、09、10出土遺物実測図 (1/4)

面は124・126が縦刷毛、125は縦方向の板なでである。127-131は蓋である。127は口縁部破片で口縁部下端に刻みを行い、口縁部外面には小U痕を残す。128は底部である。外面は横方向のミガキを行なう。内面は胴部は板なでを行い、底部は植物束状の工具でランダムになでている。また胴部内面最下位には調整後にヘラ状工具による線刻状の痕跡が観察できる。位置が内面の底部直上であり線刻といいうには不自然な点もあるが弧状に回転してついた刻みも確認できることから可能性を考える意味で図示しておきたい。129-131は胴部破片である。129は頸部にも沈線を施す。

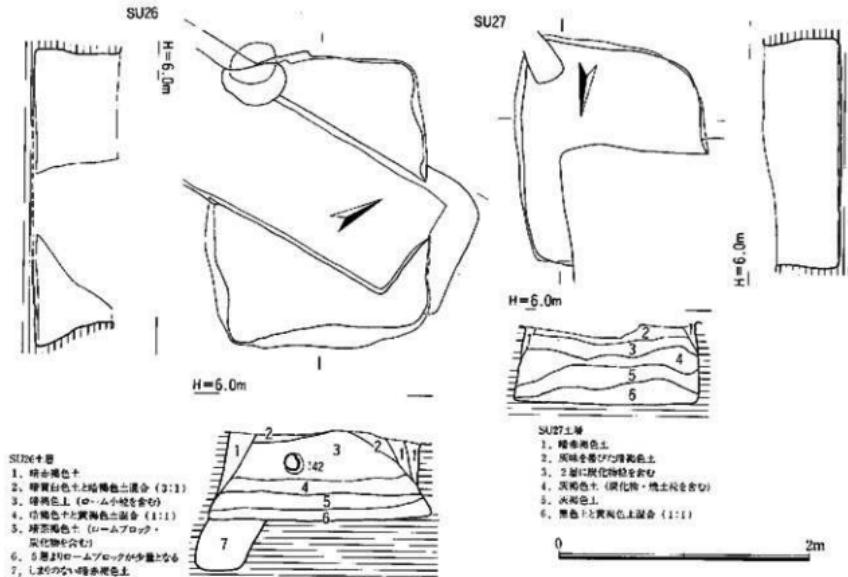
SU10 (第14図)

西側の2/3程度を擾乱で失っている。平面隅丸長方形を呈すものと考えられ、残存する東壁は長さ2mを測り平面規模はSU26に近いものと考えられる。検出面からの深さは40cmで壁はわずかに抉れています。底面は全体にほぼ平坦である。埋土は混合土主体で人為的な埋め戻しが想定できる。遺物は少量で弥生時代前期の遺構といえるのみである。

出土遺物 (第15図 132~134) 132・133は尖帯文系の甕である。134は甕の底部である。外面縦刷毛を行い、内面には縦方向の指なで痕跡が残る。



第15図 SU08、09、10出土遺物実測図 (1/4)



第16図 SU26、27実測図 (1/40)

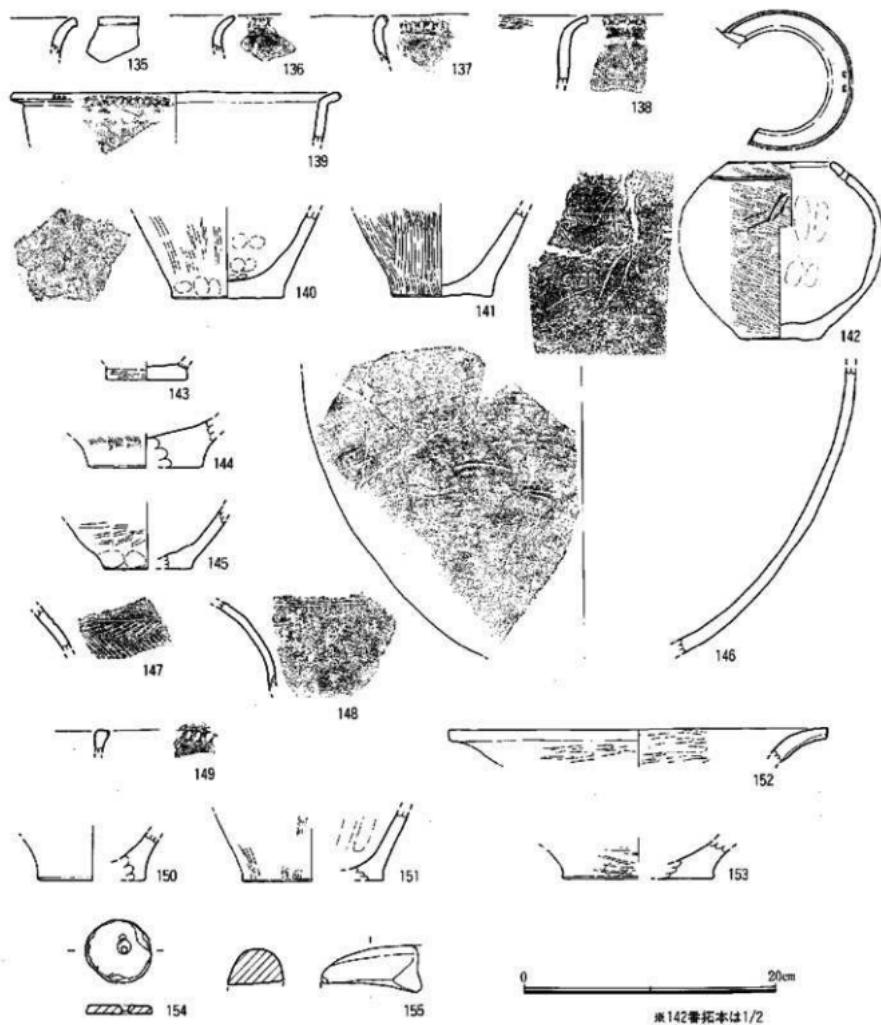
SU26 (第16図)

中央部を擾乱で失っている。平面隅丸長方形を呈し、長軸2.1m、短軸1.7m、検出面からの深さ70cmを測る。壁はオーバーハンジし底面に向かって抉りこんでいる。底面は全体にはほぼ平坦である。また底面西側コーナー部分には径50cm深さ40cmの柱穴状の掘り込みがある。壁の掘削は貯蔵穴本体の壁の傾斜に沿って掘削されており、底面は水平となっている。埋土はしまりのないロームで柱痕跡は認められない。機能は不明であるが、貯蔵穴に伴う何らかの施設であろう。またこれに関連して本貯蔵穴は掘り方上面形で四隅がややふくらみを持つことが確認できる。コーナーに柱を立てた痕跡の可能性もあるが、断面形の観察結果とは整合しないためこれも機能は不明である。埋土は下位ではほぼ水平に堆積している。弥生時代前期中頃～後半に位置付けられる。

出土遺物 (第17図 135～148) 135～141は甕である。135は口縁端部をわずかに垂下させ、刻みは行なわない。136・137・139は口縁端部全面に刻みを行なう。138は口縁下端に刻みを行い、口縁下には沈線を有する。139には外面屈曲部に明瞭な指頭痕が残る。140・141は底部である。外面は繊刷毛を行なう。142は3層中から横置された状態で出土した無頸壺である。擾乱により口縁部の一部を欠くが本来は完形であったものと考えられる。口縁下に2個1組の焼成前穿孔が行なわれる。外面はヘラミガキを行い、口縁下に2条の沈線を巡らせると共にヘラ描きによる線刻が行なわれる。線刻のモチーフは不明であるが、印象的には鳥を模したものと考える。143～148は壺の破片である。147には沈線下に無輪羽状文が刻まれる。148には2条の沈線が刻まれる。

SU27 (第16図)

平面隅丸長方形を呈する。長軸1.7m、短軸1.4m、検出面からの深さは60cmを測る。壁は緩く湾曲



第17図 SU26、27出土遺物実測図 (1/4)

し、底面はほぼ平坦である。断面から従来はさらに上部がすぼまっていたものと考えられる。埋土は2～5層は灰味を帯び3・4層に炭化物、4層には焼土粒も含まれている。遺物は少量で時期は不明瞭ながら、弥生時代前期中頃～後半に位置付けられよう。

出土遺物（第17図 149～155） 149～151は甕である。149は突堤文系である。150・151は底部破片である。150は外面板などで、151は外面縦刷毛による。152は甕の口縁部である。外面を肥厚させ、稜の薄い段を有する。調整は内外面横ミガキである。153は甕底部である。外面ミガキを行う。154は片岩性的紡錘車である。側面は粗く削っている。また片面に穿孔途中の痕跡が残る。重量は34gを測る。155は堆積岩製の大型蛤刃石斧の破損品である。SU07出土の110・111と同型の石斧であるが、石質は異なる。

4. ピット (SP)

削平のため検出個数は少なく建物としてのまとまりを抽出することはできなかった。ここでは辰砂の出土したSP06のみ報告する。

SP06 (第18図)

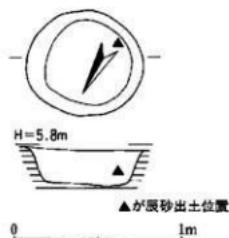
SU07の北端部分でこれを切って検出す。径60cm、深さ17cmを測る残存状態の悪いピットである。埋土はロームを含まない暗褐色土である。辰砂は掘り下げ途中の底面から5cmほどの位置から出土した。すでに掘り上げた跡で細かな分布は知れないが、掘り上げた埋土を観察すると、幅1cm、長さ6cmほどの部分が辰砂の影響で赤くなっているが、厚みはなくほとんど線的に確認されたのみである。可能な範囲で埋土の選別・洗浄等を行なったがこれ以上は確認できなかった。おそらく辰砂粒が埋土内に流入したような状態でこの際に一部が擦られて発色したものと考えられる。取り上げた辰砂粒は18gで極微量である。遺物は少破片が数点のみで時期は不明瞭であるが、切りあい関係および内面に刷毛目を有する破片がないことなどから、弥生時代中期を考えておきたい。なお辰砂について本市埋蔵文化財センターにおいて分析をおこなっているので参照されたい。

5. 小結

今回の調査地点は削平が進み遺構の残存状態があまり良好とはいえないが、重要な遺物が確認されておりこれについて簡単にふれておきたい。

まず貯蔵穴出土の線刻を有する土器をあげることができる。SU26出土無頭壺（142）の胸部外面に刻まれた線刻はデフォルメの進んだ抽象的なもので類例を見ない。あくまで印象的な判断であるが鳥をモチーフにしたものと考えておきたい。時期的には前期後半の範囲で捉えることができ、確認できる弥生時代の線刻土器としてはもっとも時期的にさかのばる資料である。またSU09出土の甕底部内面で観察したもの（128）は、位置的に不自然な感は免れず調整痕跡の一部を見ることが妥当とも考えたが、弧状に回転してついた部分もあり今回は可能性を考える上で図示を行なった。

また時期不明のピット出土ではあるが極少量の辰砂粒の出土が見られた。本地点から直線距離で500mほど離れる比恵遺跡57次調査地点では弥生時代中期後半～末に位置付けられる竪穴住居内のピット内から挙大の塊として出土している。この他前原市三雲遺跡（2個）、福岡市南八幡遺跡（1個）で辰砂の確認がなされている。いまだ資料的に十分とはいえないが現状では弥生時代中期後半～後期の遺物と共に出土し、比恵遺跡出土例以外は小粒1個ずつの出土である。今後資料数が増えることにより流通等の諸問題に言及することが可能になるであろう。



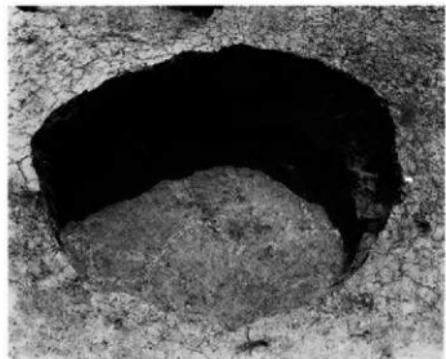
第18図 SP06実測図 (1/30)



1. 西半全景（東から）



2. 東半全景（西から）



3. SU04（南から）



4. SU04土層



5. SU05（西から）



6. SU07（西から）

図版 2



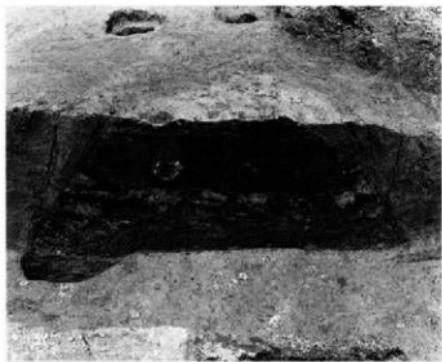
1. SU09(南から)



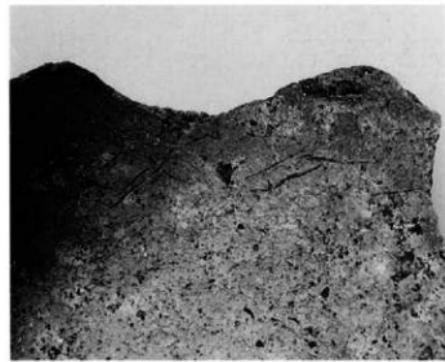
2. SU09土層



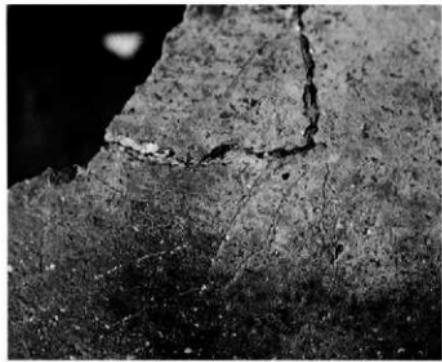
3. SU026(南から)



4. SU026土層



5. SU09出土遺物(128)



6. SU026出土遺物(142)

比恵遺跡69次調査で出土した赤色物質の保存科学的調査

福岡市埋蔵文化財センター
比佐陽一郎・片多雅樹

はじめに

比恵遺跡69次調査の土中より、暗赤紫色の土塊が少量ながら検出された。発掘調査担当者の長家氏と筆者らには、1995年に調査された同遺跡の57次調査出土資料の経験から、この土塊が赤色顔料「朱」の原石の「辰砂」であることが推測された。埋蔵文化財センターにおいて、その確認を目的とした調査を行ったので、ここに結果を記す。

資料の概要

資料は暗赤紫色の部分を土ごと切り取った状態で保管されており、その範囲は約 $5 \times 2.5 \times 1$ cmを計る。今後の保管・活用も考え、対象物が集中している部分以外の土はできる限り削ぎ落として整形したが、出土状況を記録として残すことを考慮に入れ、水洗は行っていない。また落とした土にも幾らかの対象物が含まれており、こちらは水に溶かして比重選別を行い、残った対象物を分離した。資料の重量は、取りきれない余分な土がまだ相当量付着しており、あまり意味を為す数値とはいえないが、土を含む塊と土中より選別抽出したものを併せて18gを計る。

肉眼ではやや暗く見えていたが、実体顕微鏡による観察では、特に別途抽出したものは鮮やかな赤色を呈し、シャープな劈開が観察される個体もある。粒子の大きさは最も大きなもので約 5×3 mm (重量0.12 g) であるがこれは希な大きさで、1 mmに満たない程度の小さなものが殆どである。

比重測定

比重はゲーリュサック型比重瓶に選別抽出した粒を入れて測定し、式に当てはめて算出した結果、7.99という数値を得た。これは辰砂の8.09~8.2という比重から若干はずれているものの、資料の量など測定精度の問題もあり、ほぼ近い値が得られたものと考えたい。

材質分析

蛍光X線による含有元素分析とX線回折による結晶構造解析を行った。蛍光X線分析には分離した資料から大きめの粒を選び、測定領域が 0.3mm^2 の微小領域用分析装置を用いた。またX線回折分析には分離した資料から1 mm大の粒を選び、瑪瑙乳鉢で擦り潰し粉状にしたものをシリコン無反射板上に薄いて分析をおこなった。粉碎した資料は分析後、薬包紙に包んで保管している。

それぞれの分析条件は次の通り。

【蛍光X線分析】

分析装置：エネルギー分散型微小領域蛍光X線分析装置（エダックス社製/Eagle μprobe）

対陰極：モリブデン(Mo) / 検出器：半導体検出器

印加電圧：40kV・電流： $20\mu\text{A}$

測定雰囲気：真空 / 測定範囲 0.3mm^2 / 測定時間300秒

【X線回折分析】

分析装置：試料水平型X線回折装置（フィリップス社製／PW3050）

対陰極：銅（Cu）

印加電圧：40kV・電流：30mA

検出器：Xeガスプロボーショナル検出器

発散・受光スリット：1°・1°／マスク幅：5mm

走査角度：10~80°(2θ)／ステップサイズ：0.02°／スキャンスピード：0.04°/sec

分析の結果、予想通り蛍光X線では水銀（Hg）と硫黄（S）のピークが観測された（第1図）。また回折ピークが辰砂（Cinnabar）のものと一致し（第2図）、辰砂（鉱石）と同定された。比重も辰砂のそれに近い数値が出ており、これを裏付けている。

おわりに

辰砂鉱石が鉱脈以外から出土する例としては、前原市の三雲遺跡番上Ⅱ-6地区（B4-第4層出土：弥生後期後半）（柳田1980）・同遺跡仲田Ⅰ-16地区（21号住居址：弥生終末～古墳初頭）（柳田他1981）以来、本例で5例目となる。これらは墓地や祭祀遺構に使用された状況ではなく、生活遺構が検出される遺跡内の、しかも加工前の発色が悪い状態での発見であり、まさに調査担当者の経験と注意力の賜といえる。また、この資料の意義については、福岡市内での初例となる比恵遺跡57次調査（28号住居址内ピット出土：弥生中期後半）（本田1997）や、2例目の南八幡遺跡9次調査（2号住居址出土：弥生後期）（比佐他1999）の報告書に記されており、ここに述べるまでもないものと考える。ただ、古代の赤色顔料の利用に関して本田光子を中心とした研究が進み、徳島県若杉山など生産地の調査成果も報告され（岡山1997）、また近年では辰砂に含まれる微量元素からその産地を推定する試み（南他2000）もある中で、この資料が今後、保存科学や考古学を含めた「文化財科学」の中で、重要な位置を占めることは間違いないであろうことを付記しておきたい。今後、更なる類例の発見と研究の進展を期待したい。

貴重な資料の調査と報告の場を与えていただいた長家伸氏に、末筆ながら感謝の意を表します。

参考文献

岡山真知子編1997『辰砂生産遺跡の調査－徳島県阿南市若杉山遺跡－』徳島県立博物館

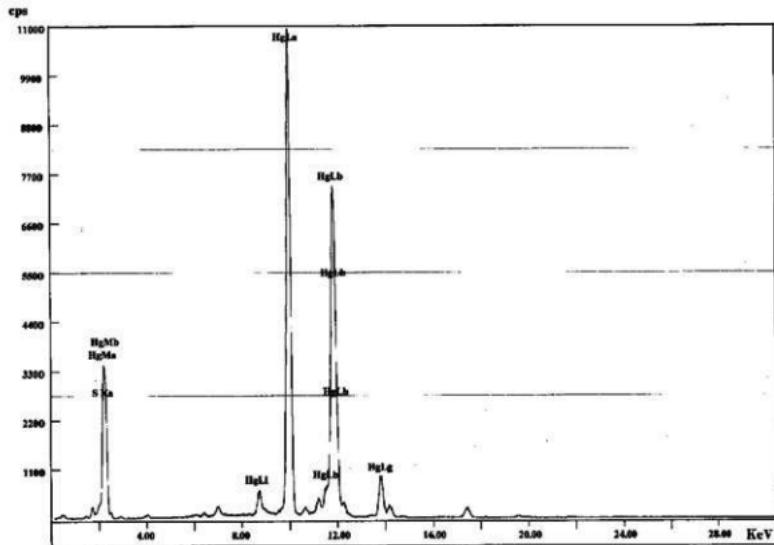
南武志・豊塗秋・今津鶴生2000『朱鉛石の微量元素分析－産地同定のための基礎的研究－』『日本文化財科学会第17回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

比佐陽一郎・片多聖樹・北村幸子・肥隈隆康1999『南八幡遺跡9次調査出土ガラス及び暗赤色小塊物質の保存科学的調査について』『南八幡遺跡5-南八幡遺跡第9次調査の概要－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第641集 福岡市教育委員会

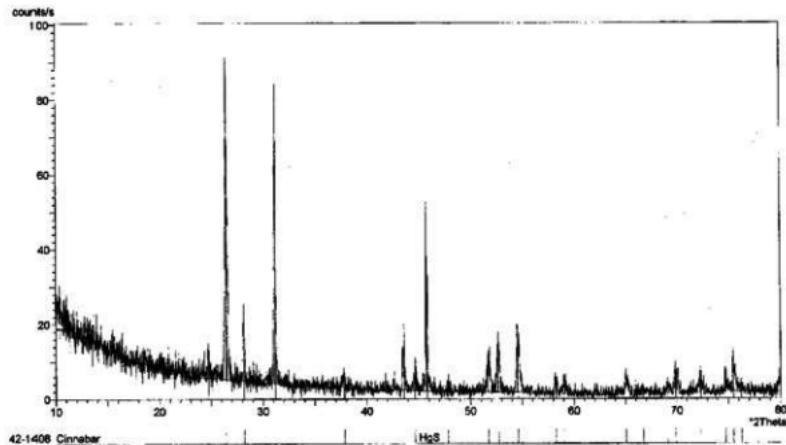
本田光子1997『比恵遺跡57次調査出土の辰砂について』『比恵遺跡（24）－第57次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第530集 福岡市教育委員会

柳田雄雄編1980『三雲遺跡1-糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査－』福岡県文化財調査報告書第58集 福岡県教育委員会

柳田康雄・小池史哲編1981『三雲遺跡II-糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査－』福岡県文化財調査報告書第60集 福岡県教育委員会



第1図 蛍光X線分析の結果



第2図 X線回折分析の結果



写真1 全体像



写真2 水洗・選別したもの

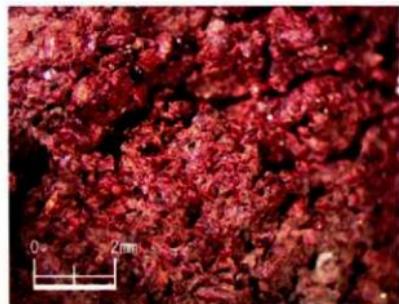


写真3 1の顕微鏡写真（約8倍）

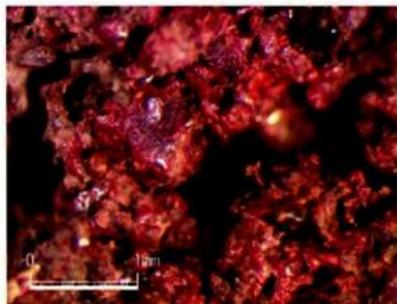


写真4 同左（約20倍）

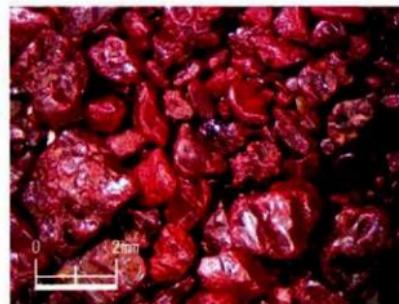


写真5 2の顕微鏡写真（約8倍）

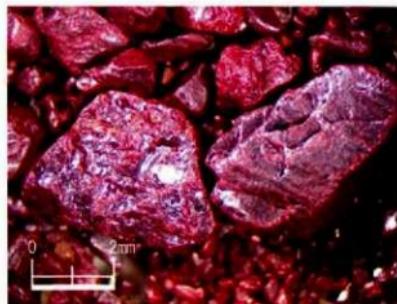


写真6 同左（約8倍）

比恵遺跡群第70次発掘調査報告

遺跡略号 HIE-70
遺跡調査番号 9942

例　　言

1. 本章は福岡市博多区博多駅南4丁目99における共同住宅建設に先立ち、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成11年10月1日から11月15日にかけて発掘調査を実施した比恵遺跡群第70次調査の報告である。
2. 検出した遺構については、住居はS C、掘立柱建物はS B、溝はS D、井戸はS E、上塙はS K、ピットはS Pとし、掘立柱建物、ピット以外は一括して通し番号を付した。
3. 本章に掲載した遺構の実測は担当の井上蘭子の他、瀬戸啓治、吹呉憲治、大坪滋、佐野和美が、写真撮影、製図は井上が行った。
4. 本章に掲載した遺物の実測・写真撮影・製図は井上が行った。
5. 本章の執筆・編集は井上が行った。
6. 本調査の出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理されるので活用されたい。

遺跡調査番号	9942		遺跡略号	HIE-70	
調査地地番	福岡市博多区博多駅南4丁目99				
開発面積	585.12m ²	対象面積	355m ²	調査面積	313.8m ²
調査期間	1999年10月1日～11月15日			分布地図番号	37-0127

I. はじめに

1. 調査に至る経過

1999年5月24日に、有限会社ケンソーより、共同住宅建設に先立ち、博多区博多駅南4丁目99における埋蔵文化財の有無について事前審査申請が提出された。申請地は比恵遺跡群の中心部であり、第5次、51次、19次、20次調査地点が隣接することから、埋蔵文化財課では1999年6月22日に敷地内における試掘調査を行った。その結果、現地表面下約30~60cmで鳥栖ローム面上に遺構が検出された。この成果をもとに協議を行い、建物が建つ範囲においてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存を図ることとした。また、有限会社ケンソーと埋蔵文化財課との間に発掘調査及び資料整理に関する受託契約を締結した。発掘調査は1999年10月1日に着手し、11月15日に終了した。

2. 調査体制

調査委託 有限会社ケンソー

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 西憲一郎（前） 生田征生（現）

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第2係長 力武卓治

調査庶務 文化財整備課 谷口真由美（前） 御手洗清（現）

調査担当 試掘調査 杉山富雄

発掘調査 井上蘭子

調査補助 濑戸啓治

調査作業 石橋テル子 伊藤美伸 乾俊夫 浦伸英 大浦成子 尾花憲吾 桑原美津子 高着一大

酒井康恵 坂田武 志堂寺堂 柴田常人 柴田博 杉村百合子 蘭部保寿 高木美千代

田中肇 辻美佐子 砧板春美 徳水洋二郎 中野裕子 中山竹雄 野村道夫 林厚子

平山栄一郎 吹春憲治 藤原直子 水野由美子 森本良樹 吉田恭子 吉田米男

米倉國弘

大坪滋（福岡大学） 佐野和美（九州大学大学院） 西口貴志（九州大学）

整理作業 板井かおり 佐々木涼子 藤信子 山口とし子

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について有限会社ケンソーの吉永憲正氏をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

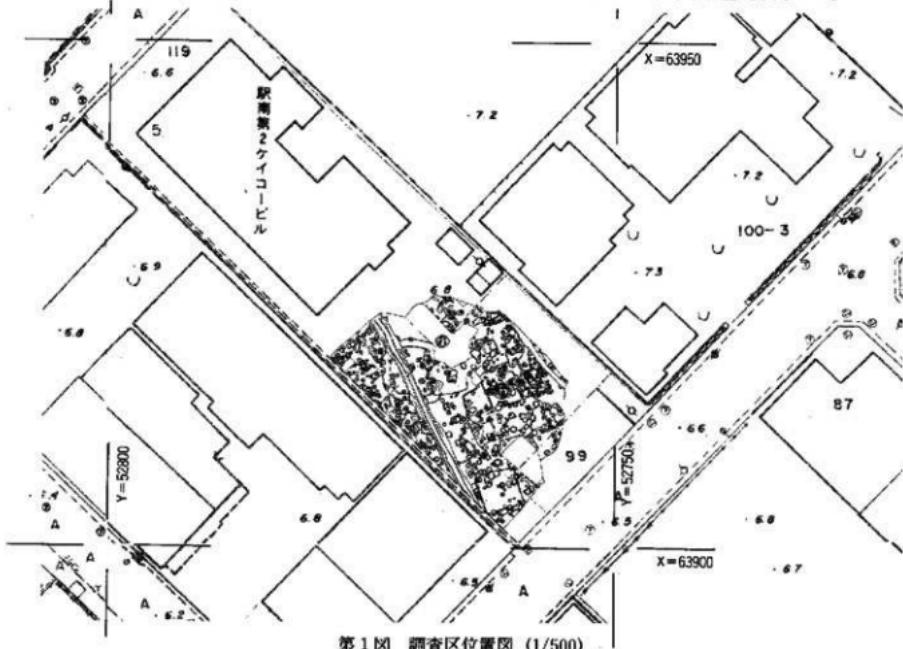
II. 調査の概要

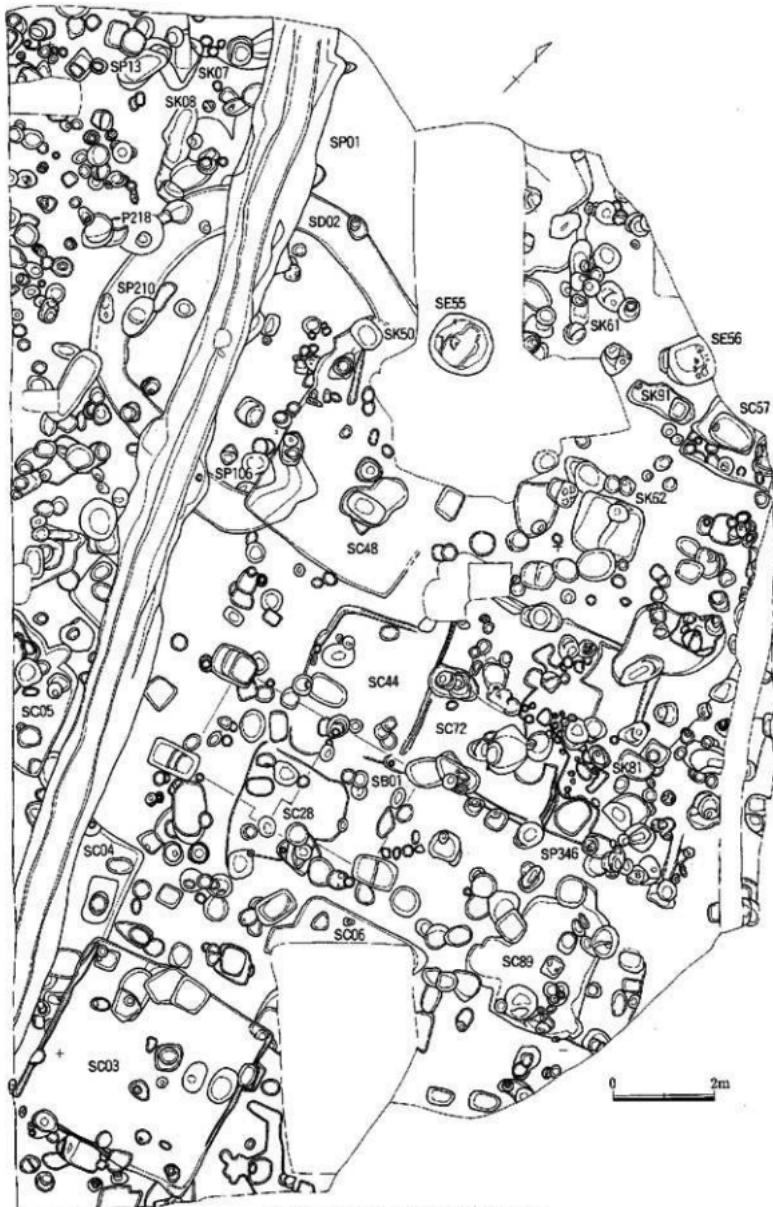
1. 調査地点の位置

本調査区は、比恵遺跡群のほぼ中央部に位置し、北に第5次、東に第51次、南に第19次、西に第22次の各調査地点が接する。第5次調査地点では、弥生時代中期～古墳時代前期にかけての竪穴住居址、弥生時代の掘立柱建物、井戸が検出されている。第51次調査地点では、弥生時代中期後半～古墳時代前期にかけての集落、古墳時代後期、古代の溝などが検出されている。第19次調査地点では、弥生時代中期中葉～古墳時代前期の集落、古墳時代後半、古代～中世の掘立柱建物、溝などが検出されている。第22次調査地点では、弥生時代中期の住居址、古墳時代前期の溝が検出されている。このように周辺では弥生時代中期から古墳時代前期、古墳時代後期から古代にかけての時期が中心となっている。

2. 調査経過

比恵遺跡群第70次調査は1999年10月1日にバックホーによる表土剥ぎから始めた。調査範囲はアスファルトが敷設しており、自転車置場が残っていたため、調査面積はある程度制約を受けることとなった。残土の量が多いために調査区を南西側半分と北東側半分とに分け、反転して調査を行った。アスファルトとバラスを除去すると直下に遺構面である鳥栖ロームが検出された。標高約6.2mで、遺構面はかなり削平を受けているが、遺構は調査区全域で密に分布していた。そのため遺構検出・掘削にかなり手間取ったが、写真撮影、遺構実測を行い、11月15日に撤収、調査を終了した。





第2図 調査区地構配図 (1/100)

III. 調査の記録

1. 遺構と遺物

遺構は標高約6.2mの鳥居ローム上面で全面に検出された。以下遺構ごとに説明を加える。

(1) 穫穴住居址

竪穴住居址は明確でないものを含めて全部で10軒検出された。

SC03 (第3図・図版2)

調査区の南側コーナーで検出された。平面形は4.0m×3.7mのほぼ正方形を呈する。暗茶褐色の埋土を掘り下げるとき黄褐色上となり、いったんこれを床面と考えた。しかし、精査すると、少量の暗褐色土がまだらに混ざっていることが判明し、貼床としてこの面でピット等の検出を行った。住居址の東西2辺に周溝が掘り込まれているが、他の辺は不明である。主柱穴は明確でなく、約10cmの貼床を掘り下げた後も検出されなかった。貼床の上面と下面で土壌がいくつか検出されている。炉跡の位置を示すような焼土・炭化物等は検出されていない。

出土遺物 (第4図1~6・図版4)

出土した遺物はほとんどが細片で時期の判別できるものは少ない。ただ貼床上面と土壌から若干の遺物が検出された。1は高環の脚部である。脚柱は細く、なだらかに裾へ広がる。残高15cmを測る。外面にハケメが施され、丹が一部残る。弥生時代後期前半頃か。2は鉢である。口径17.2cm、器高6.7cmを測る。ボール状を呈する。弥生時代後期後半から終末であろう。3は甕の底部である。底径8.0cmを測り、平底を呈する。弥生時代中期後半であろう。

4は頁岩製の砥石である。残長7.0cm、最大幅5.5cm、最大厚さ2.0cmを測る。なめらかな表面は砥石としての使用面であろう。裏面には玉磨きに使用されたような径1.7cmの碗状のくぼみがある。5は細目の砥石である。粘板岩製であろう。全長14.0cm、最大幅9.0cm、最大厚さ2.0cmを測る。ほぼ全面使用されており、表面はなめらかでかなり使い込まれている。

特筆すべき遺物として、6の棒状鉄製品が挙げられる。残長12.0cm、断面は0.7cm×1.2cmの長方形を呈する。重さは52.73gを測る。一端は破損しているようで、さらに長くなるであろう。メタルチャッカにより測定したところメタル度はMであり、これは錆化していない鐵質がある程度残っていることを示す。この鉄器を実見した長家伸氏から、鋳造品を脱炭処理したもので、鉄素材である可能性が高いというご教示をいただいた。住居址内からはこれ以外に鉄関連の遺物は検出されていない。

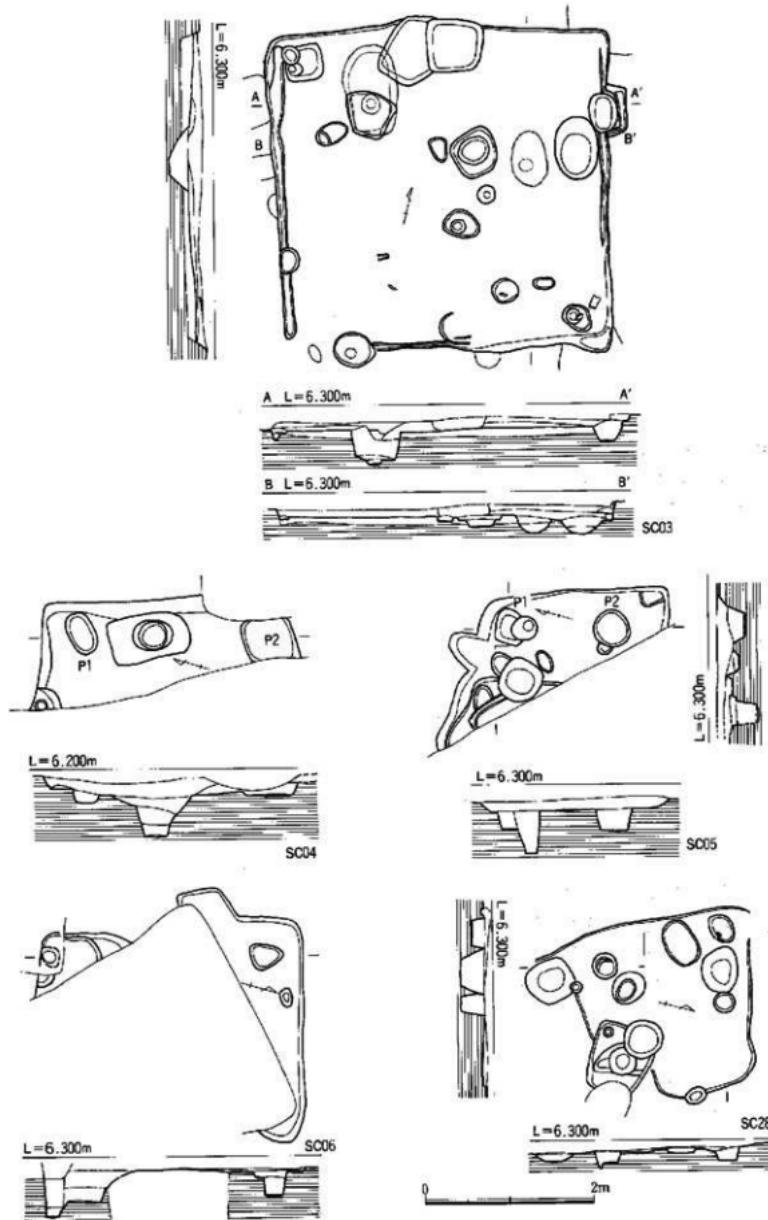
以上、出土遺物から住居の時期は弥生時代後期後半~終末と考えられる。

SC04 (第3図)

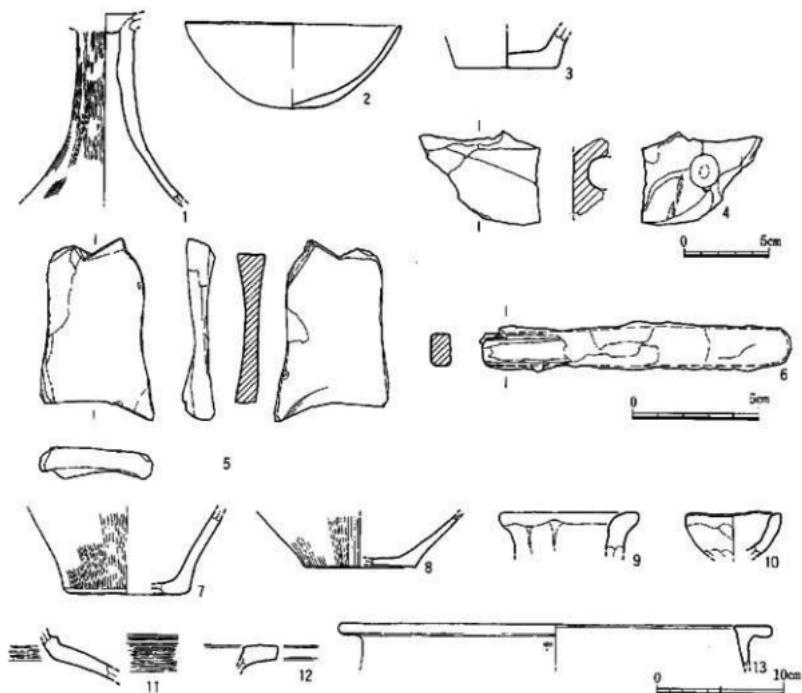
調査区のやや南寄りに位置し、SC03とSD01に接している。半分以上切られているため平面形は不明であるが、SD01を挟んだ反対側には検出されていない。そのため2.9m×1.2m以上の長方形を呈すると考えられる。一応住居址として記述する。周溝、貼床は検出されず、壁の深さは12cmほどである。住居址のコーナーにピットが2つと屋内土壌が検出された。ピットは主柱穴となるかどうかは明確ではない。遺物は少ない。

出土遺物 (第4図7~10)

7は甕の底部である。底径10.0cmを測り、器壁の薄い平底である。外面はハケメで調整される。8



第3図 堅穴住居址実測図1 (1/60)



第4図 横穴住居址出土遺物実測図 I (1/4, 1/3, 1/2)

は壺の底部である。底径9.0cmを測り、やや上底気味の薄い平底である。外面はミガキが施される。7、8とも弥生時代中期後半であろう。9は器台である。天地に不安はあるが口縁部として図示した。口径11.0cmを測り、指押さえで成形される。10は手づくねの小型鉢である。口径7.6cm、残高3.4cmを測り、指押さえで成形される。

SC05 (第3図)

調査区南寄りに位置し、西の壁際に切られる。2.1m×1.9m以上を測る。平面形は不明であるが、2辺の壁の角度から考えて菱形に近い方形になるのである。周溝、貼床はなく、壁の深さは10cmほどである。上柱穴は明確ではない。壁際の落ち込みは別の土壌になるのか、屋内土壌になるのか不明である。遺物は少ない。

出土遺物 (第4図11~12)

11は壺の剖部である。剖部から頸部に立ち上がる部分に突帯が造られ、内外面ともにミガキが施される。12は壺の口縁部である。口縁上面を平坦に作り出す。いずれも弥生時代中期後半頃であろうか。

SC06 (第3図)

調査区やや南寄りに位置する。搅乱にほとんどを切られるが、 $3.0\text{m} \times 2.2\text{m}$ 以上を測り、おそらく正方形に近い平面形を呈すのであろう。周溝、貼床はなく、壁の深さは5cmほどである。ピットは2つ検出されているが、主柱穴となるかは不明である。遺物は少ない。

出土遺物 (第4図13)

13は壺のLI縁部である。逆L字状口縁を呈し、復元口径34.0cmを測る。弥生時代中期中葉であろう。

SC28 (第3図)

調査区中央からやや南寄りに位置する。地山ロームのブロックと暗褐色土が混在した貼床のみが残っており、平面は明確に検出できなかった。 $2.6\text{m} \times 2.1\text{m}$ 以上を測り、元来は正方形を呈していたのであろう。住居内にピットはいくつか検出されたが、住居に伴うものは不明で、主柱穴は判然としない。遺物は図化できるものはなかった。

SC44 (第5図・図版2)

調査区ほぼ中央に位置する。周溝のみの検出で住居址と判断した。東はSC72と接するが切り合いは不明である。 $2.5\text{m} \times 2.8\text{m}$ を測り、平面は長方形を呈する。主柱穴はSP194とSP202を考えたが、やや壁によりすぎかもしない。住居の西壁やや南寄りに接して屋内上構があり、壺の底部が土壇上部で出土している。

出土遺物 (第6図14・図版4)

14は壺の底部から胴部にかけての部分である。器壁はやや薄く、平底を呈し、底径6.8cmを測る。弥生時代中期後葉～後期前葉頃であろうか。住居址の時期もこの範囲であろう。

SC48 (第5図・図版2)

調査区中央やや北寄りに位置する。搅乱に一部切られて検出された。周溝はないが、貼床は10cmの厚さで貼られ、地山までの壁の深さは30cmを測り、残りはよい。平面は $4.5\text{m} \times 3.4\text{m}$ の長方形を呈する。主柱穴は3本検出されたが、残り1本は搅乱に切られていると考えられ、おそらく1本であろう。弥生時代後期後半から終末の土器が住居址の南西コーナーでまとまって出土している。

出土遺物 (第6図17～28・図版4)

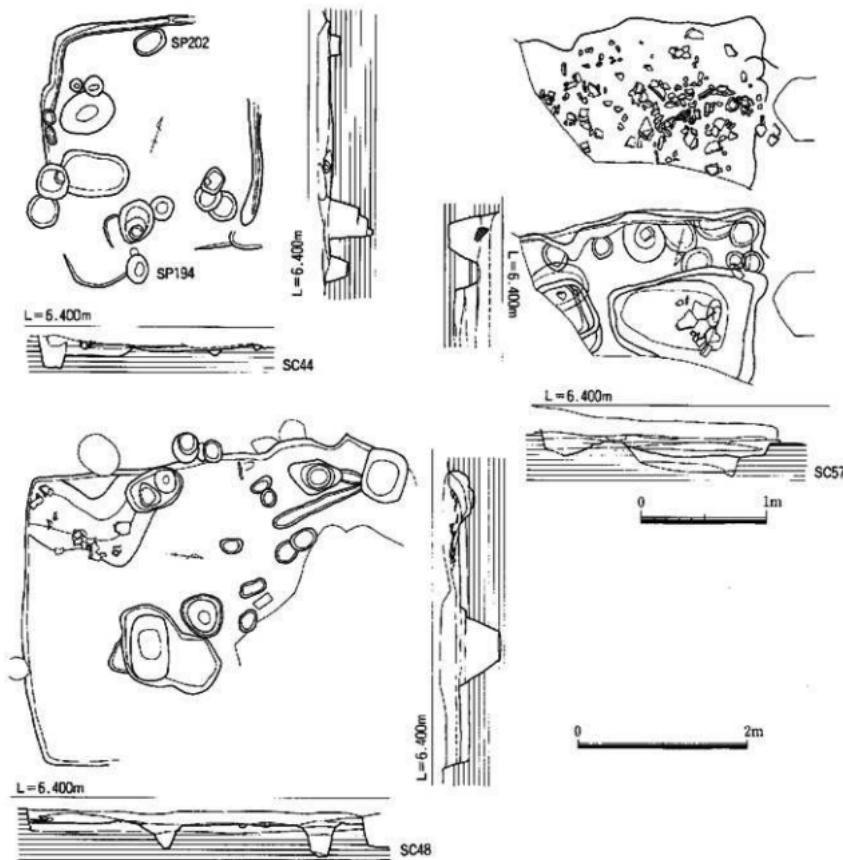
17～20は弥生時代後期後半から終末にかけての壺である。17は口径24.0cmを測り、口縁部は逆く字状に屈曲し、口唇部は平坦に仕上げる。内外面にハケメを施す。18～20はいずれもLI縁端部を丸みをつけて作り出す。各々口径は23.6cm、22.8cm、20.8cmを測る。いずれも摩耗のため調整は不明である。21は弥生時代中期中葉の壺である。口径は27.0cmを測り、口縁部は断面鋸先状を呈する。22～24は壺の底部である。22、23は器壁が厚く上底を呈し、外面にハケメを施す。いずれも底部から胴部にかけてゆるやかに開く。底径は各々8.0cm、8.2cmを測る。24は底径7.4cmを測り、平底を呈する。22、23は弥生時代前期後葉～中期前葉、24は中期後半頃であろう。25は壺の底部である。底径6cm、やや上底を呈する。弥生時代中期後半か。26は弥生時代終末五様式系統の壺の底部である。底径6.2cmを測る。

27は砂質頁岩製の石包丁の一部である。残長4.3cm、最大幅3.8cmを測る。28は砂岩製の砥石である。全長20cm、幅9cm、最大厚さ3cmを測る。全面使用されている。

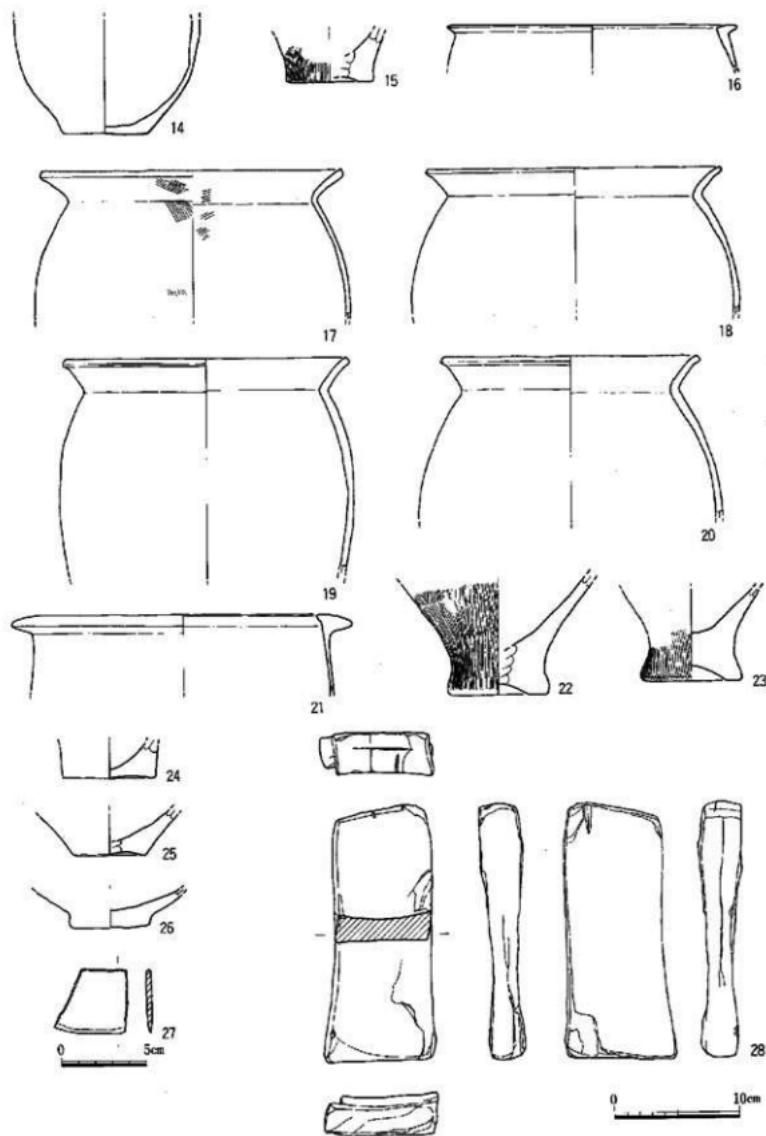
以上のように弥生時代後期後半から終末にかけての遺物がまとめて出土した。住居の時期もこの時期に相当するとと思われる。

SC57 (第5図・図版2)

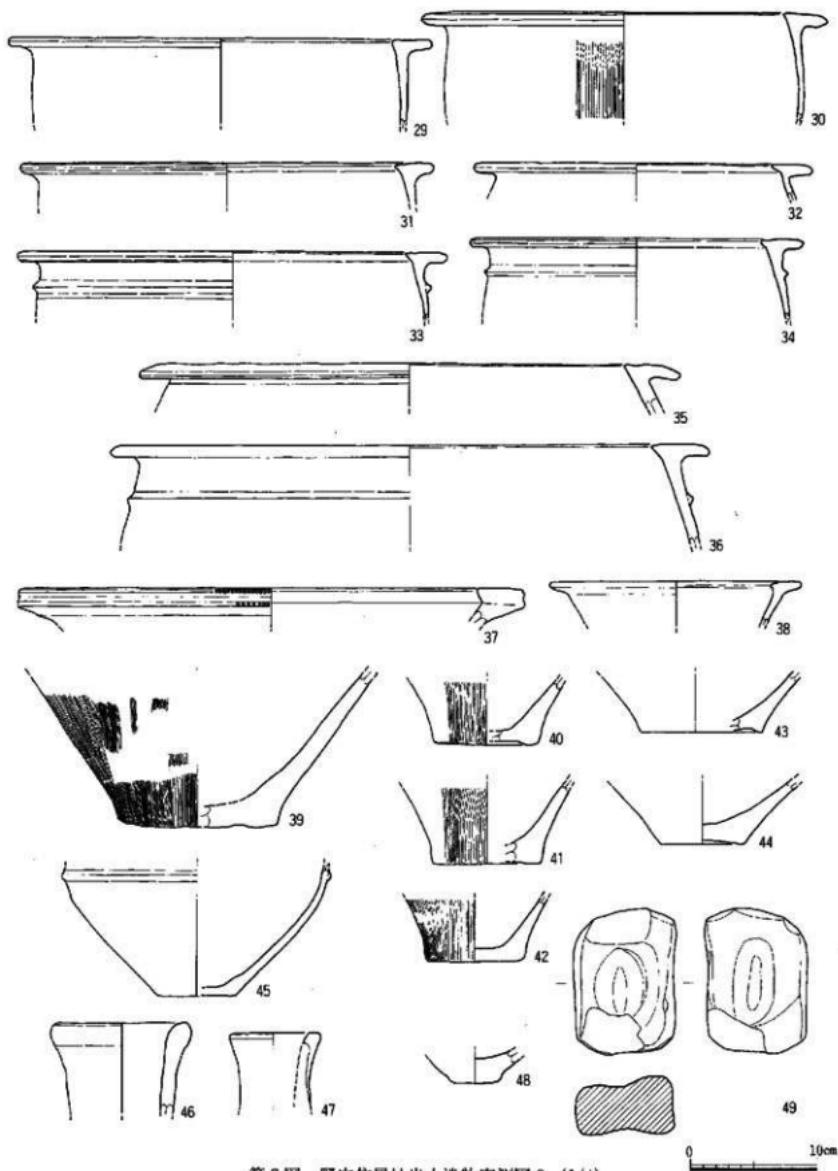
調査区北寄りの壁際に位置するが、壁に切られている。検出時はSK91と連結した状態で、上部に土器が多く散布していた。ほとんどは弥生時代中期のものである。始めは土壇として掘り下げていたところ平面が方形となり、底面付近でロームブロックに暗褐色土が混在した貼床と思われる層が堆積していたため住居とした。平面は $1.9m \times 1.4m$ 以上の方形を呈する。貼床は約5cmの厚さで、地山までの壁の深さは10~20cmとなる。住居内中央寄りは土壇もしくは段落ちとなる。主柱穴は不明であるが、ピットはいくつか検出された。住居埋土、床面ピットから多量の遺物が出土している。



第5図 横穴住居址実測図2 (1/60, 1/40)



第6図 積穴住居址出土遺物実測図2 (1/4, 1/3)



第7図 積穴住居址出土遺物実測図3 (1/4)

出土遺物（第7図29～49・図版4）

29～36は甕の口縁部である。29、30は口縁部断面がほぼ逆L字状を呈する。30は外面に縱方向のハケメが施される。口径は各々33.4cm、32.0cmを測る。31～34は口縁部断面が鶴先状を呈し、そのうち、33、34は口縁部下部に突帯を巡らす。口径は各々33.0cm、28.0cm、34.2cm、26.4cmを測る。35、36は口縁部がすぼまり胴部が張り出す形態をとる。36は口縁部下部に突帯を巡らす。口径は各々43.0cm、47.2cmを測る。29は弥生時代中期前半、30～34、36は中期中葉、35は中期後葉であろうか。37、38は甕の口縁部である。37は口縁部を折り込み口縁部上面を平坦に作りだし、端部の中央をくぼませ、上下に刻み目を入れる。口径は40.2cmを測る。38は鶴先状口縁を呈する。小型の甕であろう。口径は20cmを測る。37は弥生時代中期前葉、38は中期中葉であろうか。

39～42は甕の底部である。39は大型甕の底部で底径12.8cmを測り、外面にハケメが施される。器壁は厚く、やや上底に近い。40は底径8.4cmを測り、外面にハケメが施される。器壁は薄く、やや上底を呈する。41は底径8.5cmを測り、外面にハケメが施される。平底に近い。42は底径7.8cmを測り、外面にハケメが施される。平底を呈する。39、40、42は弥生時代中期後半、41は弥生時代中期中葉であろうか。43～45は甕の底部である。43、44はやや上底に近く、各々底径は10.6cm、6.6cmを測る。45は器壁は薄く平底で、胴部に突帯を巡らす。43、44は弥生時代中期後半、45は後期中葉であろう。46、47は器台である。天地に若干の不安はあるが、口縁部として図示した。46は口径10cm、47は7.2cmを測る。48、49は住居址内のピットSP356より出土した。48は甕の底部である。レンズ底を呈し、底径3.5cmを測る。弥生時代終末に相当するであろう。49は砂岩製の凹石で、両面にくぼみがある。全長11.5cm、幅8cm、最大厚さ4.5cmを測る。

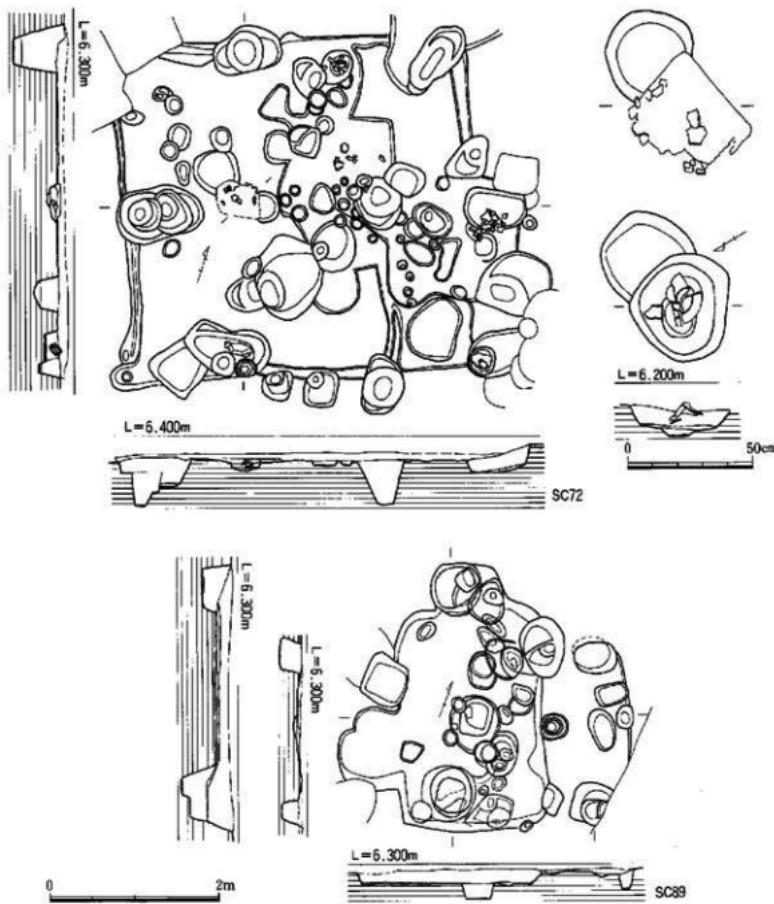
以上のように、住居址埋土上部から出土した土器のほとんどは弥生時代中期であった。しかし、住居址貼床面上の柱穴から弥生時代終末に相当する甕の底部が出土した。この状況から、住居址の時期は弥生時代終末と考えられる。住居址埋土中の多量の土器は、住居址が埋没する段階で古い時期の遺物を含む包含層が流れ込んだものであろうか。

SC72（第8図・図版2）

調査区中央東寄りに位置する。周溝のみが残っており、住居址と判断した。残っている周溝から計測すると、平面は約4m×4mの正方形を呈す。住居址東壁寄りに周溝らしきものが走る。ベッド状になっていたか、2軒の住居の切り合いか、拡張かいずれか判然としなかった。SP284とSP293を中心柱穴とすると、住居は西側にも広がると考えられ、本来は長方形であったとも推定される。ただ、西側にはSC44が接し、SC72の周溝らしきものは検出されていない。ピットや土壤の切り合いが多く、これ以上の判断は困難であった。ここでは図示した範囲をSC72としておく。その他、住居址のほぼ中央で白みを帯びた灰色の粘土の固まりが検出された。粘土を除去すると、高坏の脚部がやや浮いた状態で検出された。焼土や炭化物は検出されていない。本来は、ピットに高坏脚部を据え、上に粘土をかぶせておいたものであろう。炉跡であろうか。

出土遺物（第9図50～56・図版4）

50は小型甕の口縁部で、口径11.0cmを測る。外側にゆるく外反する。弥生時代後期前葉か。51は甕の底部である。底径7.8cmを測り、外面にタテハケを施す。やや器壁の厚い平底を呈す。弥生時代中期後半であろう。52はボール状を呈す鉢である。口径16.0cmを測る。弥生時代中期後葉～後期にかけての時期であろう。53は甕の口縁部で、断面く字状を呈する。口径33.0cmを測る。弥生時代後期前葉頃か。54は粘土下部出土の高坏脚部である。底径16.9cmを測り、大きく外反して開く。内面にハケメ



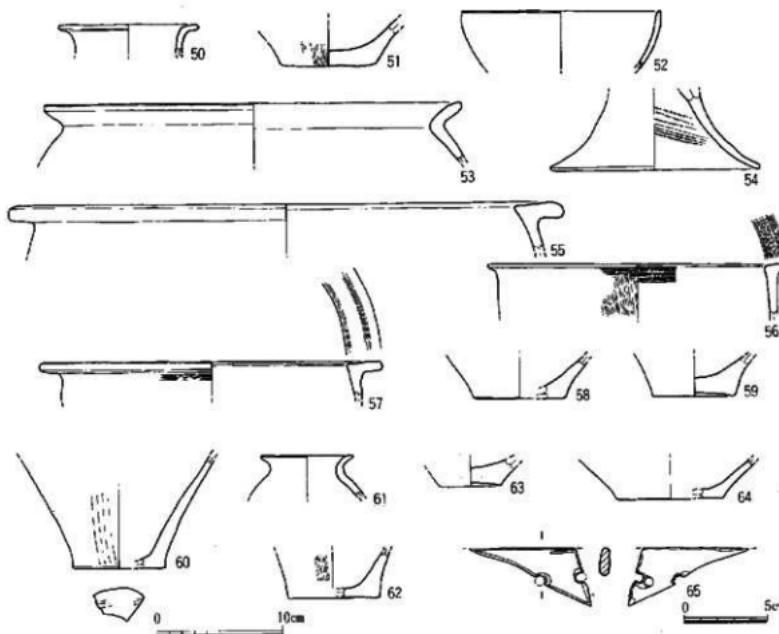
第8図 積穴住居址実測図3 (1/60, 1/20)

が施される。弥生時代中期末から後期前葉にかけての時期か。55、56は甕の口縁部である。55は口径44.1cmの大型甕である。断面は逆L字状を呈し、器壁は厚い。56は口径24.0cmを測り、器壁の内外面と口縁上面にハケメが施される。口縁端部を少しつまみ出すようにして作り出す。いずれも弥生時代中期前葉であろう。

以上のように、弥生時代中期までさかのぼる遺物もあるが、主体となるのは弥生時代後期前葉のものである。従って住居の時期は弥生時代後期前葉を下限としてよいであろう。

SC89 (第8図・図版2)

調査区南側で検出された。ロームブロックと暗褐色土が混在したような埋土であり、貼床として掘り下げた。平面形が1.7m×2.5mの長方形を呈し、住居としてはやや小型である。さらに東側にも貼床状の埋土が広がっており、掘り下げたところ地山面がやや高く階段状となった。ここまでを1軒の



第9図 堪穴住居址出土遺物実測図4 (1/4、1/3)

住居とすると2.7m×2.5mのほぼ正方形の平面形を呈する。この部分をベッドとするか、別住居の切り合いととるか、拡張部分ととるか判断は難しい。ピットの配置を考えると拡張もしくは別住居の切り合いとする方がよいと思われるが、ここでは両方の可能性を提示しておく。

出土遺物（第9図57～65・図版4）

57は壺の口縁部である。断面は逆L字状を呈し、口縁下部と口縁上面にハケメが施される。口径27.0cmを測る。弥生時代中期前葉であろう。58～60、62は壺の底部である。各々底径は7.0cm、6.6cm、7.4cm、7.0cmを測る。60、62は外面にハケメが施される。いずれも器壁が薄く平底である。弥生時代中期後半であろう。61は小型壺の口縁部である。口径7.4cmを測る。63、64は壺の底部である。各々底径5.0cm、8.4cmを測る。63は器壁が厚くやや上底である。64は器壁の薄い平底である。63は弥生時代中期中葉、64は中期後半か。

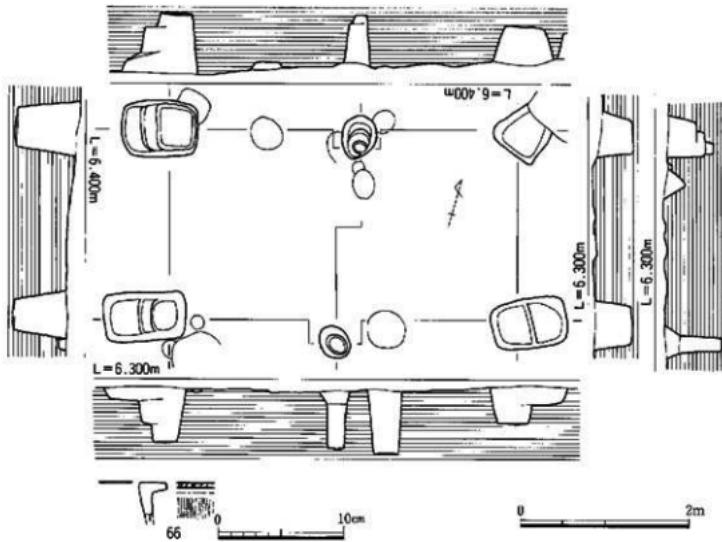
65は石包丁である。残長7.3cm、最大幅3.4cmを測る。孔を穿ち直した痕跡がある。

以上の遺物から考えると、住居の時期は弥生時代中期中葉から後葉と推定できよう。

(2) 挖立柱建物

SB01 (第10図)

調査区中央やや南寄りで検出された。遺構の切り合いが非常に激しかったため、調査段階で検出す



第10図 掘立柱建物実測図 (1/60)・出土遺物実測図 (1/4)

ることはできず、整理段階の図面上で検討した。SP119とSP125はそれぞれ約90cm×60cmの平面長方形を呈し、最大の深さが地表面下65~75cmであり、二段掘りとなる大型の柱穴であった。ところがこれに対応する柱穴が検出されず、SP403とSP404が比較的それらに近いとして対応させた。また、その中間の位置、深さを検討し、SP149とSP198を対応させた。若干のずれはあるものの、1間×2間の掘立柱建物になると思われる。主軸はN-73°-Eを取り、他の住居址とほぼ主軸をそろえる。

出土遺物は、いずれの柱穴からも図示できるような遺物はほとんど出土しなかった。66は甌の口縁部である。断面が逆L字状を呈し、口縁端部に刻み目があり、口縁部下部にはタテハケが施される。弥生時代中期前葉頃であろう。その他、遺物の小片を見ても、ほとんどが弥生時代中期のもので、それを下るものは出土していない。また、SP404が、弥生時代後期前葉の住居址SC72の柱穴に切られていることから、SB01は弥生時代後期前葉よりはさかのばる時期と考えられる。

(3) 溝

SD01 (第11図・図版3)

調査区やや西寄りを、ほぼ南北の方向をとって走る。正確な主軸はN-26°-Wをとる。最大幅1.4m、深さ0.5~0.7m、延長約16mを測る。壁は途中まで緩やかに斜めに落ちるが、底部付近で直に掘り込まれる。分層不可能な茶褐色の埋土が堆積しており、水が流れた形跡はなかった。この溝は他の遺構を切っており、本調査区の中で最も新しい時期の遺構である。遺物はそれほど大量には含まれていない。

出土遺物 (第12図67~98・図版4・5)

67は甌の口縁部である。断面は逆L字状を呈し、口径は33.8cmを測る。外面にハケメが見られ、口縁部が若干立ち上がり気味になる。弥生時代中期後葉であろう。68は器台の口縁部である。口縁端部

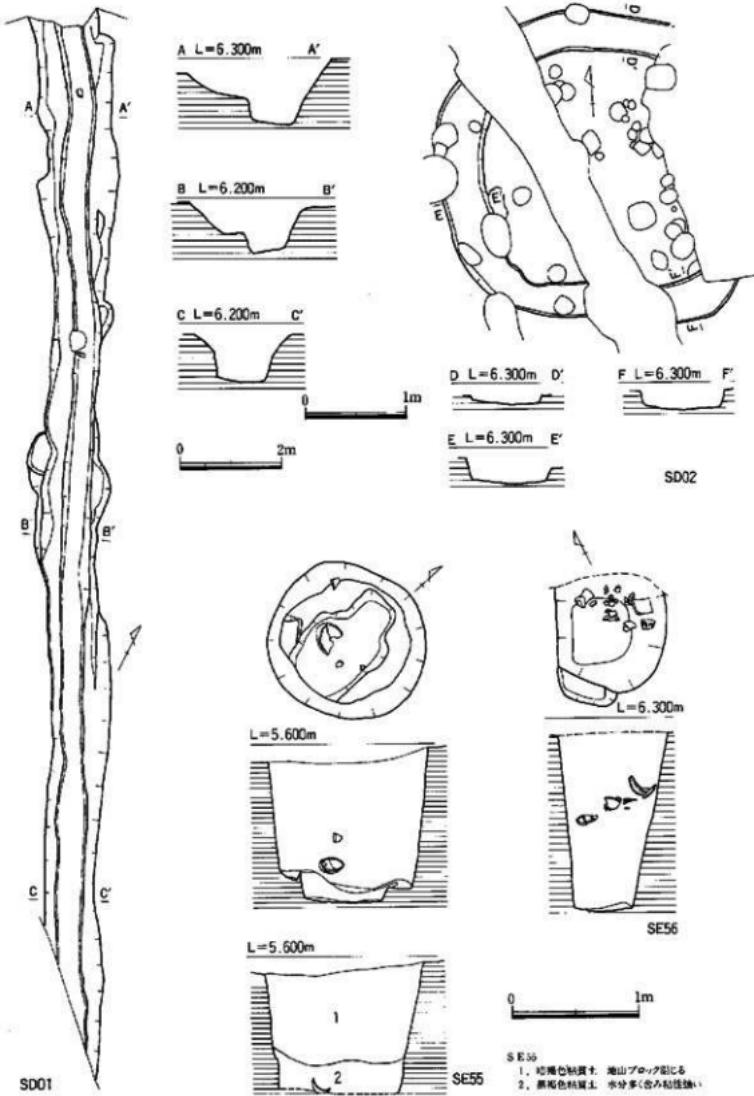
は平坦に仕上げられ、口径は14.0cmを測る。口縁部は逆ハ字状に開き、外面にタテハケが施される。69～71は壺の口縁部である。69は二重口縁壺である。口縁部断面は逆U字状を呈し、口径は12.8cmを測る。弥生時代後期中葉であろう。70、71は弥生時代中期中葉の壺である。70はやや厚めで鋸先状口縁を呈し、口径21.8cmを測る。71は口縁部断面が逆U字状を呈し、70に比較してやや口縁部が下がり気味になる。口径22.6cmを測る。72～76は甕の底部である。72は器壁が厚く、若干上底を呈する。底径は9.2cmを測る。74、75は器壁が厚く上底を呈し、外面にタテハケが施される。底径は各々6.0cm、6.8cmを測る。73、76はやや器壁が薄くなり上底を呈する。底径は各々9.0cm、8.0cmを測る。いずれも弥生時代中期中葉であろう。77～80は壺の底部である。77、79は平底を呈し、各々底径9.4cm、7.0cmを測る。78はやや器壁が薄く、平底を呈し、外面にハケメが残る。底径9.6cmを測る。80は器壁がやや厚く、上底を呈する。底径7.2cmを測る。77は弥生時代中期後葉～後期前葉、78～80は中期後半であろうか。81は小型の鉢である。底部は器壁の薄い平底を呈し、胴部は直線的に開く。後述のSD02から出土した手づくねの小型鉢と器形は類似している。口径13.8cm、底径6.8cm、器高6.8cmを測る。外面にハケメを施す。弥生時代後期中葉であろう。82、83は高环の脚部である。いずれも脚柱は細く、裾で広がる形態をとるのである。残高は各々8.4cm、7.4cmを測る。84は低い脚がつく鉢形を呈する器形となるのである。器壁は薄く、内面は黒色を呈する。製塙土器の可能性が高い。脚の径は3.5cm、残高3.0cmを測る。85、86は甕である。85は口縁部から胴部にかけゆるやかに肩曲し、器壁は厚めである。調整は摩耗のため不明である。口径は25.4cmを測る。器形から見ると古代であろうか。86は弥生時代終末の甕である。口径21.0cm、器高30.2cmを測る。口縁部断面はく字状を呈し、底部はほぼ丸底を呈する。内外面ともにハケメが施される。ほぼ完形で上層から出土している。87～93は須恵器である。87は壺の胴部である。胴部上部にはカキ目が施され、胴部は大きく張り、最大径は14.4cmを測る。88は盤の一端である。口縁部がやや外反して開く。89～91は高台付きの环である。89は高台がやや開き気味につき、90、91はやや内側におさまる。89は口径14.4cm、底径10.2cm、器高5.6cmを測る。90、91は各々底径9.8cm、7.8cmを測る。92は底部は不明である。口縁部端部は丸みをつけ外反させる。口径は19.8cmを測る。93は底部は不明である。口縁部端部はやや丸みを帯びて外反する。口径は19.8cmを測る。いずれも8世紀後半頃であろう。

94～98は石器である。94は玄武岩製の凹石である。全長10.8cm、最大幅6.3cm、最大厚さ2.1cmを測る。95は砂岩製の弥生時代前期石包丁である。丁寧に研磨されており、孔と孔の間の長さは2.2cmを測る。残長8.2cm（推定長さは14.4cm）、幅5.0cmを測る。96は手持ちの砥石を凹石に転用したものであろう。ほぼ全面使用面となる。砂岩か。全長7.5cm、最大幅5.0cm、最大厚さ3.0cmを測る。97は砂岩の敲石である。全長7.8cm、最大幅3.7cm、最大厚さ2.0cmを測る。98は滑石製有孔石製品の一部である。直径9.5cm、孔の直径2.5cmを測る。

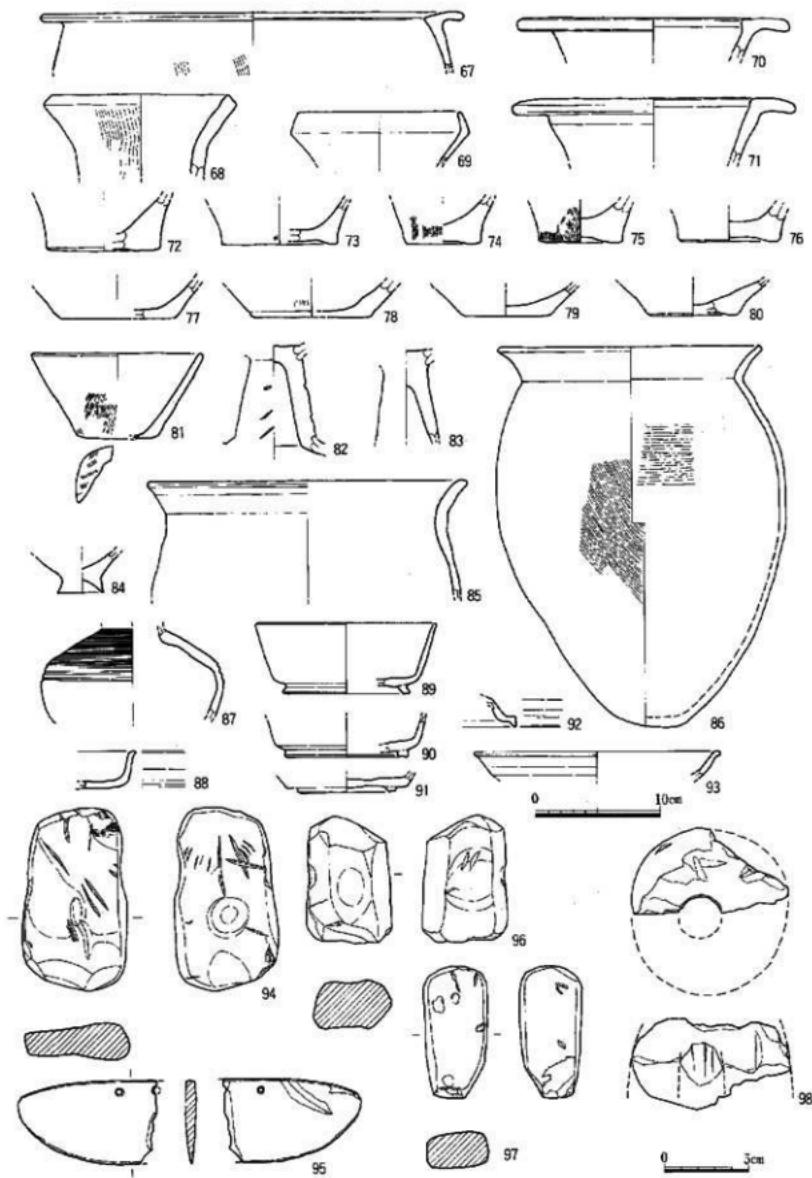
以上のように、SD01からは弥生時代中期中葉から古代までの遺物が出土している。SD01の時期は、時期の古い遺物が含まれているものの、他の遺構との切り合いから考えても出土遺物で最も新しい8世紀後半頃を上限とすることができよう。

SD02（第11図99～102・図版3）

SD02は調査区の北西寄りに位置し、SD01、SC48に切られている。溝の幅は70～90cm、深さは10～20cmである。SC48に切られているが、おそらく円柱状に回るのである。やや隅丸方形に近い円形を呈し、直径がほぼ6mを測る。これを周溝状遺構と称する。周溝状遺構に囲まれた空間にはこれに伴うと思われる遺構は検出できなかった。



第11図 溝・井戸実測図 (1/100, 1/50, 1/40)



第12図 溝出土遺物実測図 (1/4、1/3)

出土遺物（第13図）

99は甕の口縁部である。口縁部断面はく字状を呈し、口縁部端部はやや丸みをつけて仕上げる。口径は34.2cmを測る。弥生時代中期後半から後期前葉頃か。100、101は甕の底部である。100は器壁が薄い平底で、底径9.0cmを測る。外面にタテハケを施す。101はやや器壁の厚い上底を呈す。外面にハケメが残り、底径6.6cmを測る。100は弥生時代中期中葉～後葉、101は中期中葉頃か。102は手づくねの小型鉢である。口径6.3cm、器高3.0cmを測る。

以上の出土遺物と、弥生時代後期後半～終末の時期であるSC48と古式土師器の高环が出土したSP210に切られていることから考えて、SD02は弥生時代後期前葉頃の時期になるであろう。

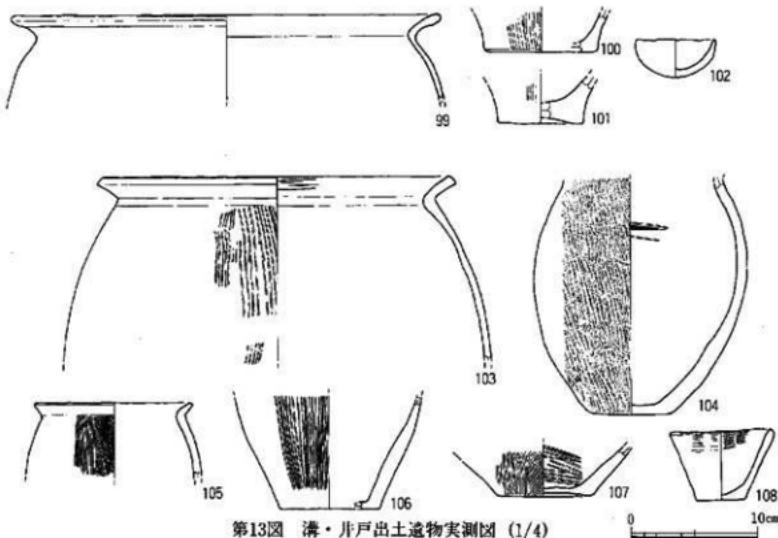
（4）井戸

SE55（第11図・図版3）

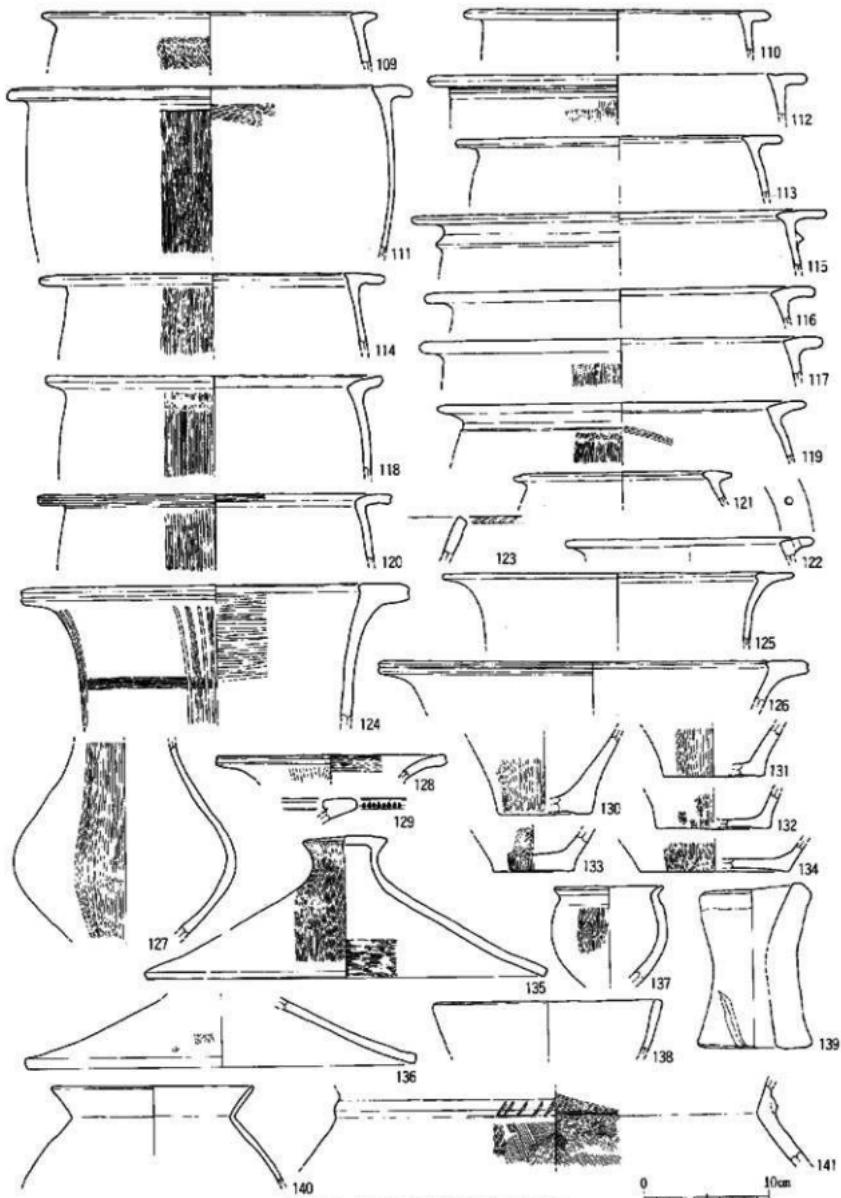
調査区の北に位置する。搅乱の底部から検出された。直径1.3m、深さ1.2mを測る。埋土は地山ブロックを含む暗褐色粘質土で底部付近では粘性の強い茶褐色粘質土、粗砂となる。底部付近から弥生時代後期中葉の甕が出土した。

出土遺物（第13図103～108・図版5）

103、105は甕の口縁部である。103は大型の甕である。口縁部断面はく字状を呈し、やや胴部は張る。口縁部内面にはヨコハケを、胴部外面には粗いハケメが施される。口縁端部は平坦に仕上げ、口径28.5cmを測る。105は口縁部断面はく字状を呈し、胴部外面には細かなタテハケが施される。口径は12.6cmを測る。104は甕の胴部～底部の部分である。井戸の底部付近から出土した。胴部外面には粗いタテハケ、内面には部分的にハケメが施される。底部は平底であるが、丸みを帯びる。底径6.6cm、胴部最大径16.8cmを測る。いずれも弥生時代後期中葉であろう。106は甕の底部である。外面にタテハケが施され、器壁の薄い平底を呈する。底径は8.0cmを測る。107は壺の底部である。外面にはハケメ、内面にはミガキが施される。器壁が薄くやや上底を呈する。106、107とともに弥生時代中期後



第13図 溝・井戸出土遺物実測図 (1/4)



第14図 井戸出土遺物実測図 (1/4)

葉～後期前葉か。108は小型鉢である。平底の底部から口縁部へ直線的に開く。外面にはハケメ、内面にはタタキが施される。弥生時代後期中葉であろう。

以上の遺物からSE55は弥生時代後期中葉の時期と思われる。

SE56 (第11図・図版3)

調査区北東壁際に位置する。一部壁に切られる。直径は約0.9m、深さ1.4mを測る。底部に向かってややすぼらり気味になる。ほぼ半分の深さで弥生時代中期の土器がまとまって出土した。底部付近では遺物はあまり出土しなかった。

出土遺物 (第14図109～141・図版5)

109～122は甕の口縁部である。109、110は口縁部断面が逆L字状を呈し、口縁部はあまり張り出さない。109はやや短めの口縁部で断面が三角形に近く、外面上にタテハケが施される。口径26.8cmを測る。110は口径24.5cmを測る。いずれも弥生時代中期前葉頃であろう。111～115は口縁部断面が勧先状を呈する。111は胴部外面にタテハケ、内面に一部横方向にハケメが施される。口径32.0cmを測る。112は胴部外面にタテハケが施され、口径34.4cmである。113は若干胴部が張り出し気味である。口径26.2cmを測る。114は口縁部がやや下がり気味となり、胴部外面にタテハケが施される。口径27.4cmを測る。115は口縁部下部に突帯を巡らし、口径33.2cmを測る。いずれも弥生時代中期中葉であろうか。116～119は口縁部がやや立ち上がる。116、117は胴部外面にタテハケが施される。口径は各々31.2cm、32.2cmを測る。118、119は116、117に比較して口縁部の立ち上がりがより大きくなる。いずれも胴部外面にタテハケが施され、119は内面にも一部ハケメが見られる。口径は各々27.0cm、29.8cmを測る。116、117は弥生時代中期中葉～中期後葉、118、119は弥生時代中期後葉であろう。120は口縁端部に凹線が巡り、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケが施される。口径28.3cmを測る。弥生時代中期後葉～末葉の時期であろうか。121は口縁部断面が勧先状口縁を呈し、口縁部内側が立ち上がる。口径17.6cmの小型の甕である。弥生時代中期後半か。

122～129は壺の口縁部である。122は無頸壺であり、口縁部に孔が穿たれている。口径20.0cmを測る。123は口縁端部に刻み目が施される。124～126は鋸先状口縁部を呈する。124は口縁部が厚く端部に凹線を巡らせる。頸部外面には縱方向にミガキと、中央にヨコハケが施され、内面はミガキが施される。両面とともに丹塗りである。口径31.0cmを測る。125は124に比較して口縁部が薄く、126は124と同様口縁部が厚い。口径は各々28.2cm、34.4cmを測る。いずれも弥生時代中期後葉であろう。128は大きく外反する口縁部である。端部に凹線が巡り、外面にミガキ、内面にハケメが施される。口径18.4cmを測る。129は口縁部を内側に折り返して作り出している。口縁端部には刻みが施される。いずれも弥生時代中期前葉頃であろう。127は袋状口縁壺の胴部である。下部で張り出し、外面にはタテミガキが施され、丹塗りの痕跡がある。胴部最大径は17.6cmを測る。弥生時代中期後葉である。130～134は甕の底部である。130は厚めの上底を呈し、外面にタテハケが施される。底径7.5cmを測る。131、133はやや厚めの平底、132、134は薄い上底を呈す。底径は各々8.4cm、6.4cm、9.2cm、12.2cmを測る。130、131、133は弥生時代中期中葉、132、134は中期後葉であろう。135、136は蓋である。135は頂部はつまみ状を呈し、体部から口縁部までほぼ直線的に伸びる。外面にタテハケ、内面にヨコハケが施される。口径32.0cm、器高11.2cmを測る。135と同様の器形を呈し、口径は30.8cmを測る。弥生時代中期後葉である。137は小型壺で、胴部外面にハケメが施され、口縁部断面はく字状を呈する。口径8.8cmを測る。弥生時代後期中葉頃か。138は鉢で、碗状を呈する。口径18.2cmを測る。弥生時代中期後半か。139は支脚である。ナデで仕上げるが、凹凸が激しい。口径8.6cm、底径9.2cm、器高12.8cmを

測る。弥生時代中期後半であろうか。140は甕の口縁部である。器壁は薄く断面はく字状に加曲する。口径11.0cmである。141は大型甕の頸部である。刻み目を施した突帯を巡らせ、胴部にハケメを施す。いずれも弥生時代終末であろう。

以上のようにSE56の出土遺物はそのほとんどが弥生時代中期であるが、少量ながら弥生時代終末の遺物も見られる。SE56は弥生時代終末に廃棄されたと考えられる。

(5) 上壙

SK07 (第15図)

平面はほぼ楕円形を呈し、長径1.24m、短径0.82m、最も深いところで0.32mを測る。

出土遺物（第17図142） 142は甕の口縁部である。口縁部はやや立ち上がり、断面がほぼく字状を呈する。口径30.0cmを測る。弥生時代中期前葉であろう。

SK08 (第15図)

平面は細長い楕円形を呈し、長径1.9m、短径0.34～0.4m、深さ0.23mを測る。

出土遺物（第17図143） 143は甕の口縁部である。口縁部は逆L字状を呈し、口径26.4cmを測る。弥生時代中期前葉であろう。

SK50 (第15図)

平面は隅丸長方形を呈し、長軸0.46m、短軸0.4m、深さ0.34mを測る。SC48を切る。土器がまとまって出土した。

出土遺物（第16図144～147・図版5） 144、145は甕の口縁部である。144は鶴先状口縁を呈し、内側はやや立ち上がる。胴部は大きく丸く張る大型の甕となる。口径49.4cmを測る。145も大型の甕となるが、はね上げ口縁に近い形状で、口縁部断面はく字状を呈し、口縁部下部に突帯を巡らす。突帯は断面三角形を呈し、刻み目が施される。口径49.6cmを測る。いずれも弥生時代中期後半であろう。146は甕である。胴部から口縁部にかけてゆるやかなく字状に立ち上がる。内外面ともにハケメが施される。口径14.8cmを測る。弥生時代終末である。147は器台である。外面にタテハケが施される。弥生時代後期に下るか。出土遺物とSC48との切り合いかから、SK50はSC48とさほど時期差のない弥生時代終末に比定できよう。

SK61 (第15図)

平面は細長い楕円形を呈し、長径1.75m、短径0.36m、深さ0.16mを測る。ピットに切られている。

出土遺物（第16図148） 148は甕の口縁部である。口縁部は大きく外反し、口径は18.4cmを測る。弥生時代後期前葉か。

SK62 (第15図)

平面は隅丸長方形を呈し、長軸1.3m、短軸1.1m、二段掘りになっており、深いところで0.72mを測る。

出土遺物（第16図149） 149は甕の底部である。器壁の厚い上底を呈し、底径6.8cmを測る。弥生時代中期中葉か。

SK81 (第15図・図版3)

遺構検出時は、土器がつぶれた状態で広がっていた。掘り下げる柱穴と浅い土壇が連結したような形状になった。土壇としておく。長軸0.9m、短軸0.7m、最も深い部分で3.8mを測る。

出土遺物（第16図150・151・図版5） 150は甕である。口縁部はく字状にゆるく外反し、胴部につながる。口径は16.0cm、器高17.4cm、底径7.2cmを測る。外面にタテハケが施される。151は甕の底部である。器壁の薄い平底で、胴部外面にタテハケ、内面は指押さえの痕が見られる。150、151はと

もに弥生時代後期前葉であろう。SK81の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

SK91 (第15図)

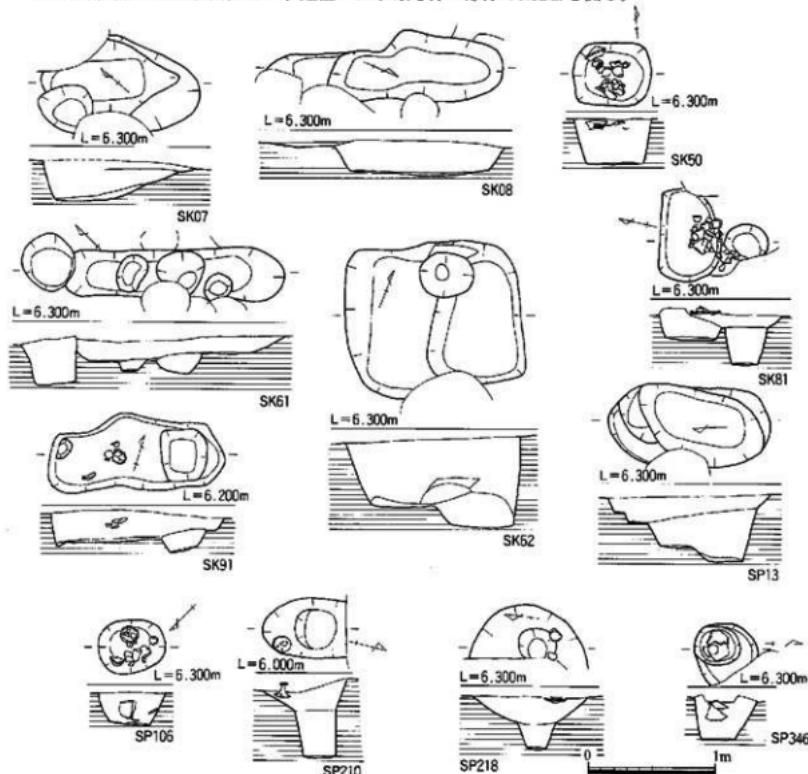
平面はややゆがんだ楕円形である。長径1.48m、短径0.5~0.6m、深さ0.28mで端部にはピット状の落ち込みがある。遺構検出時はSC57と連結した状態で遺物が上部に散乱していた。

出土遺物 (第16図152~154・図版5) 152は小型壺である。胴部の最も張り出した部分に断面三角形の突帯を一条巡らせる。頸部はすぼまり、口縁部に向かってやや内湾しながら広がる。底径6.8cm、胴部最大径14.0cmを測る。153は甌の口縁部である。鋤先状に近い逆L字状口縁部を呈する。口径31.0cmを測る。154は甌の底部である。外面にタテハケが施され、器壁の厚い上底を呈する。底径は8.0cmを測る。いずれも弥生時代中期中葉であろう。

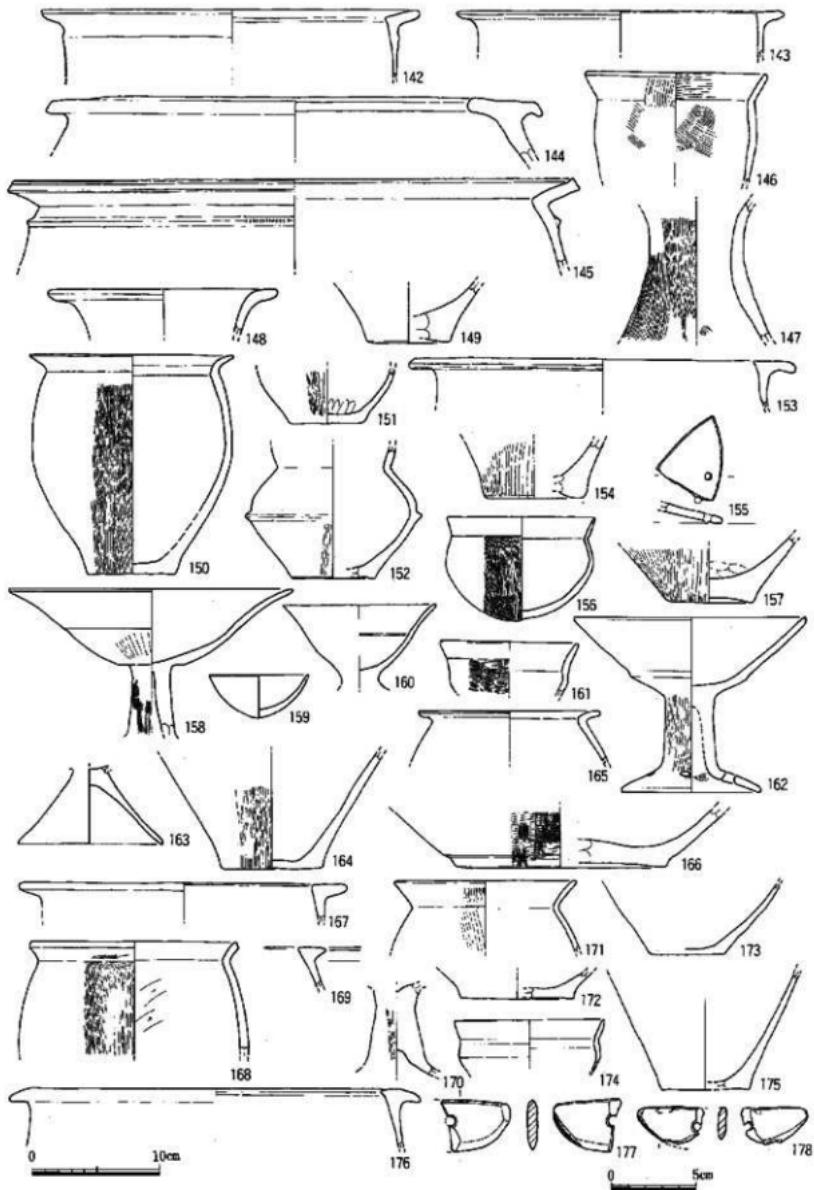
(4) ピット

SP13 (第15図)

平面は楕円形を呈し、長径1.3m、短径6.5m、最も深い部分で0.52mを測る。



第15図 土壙・ピット実測図 (1/40)



第16図 土壌・ピット出土遺物実測図 (1/4, 1/3)

出土遺物（第16図155） 155は高坏脚部の一部である。孔が穿たれる。

SP 106 (第15図・図版3)

長径0.5m、短径0.4m、深さ0.25mを測る。土器がまとめて出土した。

出土遺物（第16図156・158-161・図版5） 156、159、161は小型鉢である。156は口縁部がゆるくく字状を呈し、丸底の底部に至る。胴部外面にタテハケが施される。口径11.8cm、器高8.2cmを測る。161は156に比べて口縁部がより外反し、長めになる。胴部にタテハケが施される。口径11.0cmを測る。159は碗状になる小型鉢である。口径8.6cm、器高3.4cmを測る。158は高坏である。158は坏部が大きく広がり、やや外反する。脚柱は細い。脚部の外面にタテハケが施される。口径22.4cmを測る。160は脚付きの鉢である。口径12cmを測る。いずれも古墳時代初頭である。

SP 210 (第15図・図版3)

長径0.68m以上、短径0.5m、深さ0.68mを測る。SD02を切る。

出土遺物（第16図157・162・図版5） 157は壺の底部である。外面はミガキが施され、内面は指押さえの痕が見られる。やや厚めの上底を呈し、底径6.8cmを測る。弥生時代中期後半か。162は高坏である。ピットの上部から脚部のみが浮いた状態で検出され、坏部は理上中で出土した。口径18.4cm、器高13.8cm、底径11.2cmを測る。坏部は大きく直線的に開き、脚柱はやや細く脚部は大きく開く。器に孔が4つ穿たれる。古墳時代初頭である。

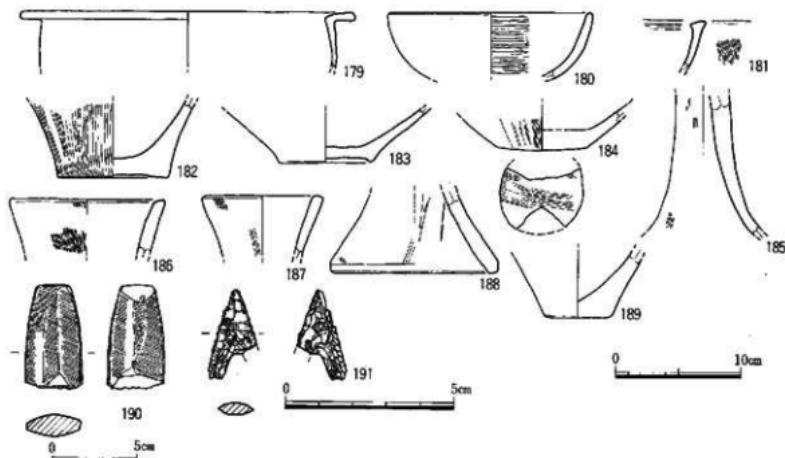
SP 218 (第15図)

最大径0.9m、深さ0.42mを測る。SD02を切る。

出土遺物（第16図163） 163は小型の器台である。直線的に開き、底径11.4cmを測る。古墳時代初頭である。

SP 346 (第15図・図版3)

最大径0.54m、深さ0.34mを測る。



第17図 ピット・その他出土遺物実測図 (1/4, 1/3, 2/3)

出土遺物（第16図164～166） 164は甕の底部である。164はやや薄めの平底を呈し、底径8.2cmを測る。胴部外面にタテハケが施される。166は甕の底底部であろうか。かなり大型であり、底径は17.0cmを測る。外面にはヨコミガキのちタテハケが施される。丹塗り痕が残る。いずれも弥生時代中期後半であろう。165は無頸甕で、口径14.8cmを測る。弥生時代中期後葉である。

SP146（第16図167） 甕の口縁部である。断面逆L字状を呈し、口径26.0cmを測る。弥生時代中期前葉であろう。

SP148（第16図168） 甕の口縁部である。口縁部はゆるくく字状に外反し、外面にはタテハケ、内面にはヘラケズリが施される。口径16.0cmを測る。弥生時代後期後半～終末であろう。

SP151（第16図169） 甕の口縁部である。断面三角形を呈する。

SP155（第16図170） 高坏の脚部である。古墳時代初頭であろう。

SP160（第16図171） 甕の口縁部である。く字状に屈曲し、外面にハケメが施される。口径14.8cmである。弥生時代終末であろう。

SP208（第16図172） 甕の底部である。やや薄い平底で底径9.2cmを測る。弥生時代中期後半であろう。

SP304（第16図173・178） 173は甕の底部である。薄い平底で底径6.0cmを測る。弥生時代中期後半であろう。178は石包丁である。残長3.9cm、幅2.0cmを測る。やや細長い形状になるのである。

SP322（第16図174・176） 174は鉢である。口縁部はゆるくく字状に屈曲し、口径12.2cmを測る。古墳時代初頭であろう。176は甕の口縁部である。鋤先状口縁を呈し、やや下がり気味になる。口径32.4cmを測る。弥生時代中期後葉であろう。

SP401（第16図175） 甕の底部である。平底を呈し、底径7.2cmを測る。弥生時代中期後半であろう。

SP402（第16図177） 石包丁である。残長4.2cm、幅3.0cmを測る。やや細長い形状になる。

（5）その他の遺物（第17図・図版5）

遺構検出時や攪乱から出土した遺物を説明する。

179は甕の口縁部である。断面は逆L字状を呈し、口径は26.6cmを測る。弥生時代中期後葉であろう。180は鉢である。碗状を呈し、内面にはミガキが施される。口径は16.2cmを測る。弥生時代中期後半頃か。181は鉢の口縁部か。内側につまみ出すように端部を作り出す。外面はハケメが施される。182は甕の底底部である。外面にハケメが施され、底部はやや厚く上底を呈し、底径9.0cmを測る。弥生時代中期中葉であろう。183は甕の底部である。上底を呈し、底径7.8cmを測る。弥生時代中期後半か。184は甕の底部である。丸底に近い平底を呈し、底径7.0cmを測る。185は高坏の脚部である。脚柱は細く、裾は大きく広がるのである。いずれも弥生時代後期か。186～188は器台である。186は天地に若干の疑問が残るが、口縁部とした。外面にハケメが施され、口径12.4cmを測る。187は口径9.6cmを測り、外面にハケメが施される。188は器台の底部である。底径13.4cmを測り、外面はハケメ、内面はヘラケズリが施される。弥生時代後期か。189は甕の底部である。器壁の厚い平底で底径5.2cmを測る。弥生時代中期中葉か。190は石劍の内加工品であろうか。残長6.0cm、最大幅3.2cm、最大厚さ1.2cmを測る。191は黒曜石製の石礫である。全長2.6cm、基部の幅1.6cm、最大厚さ0.3cmを測る。一部欠損している。

2. 小結

以上簡単ではあるが本調査の概要を述べた。以下に現時点で判明したことをまとめたい。

本調査地点は比恵遺跡群のほぼ中央に位置し、北は第5次、東は第51次、南東は第19次、西は第22次の各調査地点に囲まれている。第5次調査地点では、弥生時代中期～古墳時代前期にかけての竪穴住居址、弥生時代の掘立柱建物、井戸が検出されている。第51次調査地点では、弥生時代中期後半～古墳時代前期にかけての集落、古墳時代後期、古代の溝などが検出されている。第19次調査地点では、弥生時代中期中葉～古墳時代前期の集落、古墳時代後半、古代～中世の掘立柱建物、溝などが検出されている。第22次調査地点では、弥生時代中期の竪穴住居址、古墳時代前期の溝が検出されている。このように周辺を概観すると、弥生時代中期～古墳時代前期、古墳時代後期、古代～中世にかけての時期が中心となっていることがわかる。

本調査地点では、弥生時代中期後半～古墳時代初頭にわたる竪穴住居址、掘立柱建物、周溝状遺構、井戸、土壇、ピット、古代の溝が検出された。周辺の調査地点と時期範囲は重なり、同一の集落内と考えてよいだろう。遺構ごとに概観してみる。

竪穴住居址は10軒検出された。いずれも主軸の方位はほぼN-10°-Wをとり、他の調査地点における竪穴住居址の主軸とそろう。時期が明確なもので、弥生時代中期後半～後期前葉が4軒、弥生時代後期前葉が1軒、弥生時代後期後半～終末が3軒である。すべて平面形は方形をとるが、主柱穴は明確でないものが多い。

特筆すべき住居址としてSC03がある。これは他の住居址に比較してやや大きめの5.0m×4.7mを測り、比較的の残存がよいにもかかわらず上柱穴が明確ではなかった。出土遺物から弥生時代後期後半～終末にかけての時期と考えられるが、住居址の床面上から鉄素材の可能性がある棒状鉄製品が検出された。住居址内からはこの他に鉄製品等は出土しておらず、この住居址が製鉄関連遺構かどうかは不明である。しかしながら使い込まれた細目の砥石が出土しており、鉄器製作との関連が考えられるかもしれない。これまで比恵遺跡群において鉄素材が出土した例として第57次調査地点におけるSC028出土の板状鉄製品が挙げられる。長さ7.7cm、幅2.6cm、厚さ0.7cm、重量72.73gを測り、炒鋼法により製作された鍛造品である。弥生時代中期後半～中葉に位置づけられ本調査地点出土のものより古い。第57次調査担当の長家氏は報告の中で、福岡市城周辺の遺跡をまとめた上で、弥生時代における鉄器製作の技術は相対的に低いものではある。均質的に鉄器製作が広がっていったこと、また、非常に良質で希少な鉄素材を入手しうる比恵地域の社会背景について指摘している。今回の出土例がさらにそれを裏付けるものとなるであろう。

掘立柱建物は1軒のみ検出された。時期は弥生時代後期前葉以前で明確ではないが、長軸の方位は第19次・第51次調査地点検出の掘立柱建物とほぼ同じである。

SD01は古代以降の溝であるが、N-26°-Wの方位でほぼ直線的に走る。溝の幅や断面形、時期は、第19次調査地点のSD03と類似する。このSD03は方位をS-70°-Wにとり、本調査地点のSD01の方位とはほぼ90°の開きがある。この両地点をつなぐ部分は未調査であるため断定はできないが、あるいはこの2本の溝は交差もしくは屈曲している可能性が指摘できる。

SD02は周溝状遺構で、第2次調査地点検出の環溝遺構と形状、規模等が類似する。しかしながら周溝内で周溝に伴うと思われる柱穴等は検出されていない。

井戸は2基検出され、弥生時代後期中葉と終末の時期である。土壇は弥生時代後期前葉・終末、ピットは弥生時代後半・古墳時代初頭のものが各々検出されている。

本調査地点の遺構は、大きく4期に分けることができる。第1期は弥生時代中期後半～後期前葉で

ある。SC04、SC05、SC44、SC89、SP346が該当する。第2期は弥生時代後期前半である。SC72、SD02、SE55、SK61、SK81が該当する。第3期は弥生時代後期後半～古墳時代初頭である。SC03、SC48、SC57、SE56、SK50、SP106、SP210、SP218が該当する。第4期は古代以降である。SD01が相当する。

本調査地点は、第19次調査地点や第51次調査地点と異なり、古墳時代後期の遺構は検出されなかつたが、ほぼ同様の集落の消長をたどったといえよう。比恵遺跡群の中央部集落としての性格の一端を示したものといえる。

(参考文献)

長家伸編「比恵遺跡群(24)」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第530集』1997 福岡市教育委員会

表1 住居一覧表

地図	国版	造構	平面形	主柱穴	軸向	周溝	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物番号	時期	備考
第3回	国版2	SC03	正方形	有	有	5	4.7	0.12	1~7	弥生時代後期後半～終末	標準鉄製品	
第3回	国版2	SC04	長方形?	無	無	3.9	1.2以上	0.11	7~11	第3期中湖底?		
第3回	国版2	SC05	長方形?	無	無	3.1	1.5以上	0.11	11~12	弥生時代中湖底?		
第3回	国版2	SC06	正方形?	無	無	4	2.3以上	0.11	13	遺物は弥生時代中期中湖底		
第3回	国版2	SC28	正方形?	有	無	3.6	3.1					
第5回	国版2	SC44	長方形?	2木?	無	2.8	2.5		14~16	弥生時代中湖底聖一前和開葉		
第5回	国版2	SC48	長方形	4木	有	4.5	3.4	0.1	17~28	弥生時代後期下手～終末		
第5回	国版2	SC57	長方形	有	無	1.96以上	1.4以上	0.1~0.2	29~49	弥生時代終末	上面に上器類	
第5回	国版2	SC72	正方形	無	有	4	4		50~56	弥生時代後期前葉		
第5回	国版2	SC89	長方形	2木	有	2.5	1.7	0.15	57~65	弥生時代中期中葉～後葉		
			正方形	4木		2.7	2.5	0.15				

表2 捩立柱建物

地図	国版	造構	主軸	規模(m)	施軸(m)	蓋軸(m)	床面積(m)	出土遺物番号	時期
第10回		SB01	N~75°E	1×2	4.2	2.25	9.45	66	弥生時代後期前葉以降

表3 溝一覧表

地図	国版	造構	主軸	延長(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物番号	時期	備考
第12回	国版3	SD01	N~26°W	16	1.4	0.5~0.7	67~98	古代	
第12回	国版3	SD02			0.7~0.9	0.1~0.2	99~102	弥生時代後期前葉	周溝消失痕

表4 戸井一覧表

地図	国版	造構	平面形	長軸(m)	短軸(m)	底面高(m)	出土遺物番号	時期
第12回	国版3	SE55	円形	1.3	1.3	4.5	103~106	弥生時代後期中期
第12回	国版3	SE56	円形	0.9	0.9	4.25	109~141	弥生時代終末

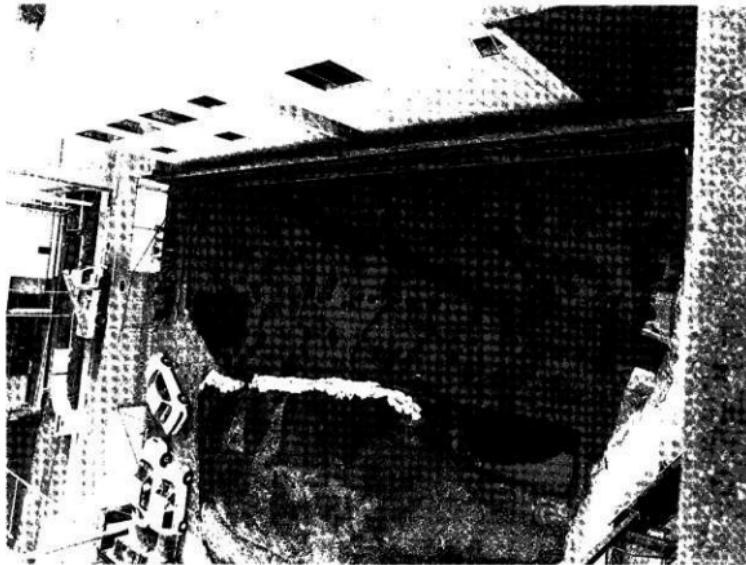
表5 土壙一覧表

地図	国版	造構	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物番号	時期
第16回		SK01	箱型	1.24	0.82	0.32	142	遺物は弥生時代中期前葉
第16回		SK08	箱型	1.9	0.34~0.4	0.23	143	遺物は弥生時代中期前葉
第16回		SK30	箱丸長方形	0.46	0.4	0.34	144~147	弥生時代終末
第16回		SK61	箱型	1.75	0.38	0.16	148	遺物は弥生時代中期前葉
第16回		SK62	箱丸長方形	1.3	1.1	0.72	149	遺物は弥生時代中期前葉
第16回	国版3	SK81	箱型	0.9	0.7	0.38	150~151	弥生時代後期前葉
第16回	国版3	SK91	箱円形	1.48	0.5~0.6	0.28	152~154	遺物は弥生時代中期前葉

表6 ピット一覧表

地図	国版	造構	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物番号	時期
第16回		SP13	橢円形	1.3	6.5	0.52	156	
第16回	国版3	SP106		0.5	0.4	0.25	157~158	古墳時代初期
第16回	国版3	SP210		0.68以上	0.5	0.68	157~162	古墳時代初期
第16回		SP218		0.9		0.42	163	古墳時代初期
第16回	国版3	SP346		0.54		0.34	164~166	弥生時代中期後半

図版 1



2. 調査区南西側全景 (北西から)



1. 調査区北東側全景 (北西から)

図版2



1. SD01(北北西から)



2. SD01・SD02(北から)



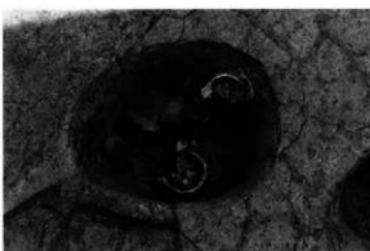
3. SE55遺物出土状況(南東から)



4. SE56遺物出土状況(北から)



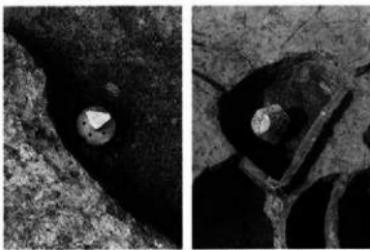
5. SK50遺物出土状況(西から)



6. SP106遺物出土状況(西から)



7. SK81遺物出土状況(東から)



8. SP210遺物出土状況(西から) 9. SP346遺物出土状況(東から)

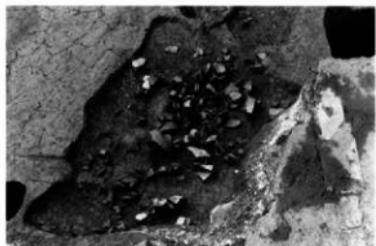
図版 3



1. SC03 (南南東から)



2. SC44 (西から)



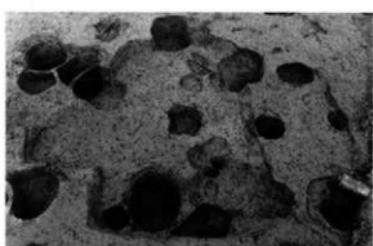
3. SC57遺物出土状況 (北東から)



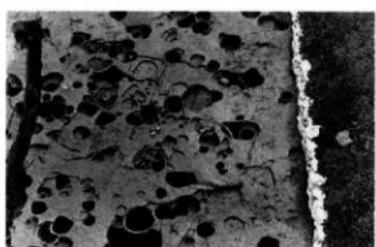
4. SC57完掘状況 (北東から)



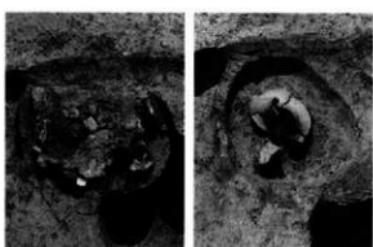
5. SC48 (南から)



6. SC89完掘状況 (南東から)

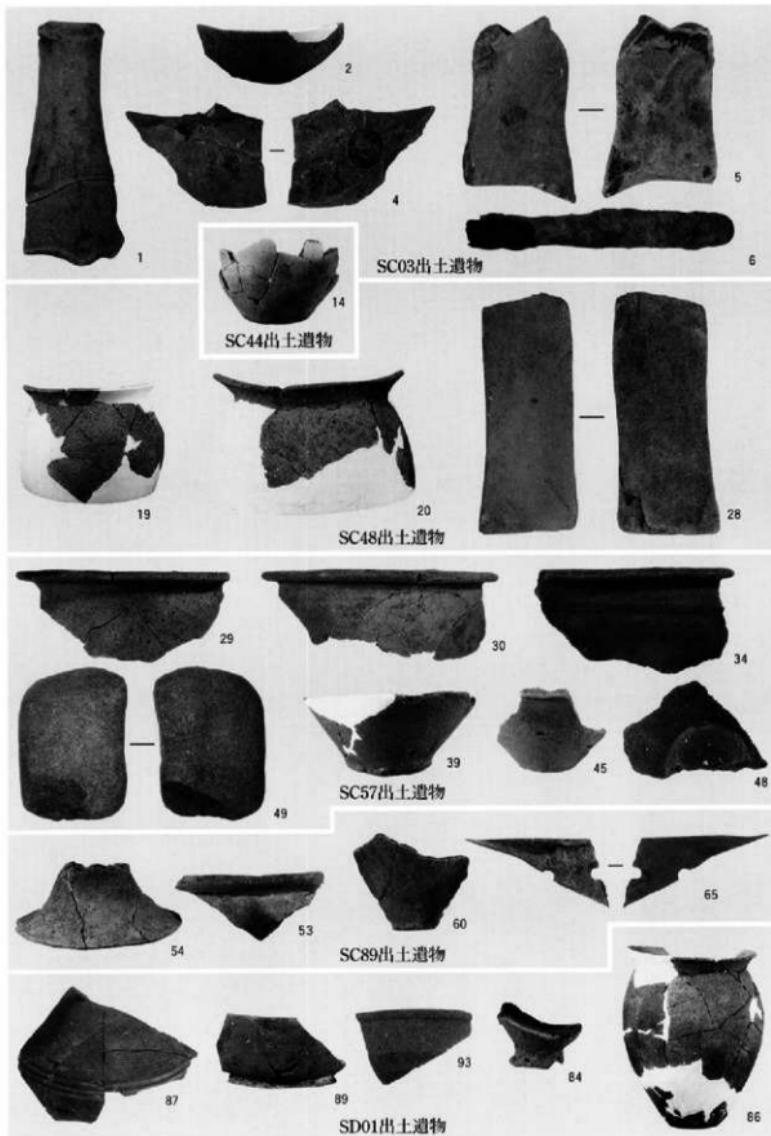


7. SC72 (北西から)

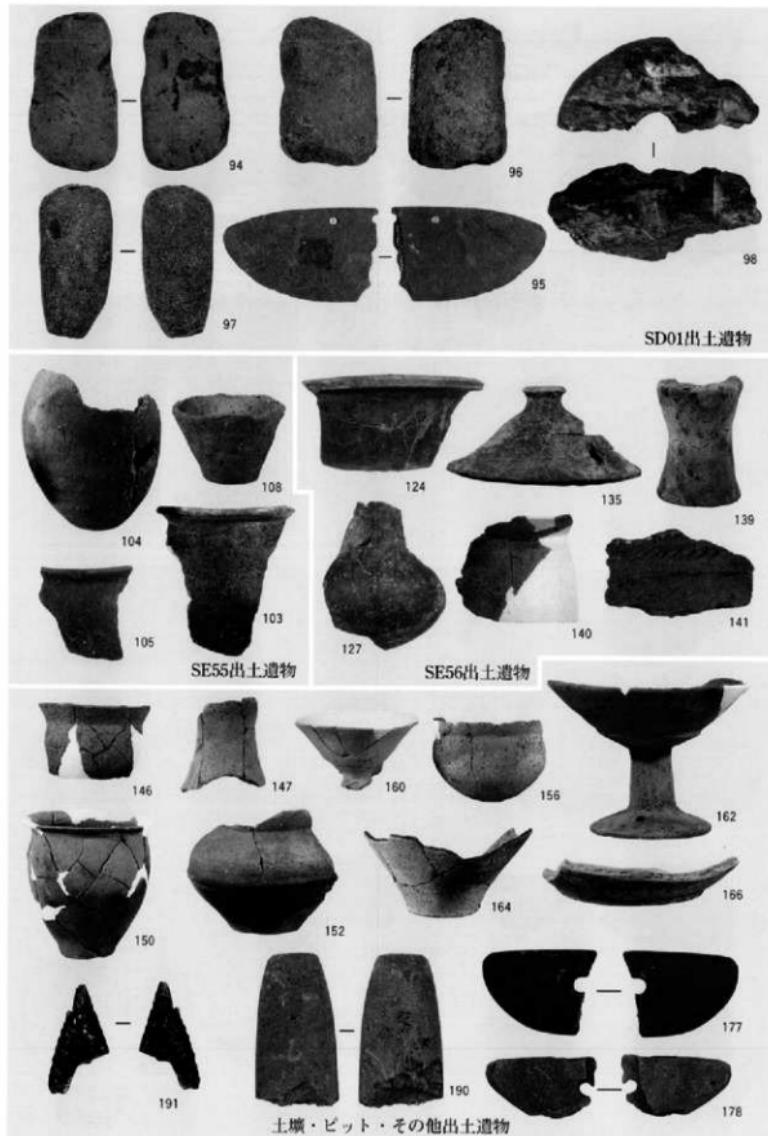


8. SC72内SK95検出状況 (北から) 9. SC72内SK95粘土除去後 (北から)

図版 4



図版 5



比恵遺跡群第71次発掘調査報告

遺跡略号 HIE-71
遺跡調査番号 9955

例　　言

1. 本章は福岡市博多区山王1丁目150他地内における共同住宅建設に先立ち、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成11年12月6日から3月1日にかけて発掘調査を実施した比恵遺跡群第71次調査の報告である。
2. 検出した遺構については、住居はS C、掘立柱建物はS B、溝はS D、井戸はS E、土壙はS K、ピットはS Pとし、ピット・住居・掘立柱建物以外は一括して通し番号を付した。
3. 本章に掲載した遺構の実測は担当の井上嗣子の他、桑原美津子、吹春憲治、大坪滋、坂田邦彦、八久保舞、森本幹彦が、写真撮影、製図は井上が行った。
4. 本章に掲載した遺物の実測・写真撮影・製図は井上が行った。
5. 本章の執筆・編集は井上が行った。
6. 本調査の出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理されるので活用されたい。

遺跡調査番号	9955	遺跡略号	HIE-71
調査地地番	福岡市博多区山王1丁目150番、152番1、153番、153番1		
開発面積	1363.64m ²	対象面積	881m ²
調査期間	1999年12月6日～2000年3月1日	分布地図番号	37-0127

I. はじめに

1. 調査に至る経過

1999年9月17日付で、地権者である大島康弘氏より、共同住宅建設に先立ち、博多区山王1丁目150他地内における埋蔵文化財の有無について事前審査申請が提出された。申請地は比恵遺跡群の比定地内に立地することから、埋蔵文化財課では1999年10月7日に敷地内において既調査部分を除く範囲の試掘調査を行った。その結果、現地表面下約100cmで鳥栖ロームに達し、遺構が検出された。この成果をもとに協議を行い、建物が建つ範囲内においてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存を図ることとした。また、大島康弘氏との間に発掘調査及び資料整理に関する受託契約を締結した。発掘調査は1999年12月6日に着手し、2000年3月1日に終了した。

2. 調査体制

調査委託 大島康弘

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 西憲一郎（前） 生田征生（現）

調査総括 埋蔵文化財課課長 山崎純男

調査第2係長 力武卓治

調査庶務 文化財整備課 谷口真由美（前） 御手洗清（現）

調査担当 試掘調査 田中壽夫 杉山高雄

発掘調査 井上蘭子

調査作業 伊藤美伸 乾俊夫 桑原美津子 高着一夫 志堂寺堂 柴田博 林厚子 吹春憲治
藤原直子 水野由美子 森本良樹

大坪滋 坂田邦彦 八久保舞（福岡大学） 森本幹彦（東京大学）

整理作業 坂井かおり 佐々木涼子 藤信子 山口とし子

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について大島康弘氏をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

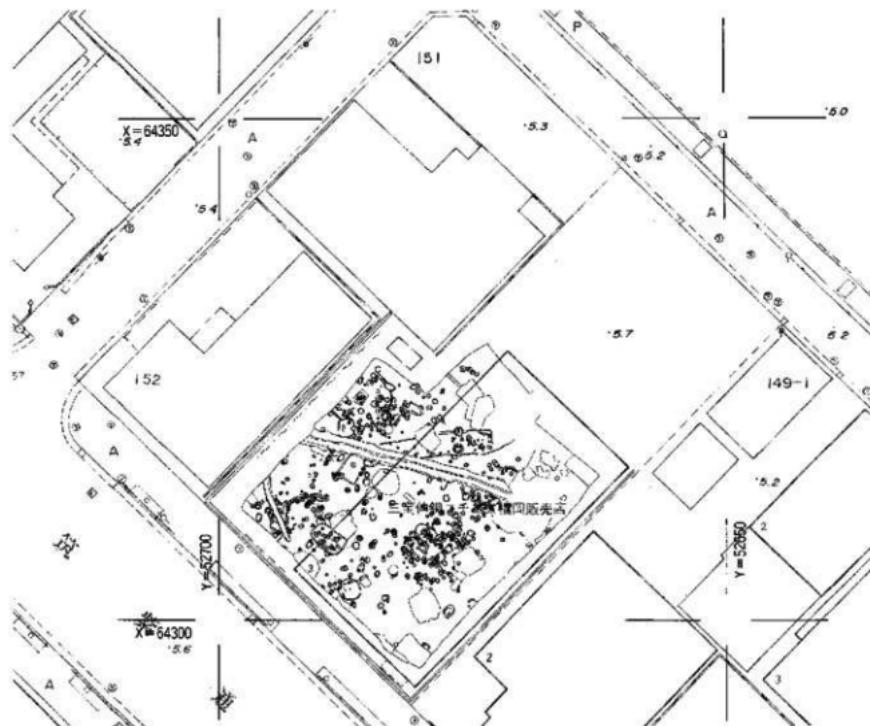
II. 調査の概要

1. 調査地点の位置

本調査区は、比恵遺跡群の北東端、筑紫通りの東側に位置する。山王公園を挟んだ北東側には山王甕棺遺跡、さらにその南側には比恵甕棺遺跡が立地する。比恵遺跡群内での筑紫通りより東側での調査は今回が初めてである。現地表下約100cm、標高約4.4~4.8mの鳥栖ローム上面で遺構が検出された。遺構面は調査区の南西から北東に向かって傾斜し、北東側は粘性の強い土質となっている。谷地形となるのであろう。北東側に遺構は少ない。台地の縁辺部にあたると思われる。

2. 調査経過

本調査は、1999年12月6日にバックホーによる表土剥ぎから開始した。残土置場の確保のために調査区を反転して作業を行った。盛上の下は暗茶褐色粘土質が堆積しており、これを除去すると鳥栖ロームが検出された。比恵遺跡群の端部であり、削平を受けていると思われるものの遺構の残りは比較的しっかりしていた。遺構検出・掘り下げの後に写真撮影、遺構実測を行い、2000年3月1日に撤収し、調査を終了した。



第1図 調査区位置図 (1/500)



第2図 調査区造構配置図 (1/200)

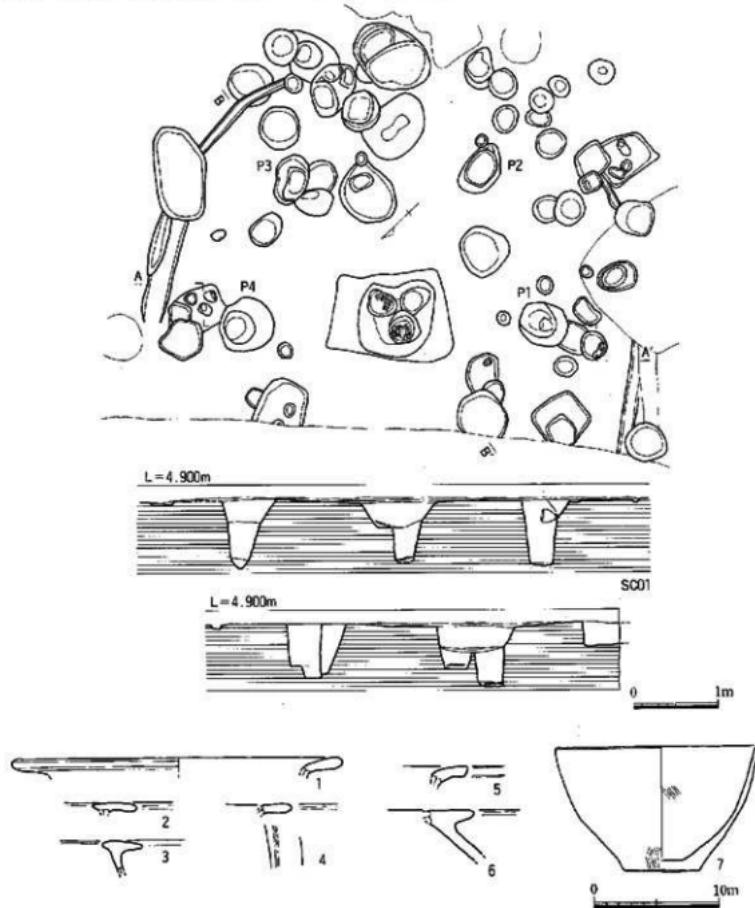
III. 調査の記録

1. 造構と遺物

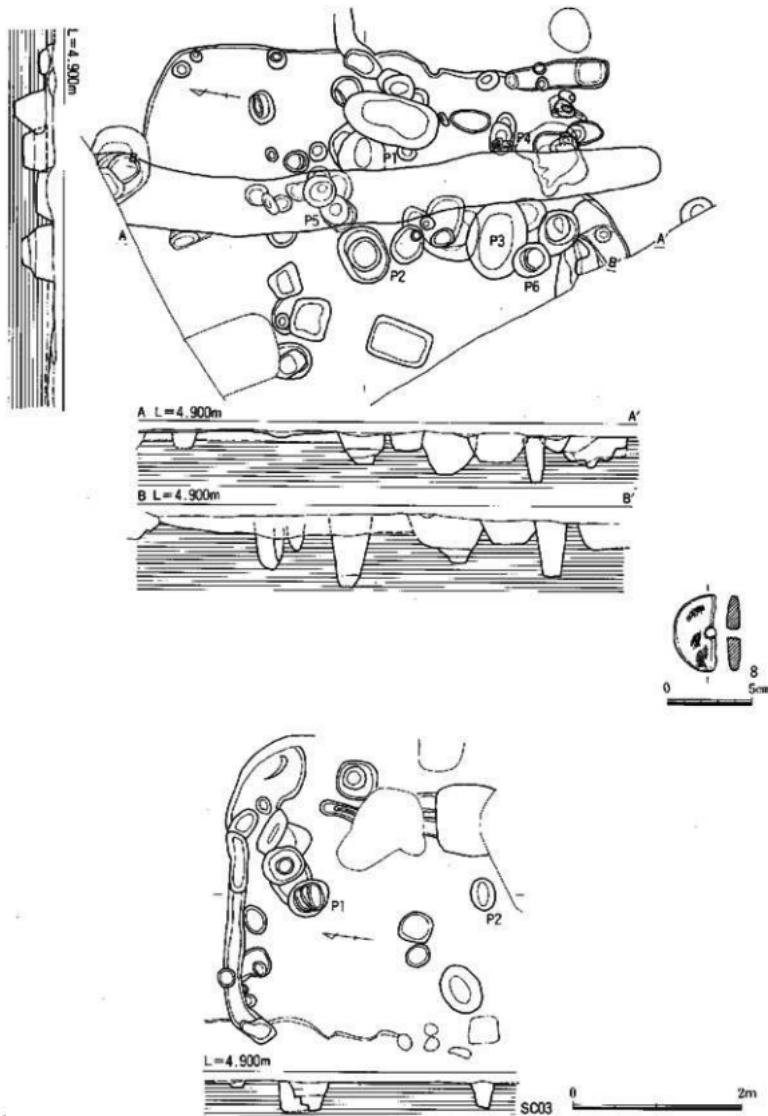
(1) 穹穴住居址

SC01 (第1図・図版2)

調査区北壁付近に位置し、壁に切られる。周溝のみが残っており、平面は直径約6mの円形を呈すると思われる。多くのピットに切られて主柱穴を検出するのが困難であったが、おそらくP1～P4が主柱穴になると思われる。P1の上部から鉢が出土している。SK85は屋内土壠と思われるが、



第3図 穹穴住居址実測図(1/60)・出土遺物実測図(1/4) 1



第4図 竪穴住居址実測図(1/60)・出土遺物実測図(1/3) 2

掘り下げたところ深さ65cm程のビットが3つ近接して検出された。そのうち2つからは底部で礎板状のものが検出されており、柱穴の可能性が高い。用途は不明である。屋内土壇、柱穴、周溝の中から少量の遺物が出土している。

出土遺物（第3図1～7・図版6）

1～6は甕の口縁部である。1、5の口縁はやや立ち上がり気味の断面逆L字状を呈する。1は口径26.2cmを測る。4は口縁部上面が平坦になるが、断面が逆L字状を呈する。いずれも弥生時代中期後葉であろう。2は鶴先状を呈する口縁部である。弥生時代中期中葉であろう。3は鶴先状口縁を呈し、口縁端部がやや下がり気味になる。6はおそらく鶴先状口縁を呈し、胴部は大きく張る器形となるであろう。いずれも弥生時代中期後葉であろう。7は鉢である。口径16.4cm、器高9.9cm、底径6.0cmを測る。内外面にハケメが残る。弥生時代中期後半であろう。

出土遺物から住居の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

SC02（第4図・図版2）

調査区の西コーナーに位置し、壁に切られる。全体にロームのブロックと暗褐色土が混ざったような埋土で非常に分かりにくかった。さらにSD25やその他のビットに切られ、プランも主柱穴も明確ではないが、全体に長方形状に落ち込むので住居址としておく。長軸6m以上、短軸4m以上となる。上柱穴は、深さや配置から考えてP1～P4の1本か、P5、P6の2本の2通りの可能性を指摘しておく。P1から滑石製の紡錘車が出土している。

出土遺物（第4図8・図版6）

8は滑石製の劔鍤車である。径4.5cm、最大厚さ0.8cmを測り、中央に孔が穿たれている。丁寧に研磨されている。

SC03（第4図）

SC02の東側に位置する。SC02と同様、住居址として明確に検出できなかった。貼床はなく、周溝状の溝が途中まで途切れながら伸びている。周溝の曲がり具合と、主柱穴と思われるビットの配置から、ほぼ3.5m×3.5mの正方形を呈する住居と思われる。上柱穴はP1とP2の2木柱と考えられる。図示できる遺物は出土していない。

（2）掘立柱建物

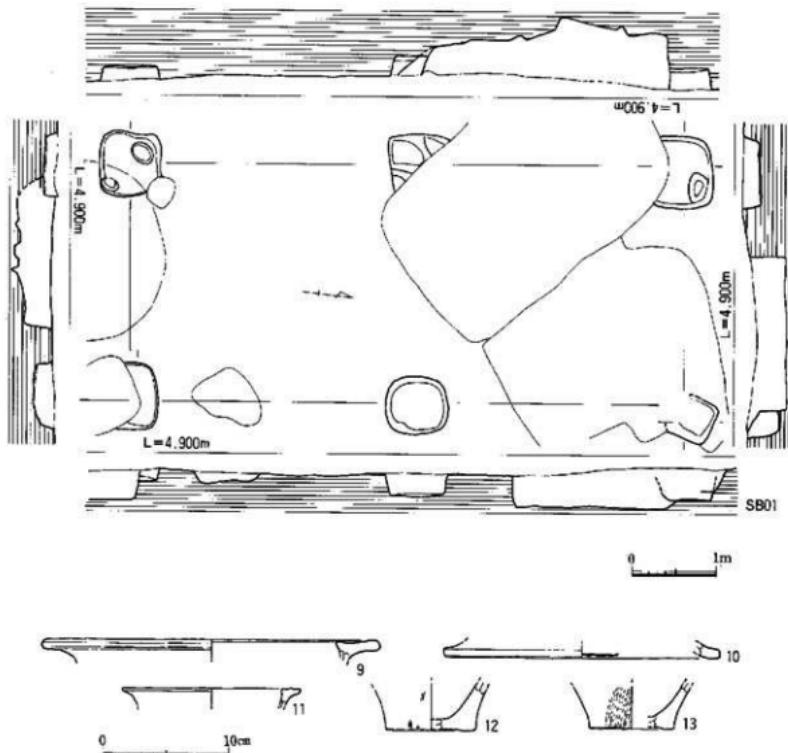
SB01（第5図）

調査区の西側で検出された。N-83°-Eの方位をとる。1間×2間で柱穴はすべて方形を呈し、柱穴間は2.8m～3.4mを測る。柱穴の埋土は黒色粘質土で、柱痕は検出されなかった。他の遺構や攪乱に切られる。遺物は柱穴から少量出土した。

出土遺物（第5図9～13）

9は甕の口縁部である。口縁部断面は鶴先状を呈し、口径は26.8cmを測る。弥生時代中期中葉であろう。10は蓋である。口径は22.2cmを測り、内面にはハケメが施される。弥生時代中期後半か。11は甕の口縁部である。口縁部上面は平坦で、断面は逆L字状を呈する。口径24.2cmを測り、胴部はややすぼまる。弥生時代中期後半か。12、13は甕の底部である。12は器底がやや厚く、平底を呈する。外間に部分的にハケメが残り、底径7.2cmを測る。13は器壁がやや厚く、上底を呈する。外間にハケメが施され、底径6.8cmを測る。いずれも弥生時代中期後半であろう。

出土遺物は少なく、断定はできないが、SB01は弥生時代中期後半の時期に相当するであろうか。



第5図 掘立柱建物実測図(1/60)・出土遺物実測図(1/4)

(3) 溝

SD01 (第6図・図版2・3)

調査区やや北寄りに位置し、N-67°-Wの方位をとり、ほぼ直線的に走る。幅1.5m~2.5m、深さ0.30m~0.35m、延長21.5mを測る。ゆるやかに斜めに掘削されるが、底部付近でほぼまっすぐに掘り込まれる。埋土は灰褐色粘質土である。遺物はさほど出土しておらず、摩耗したものが多かった。

出土遺物 (第8図14~28・図版6)

14、15は甕の口縁部である。14は器壁が厚く、断面が三角形を呈する口縁部を持ち、口縁部下部に突帯を一条巡らす。弥生時代中期前葉～中期中葉であろう。15は口縁部断面がゆるいく字状を呈し、口縁端部をやや平坦に仕上げる。口径は30.4cmを測る。調整が摩耗のため不明であるが、弥生時代後期後半頃であろうか。16は高杯の环部である。鋤先状口縁を呈し、口径27cmを測る。弥生時代中期後半であろう。17~21は甕の底部である。17、19は器壁の厚い上底を呈し、18はやや器壁が薄く平底に近い。底径は各々8.1cm、8.2cm、10.2cmを測る。17、18は弥生時代中期前半、19は中期後半であろう。20、21は丸底を呈するが、21は器壁が厚い。22は脚付きの鉢あるいは甕であろう。残高8.6cmを測る。23、24は高杯である。脚柱が細く基部が広がる器形であろう。残高は各々9.2cm、6.8cmを測る。25は器台である。口径13.2cmを測り、口縁部が朝顔状に開く器形となる。弥生時代後期後半～終末にかけて

の時期であろう。26は口径11.2cmを測り、碗状を呈する鉢である。古式土器である。27は須恵器の甕の胴部であろう。内面には青海波の当て具痕、外面には格子目のタタキ痕がわずかに残る。28は白磁の皿であろうか。内外面にややオリーブ色の釉がかかる。器形などは明確ではないが、中世前半頃であろう。

以上のようにSD01からは弥生時代から中世までの遺物が出土している。28は埋土のやや中央部から出土しており、SD01は中世前半頃までに埋没していると考えられる。

SD02 (第6・7図・図版2・3)

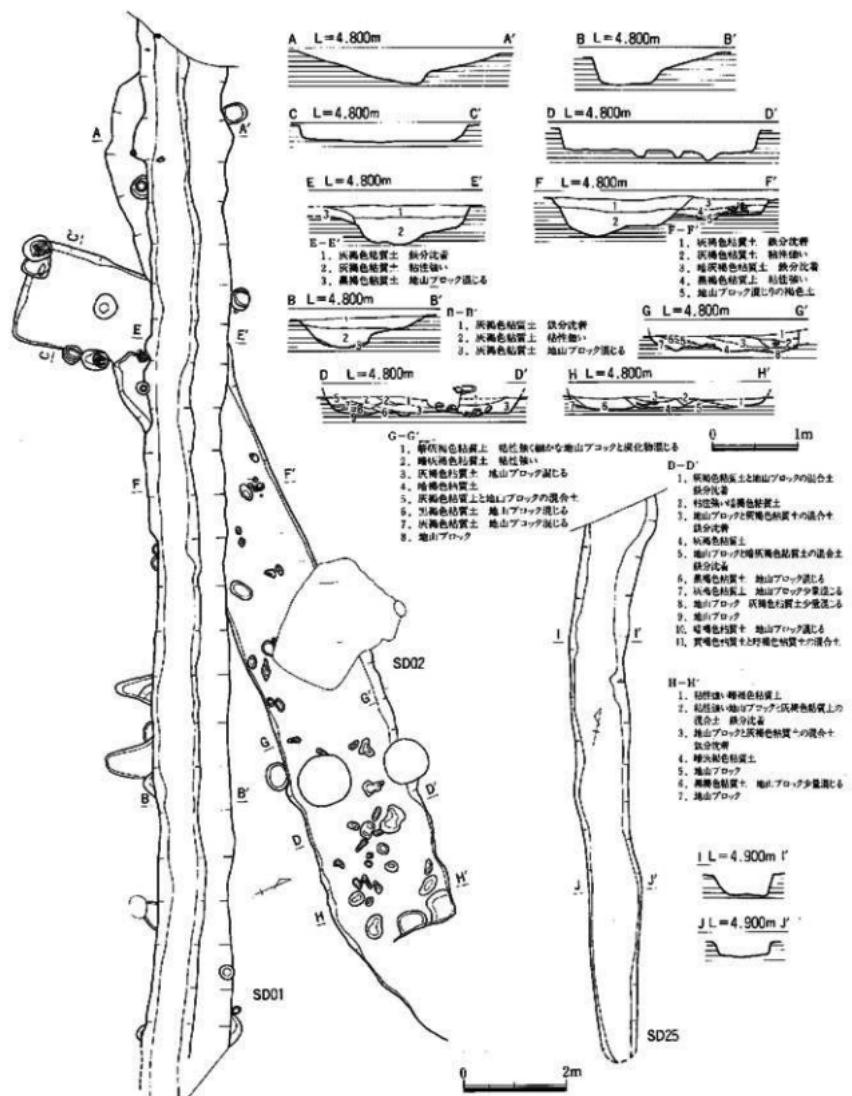
調査区のやや北寄りに位置する。SD01に切られ、N-89°-Wの方位で走り、SD01と交わる部分でN-42°-Eに方位を変える。幅2.0m~2.4m、深さ0.20m~0.25m、延長14.9mを測る。断面は長方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれているが、床面は細かな凹凸が無数にあり、なめらかな平坦面ではない。さらにSD01と交差する箇所から東側で、搅乱に切られている部分を除けば全面において土器が棄棄された状態で多量に検出された。特に溝の北側半分に集中している。土器の検出状況は床面から若干浮いたものと床面直上のものとに分かれが、土器の内容と3カ所の土層断面の観察からは時期差は明確に見られない。また、土層断面から、SD02は一度埋没した段階で、新たに掘り直された痕跡が見られる。溝の北側に集中している土器はこの2度目の掘削時に投棄されたものと考える。なお、溝の南側で検出された土器は最初の掘削時に投棄されたものであろう。

出土遺物（第8~10図29~67・72・図版6）

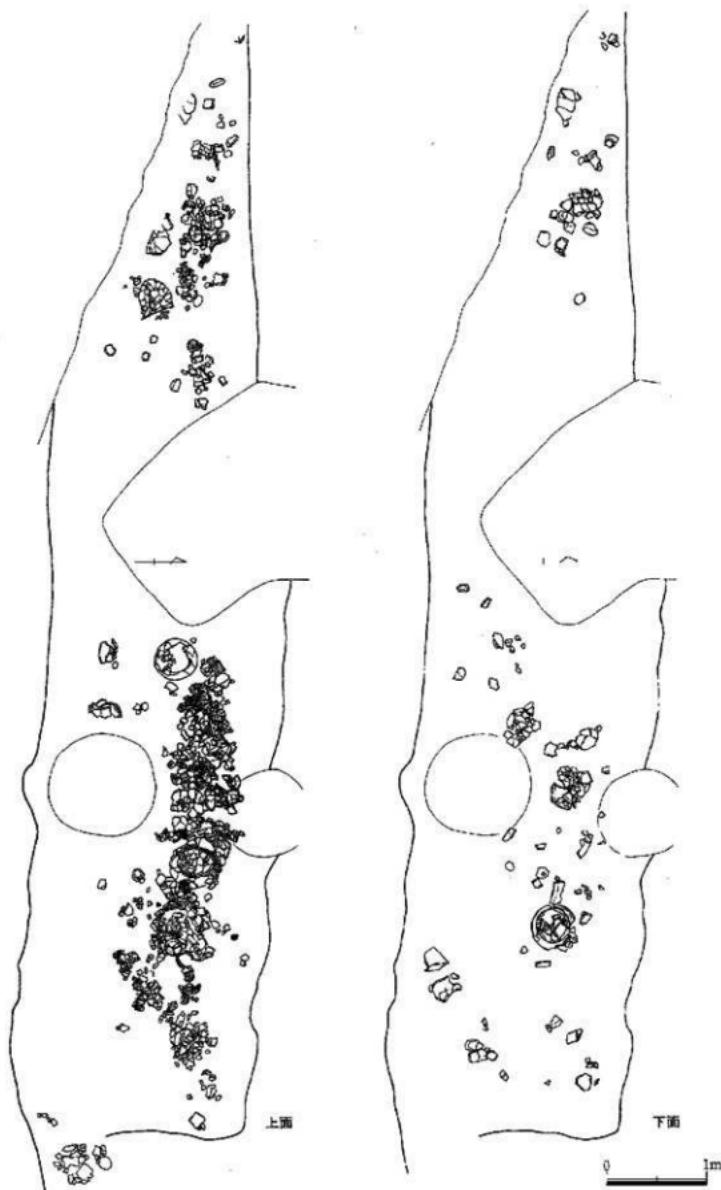
出土土器は一通りの器種がそろっており、良好な一括遺物といえよう。

29~35は甕である。30以外は口縁部断面がゆるくく字状を呈し、口縁端部は平坦に仕上げる。29、30、33は土器溜上層で出土している。29は外面にタテハケ、内面には一部タタキが施されており、口径は22.0cmを測る。33はほぼ完形である。頭部外面上部に横方向にタタキ、口縁部及び胴部外面にタテハケが、内面には一部ハケメが施される。口径16.0cm、器高30.2cm、底径2.0cmを測る。底部はほぼ丸底を呈する。30は他の甕に比べて口縁部がすばまり、胴部が大きく張る器形となる。頭部のしまり具合から広口甕に分類した方がよいかもしれない。摩耗が激しいが、外面にハケメ、内面にはハケメとタタキ痕が見られる。口径15.4cmを測る。31、32、34は上器溜下層から出土している。31は外面に斜め方向にハケメ、内面にヨコハケが施され、口径は23.6cmを測る。32は胴部外面にタテハケ、内面に細かなハケメが施され、口径23.2cmを測る。34は口縁端部をやや厚めに仕上げ、胴部外面と内面に粗いハケメが施される。口径は19.6cmを測る。35は上器溜上層で検出された。口縁部から胴部にかけて緩やかに丸曲し、口径が14.0cmを測る小型の甕である。外面に横方向にタタキ痕が残る。いずれも弥生時代終末である。

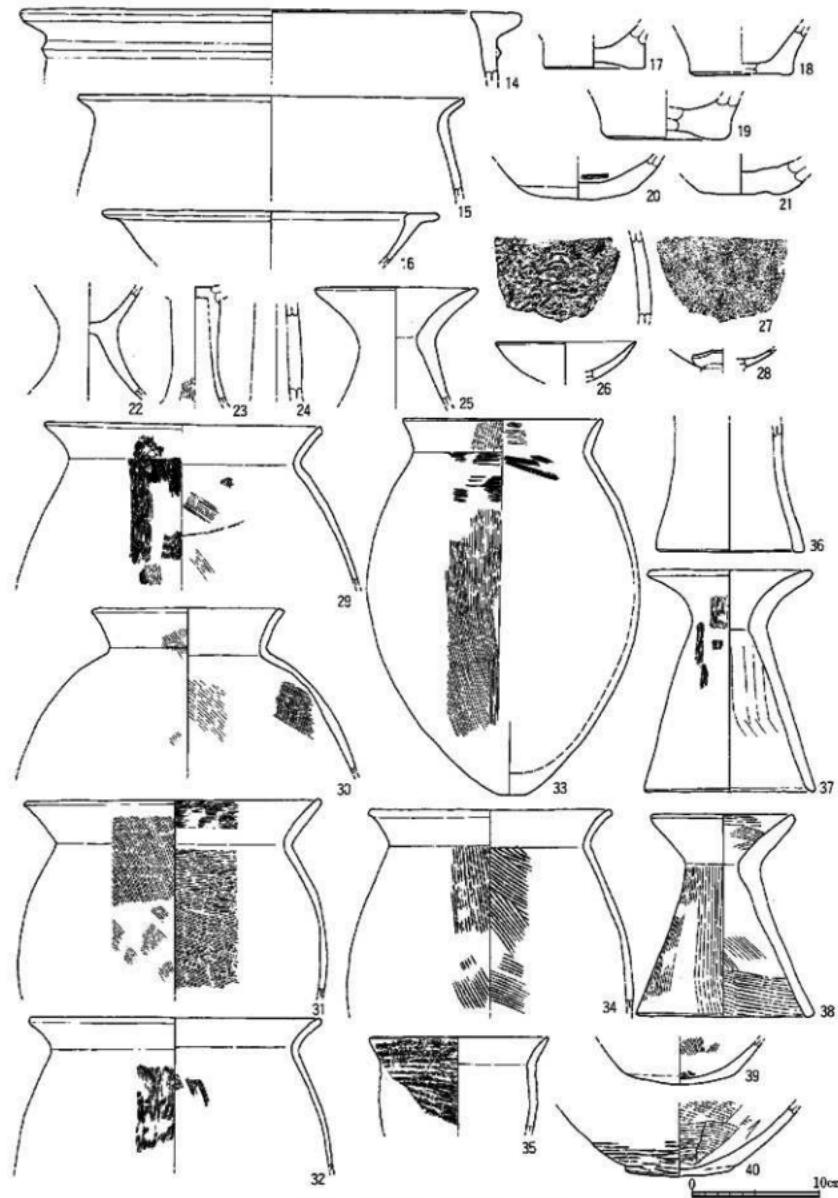
36~38は器台である。36、38は土器溜上層から、37は下層から、各々出土している。36は胴部から底部にかけての残存である。底径は11.8cmを測る。おそらく口縁部まで緩やかに開く器形となるのであろう。底部の端部は平坦に仕上げる。37、38は口縁部が朝顔形に開く器形となる。37は外面にタテハケ、内面には板状のもので成形した痕跡が見られる。口径13.2cm、器高17.7cm、底径13.6cmを測る。38は外面にタテハケ、内面には横方向や斜め方向にハケメが見られる。口縁部と底部の端部は平坦に仕上げる。口径11.2cm、16.2cm、底径14.4cmを測る。37、38は弥生時代終末である。39、40は甕の底部である。いずれも上器溜上層からの出土である。39は丸底に近い底部を呈し、底径8.6cmを測る。内面にハケメが施される。40は五様式系統の甕の底部である。底径8.6cmを測れ、外面にタタキ、内面に粗いハケメが施され、成形される。弥生時代終末である。



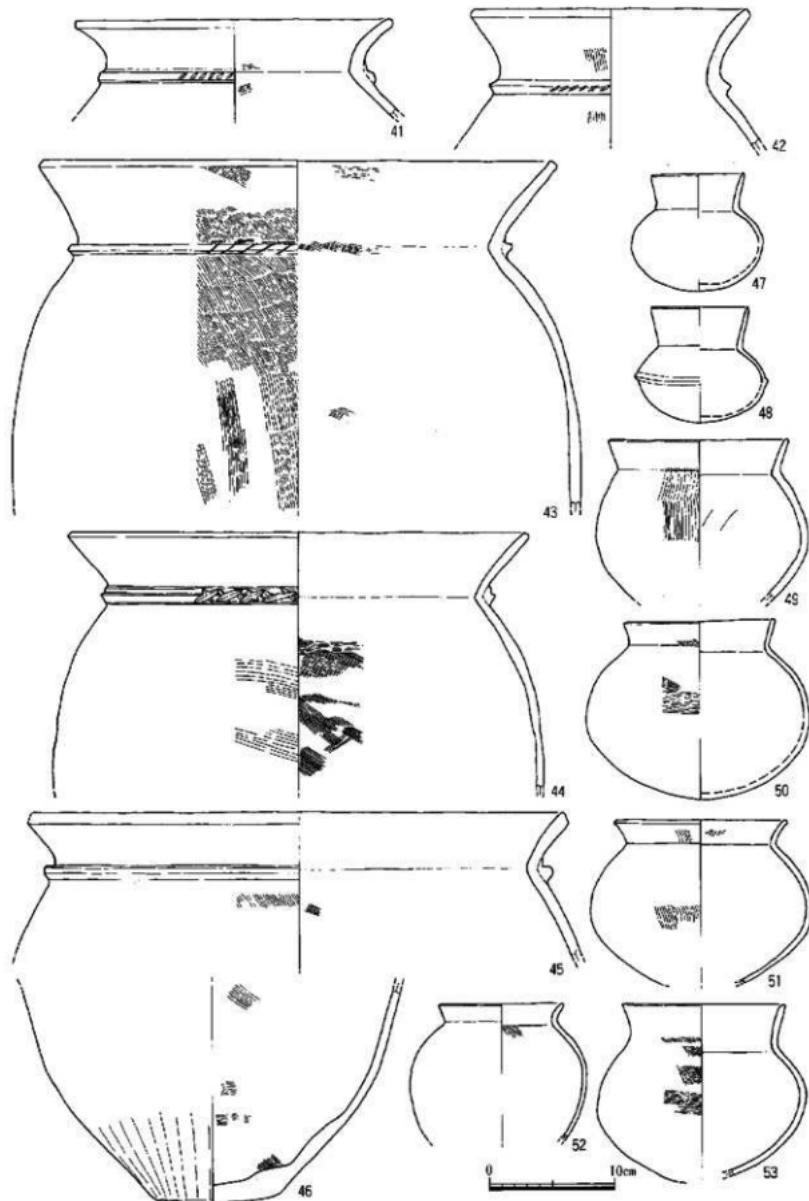
第6図 溝実測図 (1/100、1/60)



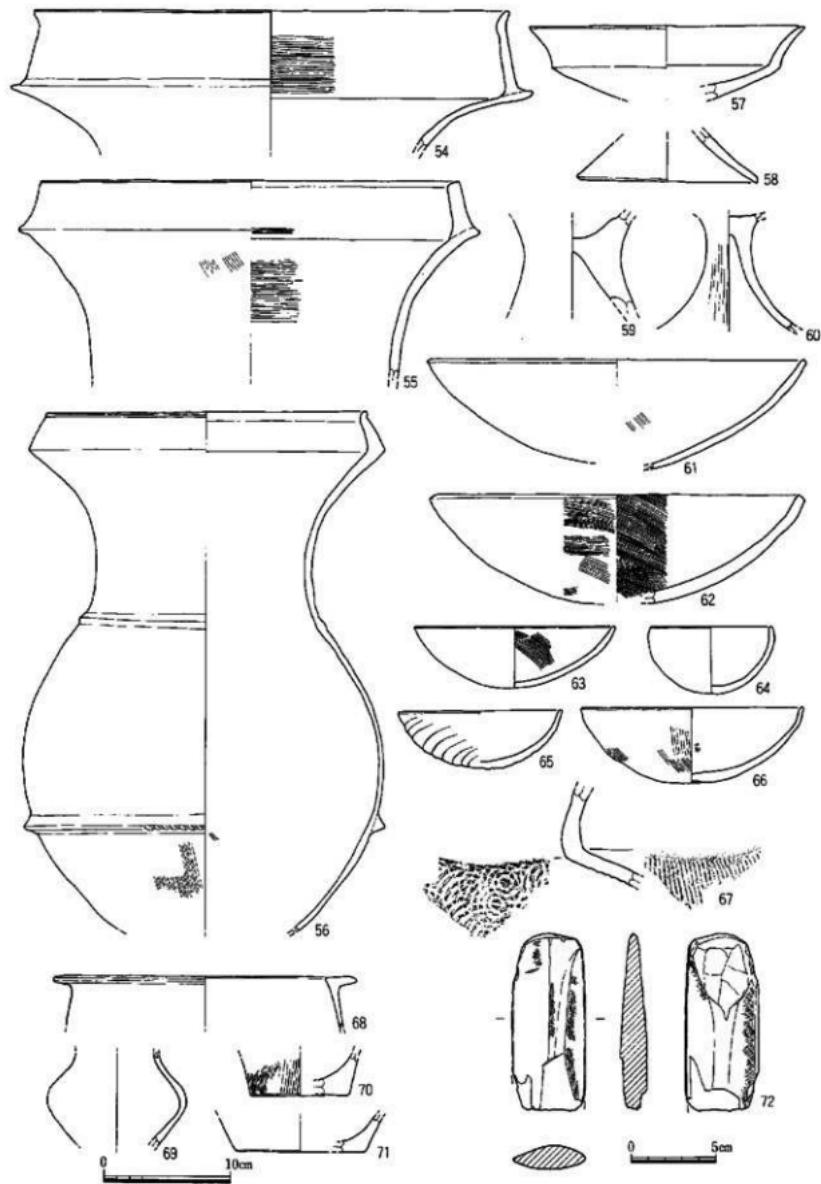
第7図 SD02土器窯実測図 (1/50)



第8図 溝出土遺物実測図1 (1/4)



第9図 溝出土遺物実測図2 (1/4)



第10図 溝出土遺物実測図 3 (1/4、1/3)

41、42は壺に分類する。41は口縁部から胴部にかけてく字状に屈曲し、頸部に刻み目が施される突帯が巡る。口径25.4cmを測る。土器溜上層出土である。42は41に比べて口縁部が長くなり、頸部に刻み目が施される断面三角形の突帯が巡る。口径22.6cmを測る。土器溜下層出土である。43~45は大型甕である。いずれも土器溜下層から出土した。口縁部から胴部にかけてく字状に屈曲し、頸部に突帯が巡る。43は突帯に斜めに刻み目が施され、外面にはハケメ、内面には部分的にハケメ痕が残る。口径41.4cmを測る。44は突帯にはX状の刻み目が連続して施される。外面にはやや粗いハケメ、内面には細かなハケメが施される。口径は36.8cmを測る。45は、突帯には刻み目は施されず、外面と内面には部分的にハケメ痕が残る。口径は43.0cmを測る。46は壺の底部である。土器溜下層から出土した。底部は丸底に近く、底径10.0cmを測る。外面はヘラケズリで成形され、内面は部分的にハケメが残る。以上はいずれも弥生時代終末である。

47、48は小型丸底甕である。土器溜上層から出土した。47は口径7.4cm、器高9.4cm、48は口径7.6cm、器高9.2cmを測る。48には胴部に一条突帯が巡る。いずれも古式上師器で古墳時代初頭であろう。49~53は短頭甕である。49、51は土器溜上層、他は下層出土である。いずれも口縁部から胴部にかけてく字状に屈曲する器形である。49は外面にタテハケが施され、口径14.4cm、器高13.0cmを測る。50は外面にハケメ痕が残り、口径12.4cm、器高14.2cmを測る。51は内外面にハケメが残り、口径14.0cm、器高13.0cmを測る。52はやや小型となる。口径10.0cm、器高11.0cmを測る。53は口縁部がやや長く伸びる。外面にハケメが施され、口径13.0cm、器高13.6cmを測る。弥生時代終末であろう。50、52は古墳時代初頭に入る可能性がある。

54~56は二重口縁甕である。54、55は土器溜上層、56は下層出土である。54はかなり大型の甕となるだろう。口縁部から頸部にかけて強く屈曲し、口縁端部は外反する。内面はヨコハケが施され、口径37.8cmを測る。55は54に比べて若干屈曲がゆるくなり、内面はなめらかに仕上げる。口縁端部はやや平坦に仕上げる。口径は33.4cmを測る。外面に一部ハケメ、内面にヨコハケが施される。56は底部以外はほぼ残存している。口径25.4cm、器高41.4cmを測る。口縁部は逆く字状に屈曲し、端部は外反する。頸部から胴部への境目と、胴部下方に突帯が巡る。胴部の突帯は断面三角形を呈し、刻み目が施される。いずれも弥生時代終末であろう。

57、58、60は高杯である。57は杯部で、逆く字状にゆるく開く。口径は21.8cmを測る。58は脚部の柄である。底径14.4cmを測り、内面にハケメが施される。60は脚部で、ゆるやかに開く。外面にタテハケが施される。弥生時代後期後半~終末にかけての時周か。59は脚付きの鉢あるいは甕であろう。残高7.6cmを測る。57~59は土器溜上層、60は下層出土である。61~66は鉢である。61~64は土器溜上層、65、66は下層出土である。61は口縁端部は平坦に仕上げ、口径30.2cm、器高8.8cmを測る。62も61と同様の器形で、口径30.0cm、器高8.6cmを測る。外表面にハケメが施される。63は口径16.0cm、器高4.8cmを測り、内面にハケメが施される。64は他に比べて口縁部が内側にすぼまる。口径9.8cm、器高5.3cmを測る。65は外面にタタキのような痕跡が残る。口径13.0cm、器高4.6cmを測る。66は口径18.0cm、器高6.0cmを測る。弥生時代終末であろう。67は須恵器の甕であろう。外面には平行のタタキ痕、内面には青海波の當て只痕が残る。他の遺構の混入品か。72は右剣の再加工品であろう。残長10.6cm、幅4.4cm、最大幅1.4cmを測る。

SD02の出土遺物は、一部古墳時代初頭にかかるもののそのほとんどが弥生時代終末に相当するものである。従って、この時期に一括して土器が投棄されたものと思われる。ただ、大型の甕や甕が3個体伏せた状態で検出されており、また、土器溜が溝の北側に偏っていることから見ても、何らかの規則性を持たせて土器が投棄されたと考えられる。

SD25 (第6図・図版2)

調査区西コーナーに位置し、SC02を切る。N-14°-Wの方位をとるが、南の方は途切れしており、不明である。幅0.70m、深さ0.20m~0.25m、延長6.6mを測る。遺物は少量出土している。

出土遺物 (第10図68~71)

68は壺の口縁部である。逆T字状に近い鋸先状口縁を呈し、口径は24.0cmを測る。弥生時代中期中葉であろう。69は壺の胴部である。胴部最大径10.8cm、残高7.4cmを測る。70、71は壺の底部である。70はやや器壁の厚い平底を呈し、外面にタテハケが施される。底径8.0cmを測る。71は平底を呈し、底径10.2cmを測る。69~71は弥生時代中期後半であろう。SD25の時期は弥生時代中期後半であろうか。

(4) 井戸

SE03 (第11図・図版4)

調査区の南端に位置し、壁に切られる。平面は円形を呈し、直径0.87m、深さ0.70mを測る。底面は凹凸が激しく、弥生時代後期の壺の破片が直上で出土している。

出土遺物 (第12図73・図版7)

73は二重口縁壺の口縁部である。口縁部は逆く字状に屈曲し、端部は平坦に仕上げる。頸部外面にタテハケが施される。口径は22.8cmを測る。弥生時代後期中葉であろう。

SE03の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

SE04 (第11図・図版4)

調査区の南端、SE03の西側に位置する。平面は楕円形を呈し、長径1.25m、短径0.99m、深さ0.77mを測る。底面付近に木片や土器が検出された。遺物は少量出土している。

出土遺物 (第12図74・75)

74は壺の口縁部である。口縁部はやや開き気味に立ち上がり、口径16.2cmを測る。75は高环の脚部であろう。裾の端部は内側につまみ出して作り出す。底径16.2cmを測る。弥生時代中期後半であろう。

SE05 (第11図・図版4)

調査区南寄り、SE06の北隣に位置する。平面はほぼ円形を呈し、長径1.0m、短径0.92m、深さ0.84mを測る。底面は凹凸が激しい。

出土遺物 (第12図76~80・図版7)

76、77は壺の底部である。76は器壁がやや厚い平底を呈し、底径7.2cmを測る。77は上底に近い平底を呈し、底径10.0cmを測る。弥生時代中期後半であろう。78は壺の口縁部である。鋸先状に近い断面逆く字状の口縁を呈し、口径30.5cmを測る。弥生時代中期後半であろう。79は壺の口縁部である。断面は逆く字状を呈し、二重口縁壺となるのである。弥生時代後期中葉か。80は器台であろう。天地に疑問は残るが底部とした。底径8.2cmを測る。

SE06 (第11図・図版4)

調査区南寄り、SE05の南隣に位置する。平面はほぼ円形を呈し、長径1.15m、短径1.08m、深さ1.12mを測る。底面は凹凸が激しい。

出土遺物 (第12図81~87・図版7)

81は壺の口縁部である。口縁部はやや反り気味のく字状に屈曲し、口径は19.5cmを測る。弥生時代中期後葉~後期前葉頃であろう。82は壺の口縁部であろうか。口縁部は内湾気味にやや開いて立ち上がり、口径は12.6cmを測る。器壁は厚い。弥生時代後期であろうか。83~85は壺の底部である。83は器壁の厚い平底を呈し、底径6.0cmを測る。弥生時代中期前半頃であろう。84は器底の薄い平底を呈し、底

径10.2cmを測る。外面にタテハケが施される。弥生時代中期後半か。85は丸底に近い平底を呈し、底径7.2cmを測る。外面にタテハケが施される。弥生時代後期中葉であろう。86は甕の口縁部である。断面く字状を呈するのである。口径17.4cmを測る。弥生時代後期であろう。87は甕の胸部である。内外面にハケメが施され、器壁は薄く、胸部最大径は28.0cmを測る。弥生時代後期後葉～終末であろう。

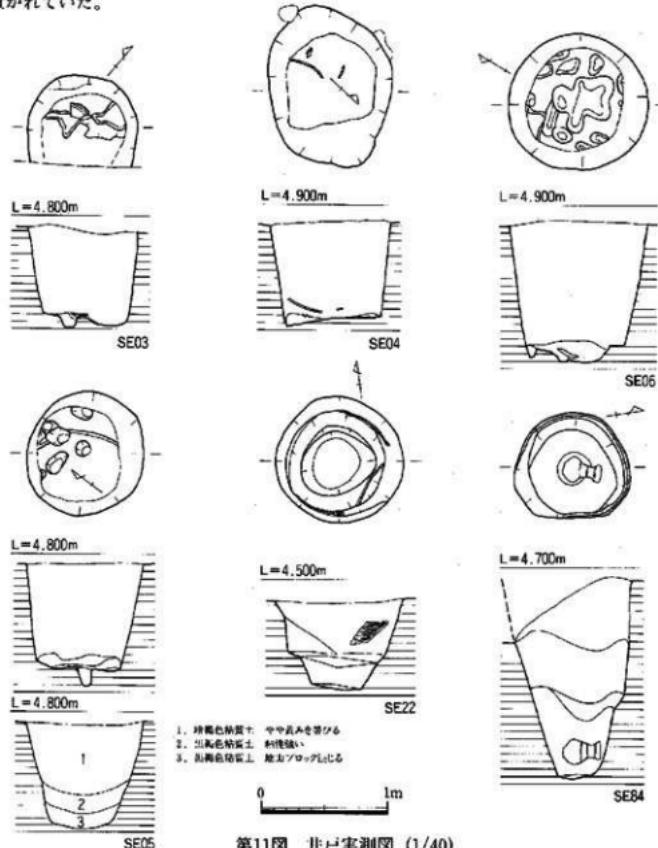
以上の出土遺物から、SE06の時期は弥生時代終末と考えられる。

SE22 (第11図・図版4)

調査区中央からやや東寄りに位置し、SD02を切る。SE84の南に位置する。平面はほぼ円形で、直径1.02m、深さ0.72mを測る。底面付近で二段掘り状に掘り込まれる。壁には部分的に木片が貼り付いていた。井戸枠の残骸であろう。図示できる遺物は出土していない。

SE84 (第11図・図版4)

調査区北東寄り、SE22の北側に位置し、SD02を切る。平面はほぼ円形を呈し、長径0.92m、短径0.84m、深さ1.60mを測る。逆円錐状に掘り込まれ、底面付近に丹塗り磨研の袋状口縁塗が横向きに据え置かれていた。

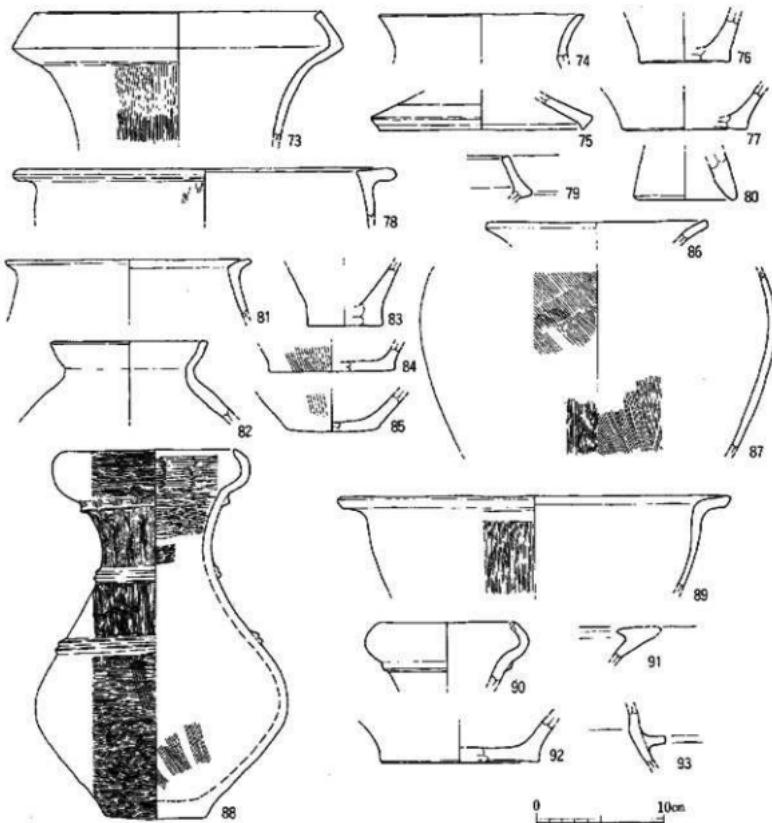


第11図 井戸実測図 (1/40)

出土遺物（第12図88～93・図版7）

88は井戸の底面付近で検出された丹塗り磨研の袋状口縁壺である。ほぼ完形で、検出時は鮮やかな赤褐色を呈していた。外面全面と袋部内面には丹塗り磨研が施される。頸部外面には3条の突帯が巡るが、口縁部直下の突帯は断面三角形を呈し、他の2条は口唇状突帯である。頸部上半部の突帯間にミガキの暗文が施される。口径13.6cm、器高29.5cm、底径8.0cmを測る。89は鉢の口縁部である。口縁部はゆるやかに開き、口径31.3cmを測る。外面にタテハケが施される。90は袋状口縁壺の口縁部である。口縁部直下に断面三角形の突帯が巡る。口径10.4cmを測る。91は壺の口縁部である。口縁端部を内側につまみ出す。92は壺の底部である。平底を呈し、底径12.6cmを測る。93は瓢形土器の胴部片である。

以上の遺物は弥生時代中期後半～中期末にかけての時期である。よってSE84の時期も弥生時代中期後半～中期末と考えられる。



第12図 井戸出土遺物実測図 (1/4)

(5) 土壙

SK07 (第13図・図版4)

調査区南西側の壁際に位置し、SB01に切られる。平面はほぼ円形を呈し、長径2.26m、短径2.14m、深さ0.47mを測る。検出時は径1mの土壙として掘削を始めたが、壁が袋状に広がるため、半裁にして土層を観察した。すると本来は袋状に掘削された貯蔵穴であることが確認された。遺物は少量出土している。

出土遺物 (第14図94~97・図版7)

94~96は弥生時代前期はじめごろの壺の口縁部である。いずれも口縁部に2条突帯が巡らされ、突帯には刻み目が施される。摩耗が激しく内外面の調整は不明である。97は壺の底部である。器壁はやや厚く上底を呈し、底径7.0cmを測る。底部外面は指押さえで調整される。94~96と同じく弥生時代前期であろう。

出土遺物からSK07の時期は弥生時代前期と考えられる。

SK08 (第13図・図版4)

調査区西寄りに位置し、SB01を切る。平面は長方形を呈する。長軸3.5m、短軸2.14m、深さ0.46m~0.76mを測る。底面は凹凸が激しい。性格は不明である。時期は、SB01との切り合い関係から考えて弥生時代中期後半以降であろう。

出土遺物 (第14図98・99・図版7)

98は壺の底部である。器壁はやや薄く平底を呈し、底径9.0cmを測る。弥生時代中期後半であろうか。99は立岩産石包丁である。残長7.4cm、幅4.8cm、最大厚さ0.4cmを測る。

SK18 (第13図・図版5)

調査区南寄り、SE06の東に位置する。平面形は台形を呈し、長さ1.0m、最大幅0.74mを測るが、削平されて底面付近のみ残っている状態である。鉄製品が埋土中から出土している。

出土遺物 (第14図100・図版7)

100は不明棒状鉄製品であるが、やや曲がっている。残長6.3cm、断面は0.8cm×0.6cmを測る。メタルチェッカーにより計測したメタル度はMである。

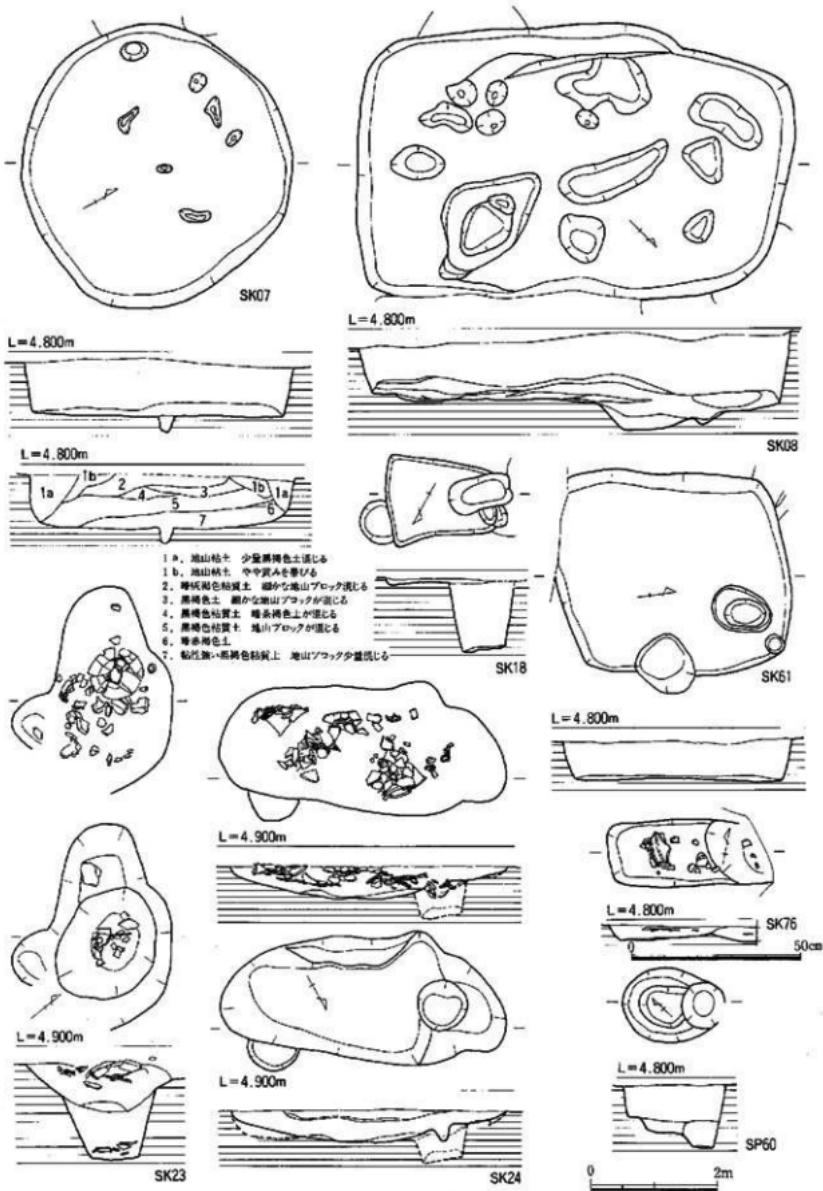
SK23 (第13図・図版5)

調査区西寄り、SK08の北側に位置する。平面は不整梢円形を呈し、二段掘りに掘削される。長軸1.64m、短軸1.26m、最深0.80mを測る。上面に土器が散布しており、掘り下げるとき底面付近にも土器が検出された。

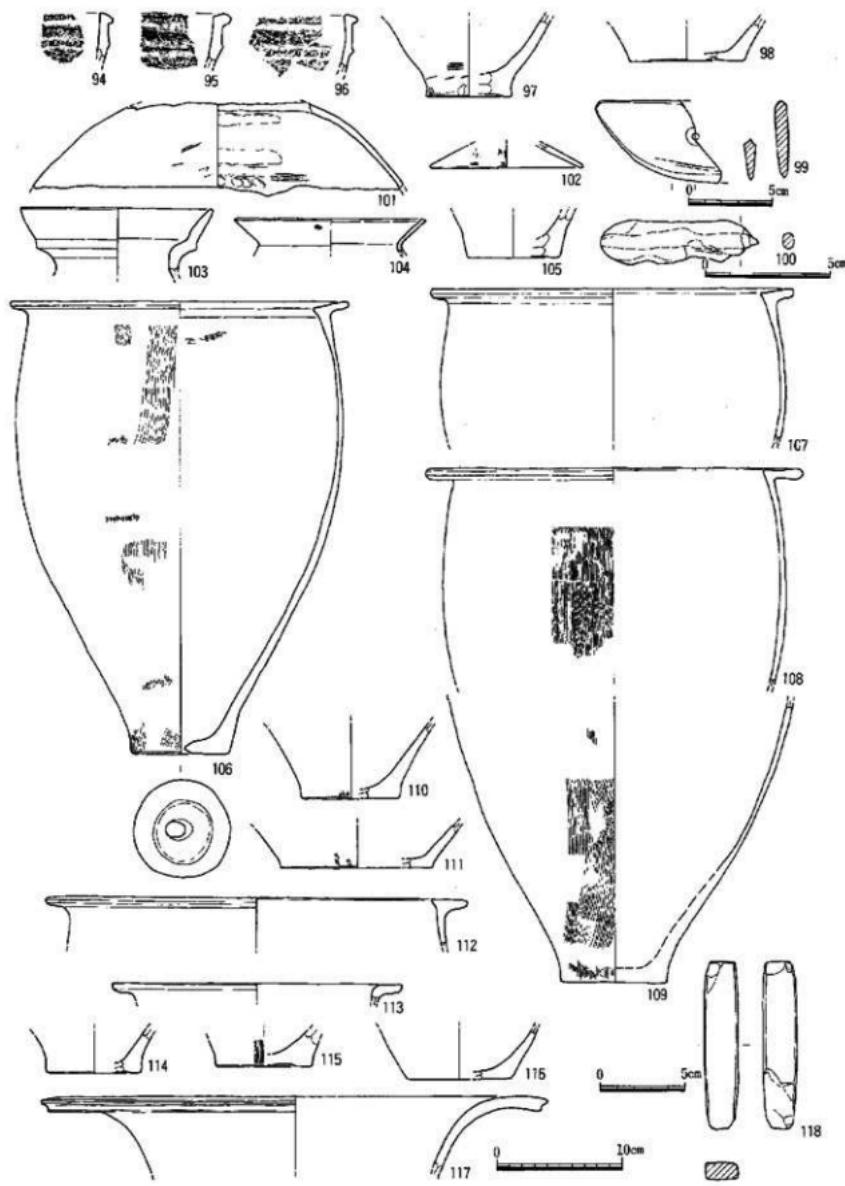
出土遺物 (第14図101~105・図版7)

101、103は上面で検出された。101は大型壺の胴部上半部分である。外面はタタキ、内面はハケメで調整される。残存部分の上部の径は15.0cm、下部の径は30.2cm、残高6.6cmを測る。口縁部と胴部下半部分を欠き、掘え置かれた状態で検出された。内面は指押さえ成形の後タタキの痕跡が見られる。103は山陰系の二重口縁壺の口縁部であろうか。断面逆字字状に外反して開き、口径は15.2cmを測る。いずれも古墳時代初頭であろう。102~105は埋土中から出土した。102は高杯の脚部である。脚柱は細く、裾が大きく開く器形であろう。底径12.2cmを測る。104は壺の口縁部である。器壁は薄く、口縁部がく字状に屈曲する。頸部にタタキ痕が残り、口径20.0cmを測る。布留系の壺であろう。いずれも古墳時代初頭である。105は壺の底部である。器壁が厚く、やや上底を呈し、底径7.4cmを測る。弥生時代中期前半か。

出土遺物からSK23の時期は古墳時代初頭と考えられる。



第13図 土壌・ピット実測図 (1/40、1/30)



第14図 土壌出土遺物実測図 (1/4、1/3、1/2)

SK24（第13図・図版5）

調査区北端に位置する。平面は不整楕円形を呈し、長軸2.26m、短軸1.06m、深さ0.26mを測る。埋土上面から底面にかけて、全面にわたり、4個体以上の甕がつぶれた状態で検出された。祭祀遺構であろう。

出土遺物（第14図106～112・図版7）

111以外は甕である。106は口径27.0cm、器高36.2cm、底径9.8cmを測る。鋸先状口縁を呈し、底部は穿孔される。摩耗が激しく調整は明確ではないが、内外面にハケメの痕跡が残る。107も106に類似した口縁部を持ち、口径29.0cmを測る。調整は不明である。108は106、107に比較して口縁部上面が平坦になる。外面にハケメが施され、口径30.2cmを測る。109は胴部下半部である。底部は平底を呈し、穿孔は見られない。外面にハケメが施され、底径は8.6cmを測る。110は底部である。平底を呈し、底径8.0cmを測る。112は口縁部である。鋸先状口縁を呈し、上面は平坦になる。口径は33.6cmを測る。111は甕もしくは鉢の底部であろう。器壁はやや薄く平底を呈し、底径は12.2cmを測る。いずれも弥生時代中期中葉の時期であろう。SK24の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

SK61（第13図・図版5）

調査区北寄りに位置し、SC01を切る。平面は長方形を呈し、長軸1.86m、短軸1.62m、深さ0.30mを測る。遺物は少量出土している。

出土遺物（第14図113・114・116）

113は甕の口縁部である。断面逆L字状を呈し、口径は23.2cmを測る。弥生時代中期後葉であろう。114・116は甕の底部である。114は底径7.6cmを測り、やや上底を呈する。116は底径8.6cmを測り、器壁の薄い平底を呈する。114は弥生時代中期中葉～中期後葉、116は弥生時代中期後葉～後期前葉頃であろうか。

SC01との切り合い関係と出土遺物から、SK61の時期は弥生時代中期後葉～後期前葉と考えられる。

SK76（第13図・図版5）

調査区北端に位置し、壁に切られる。平面はおそらく長方形を呈し、長軸0.9m以上、短軸0.4m、深さ0.06m以上を測る。柱穴の可能性もある。上面に遺物が散布していた。

出土遺物（第14図115・117・118・図版7）

115は甕の底部である。底径7.6cmを測り、やや上底を呈する。117は壺の口縁部である。口縁部は大きく外反し、端部には凹線が巡る。口径40.2cmを測る。115、117は弥生時代中期中葉頃であろうか。118は良石製の手持ちの砥石である。全面使用されている。全長10.0cm、幅2.0cm、厚さ1.0cmを測る。

出土遺物から、SK76の時期は弥生時代中期中葉頃と考えられよう。

（6）ピット・その他出土遺物

SP60（第13図・図版5）

調査区南寄り、SE05の西側に位置する。柱根状の掘り込みが見られたためピットとしたが、対応する柱穴は不明である。

出土遺物（第15図119～121・図版7） 119、120は支脚である。119は口径8.6cm、器高15.6cm、底径8.6cm、120は口径9.8cm、器高14.8cm、底径8.6cmを測る。指押さえで成形される。埋土上部と底面付近から各々削り出している。弥生時代中期後葉であろう。121は玄武岩製の石錐である。両側面がひもを掛けるために打ち欠かれる。全長10.2cm、幅8.2cm、最大厚さ2.8cmを測る。

出土遺物からSP60は弥生時代中期後葉であろう。

SP56・SP165（第15図122・図版7）

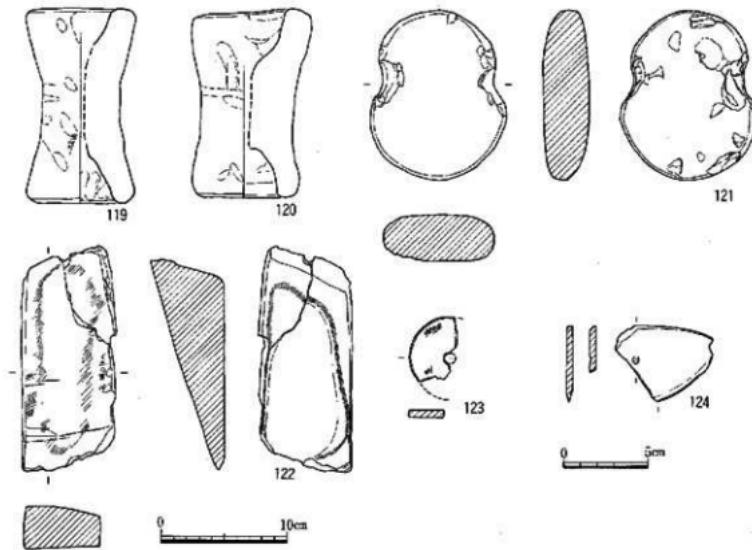
122は砂岩製の砥石である。2面使用されている。残長17.8cm、幅7.2cm、最大厚さ6.0cmを測る。なお、各々のピットから出土した破片が接合したものである。

SP248（第15図123・図版7）

123は滑石製の紡錘車である。復元直径5.0cm、厚さ0.5cmを測る。

過構検出中出土遺物（第15図124・図版7）

124は砂質頁岩製の石包丁である。残長6.0cm、最大幅4.4cm、厚さ0.4cmを測る。孔は貫通しておらず木製品である。



第15図 ピット・その他出土遺物実測図 (1/4, 1/3)

2. 小結

以上簡単ではあるが、本調査地点の概要を述べた。以下に現時点で判明したこととまとめてみたい。本調査地点は、先にも述べたように、比恵遺跡群内では筑紫通りを東に越えた初めての地点である。周辺の調査はなく、比較的近い調査地点は第30次、第31次、第33次、第43次各調査地点である。第30次・31次調査地点は本調査地点の南西側に位置しており、第30次調査地点のほぼ全面と第31次調査地点の西側には貯蔵穴が分布している。また、第31次調査地点の南半分と西側の試掘調査から、台地を横切る河川が第31次調査地点の南側から北西に向かい流れていることが想定されている。第33次、第43次調査地点は本調査地点の南に位置しており、弥生時代中期から後期にかけての集落が確認されている。

さて、本調査地点の遺構検出面は標高4.4～4.8mで、南西から北東に向かって傾斜する。遺構の残存状況から見て遺構面は削平を受けていると思われるものの、第30次・31次調査地点の標高が5.2～5.4m、第33・34次調査地点の標高が約6mであることから考えて、約0.4m～2m近く遺構面である鳥栖ロームが落ちていることがわかる。さらに第31次調査地点と周辺の試掘調査の結果から、本調査地点南西側の筑紫通り付近までは河川もしくは谷地形であったが、本調査地点周辺は生活が営まれていた台地であったと想定できる。その台地も、現在の山王公園付近で程なく谷地形となり落ちていくのである。

遺構は、弥生時代前期の貯蔵穴、弥生時代中期中葉～終末にかけての竪穴住居址、掘立柱建物、溝、井戸、土壙、中世前半の溝が検出されている。主なものについて簡単に説明する。

溝は3本検出された。そのうちSD02は土器が集中して検出され、西から南西へ方向を変えて途切れている。本来両端が延長して続いているのか、現状通り途切れていったのかは不明である。底面もほぼ平坦であり、SD01やSD25と明らかに性格が異なる。第40次・第48次調査地点で検出されたSD48・SD04（一連のもの）と規模・形状・時期が類似しており、何らかの関連性が考えられる。井戸は6基検出された。そのうちSE84は他の井戸に比べて底面の標高が低く、堀方も逆円錐形を呈し、底面に完形の丹塗り磨研塗を据え置いていた。他の井戸は溜め井戸としての性格を持つものかもしれない。

土壤の内、SK07とSK24は注目される。SK07は弥生時代前期の貯蔵穴であり、本調査地点ではこれ1基のみ、調査区の南西端に位置していた。第30次調査地点と第31次調査地点の一部で貯蔵穴が分布しているが、第30次調査の報告の中で、担当者は南北50m以上、東西約20mの占有面積1000m²～1200m²の貯蔵専用の領域を想定している。第30次調査地点の北側にはさらに貯蔵穴が広がるようであるが、今回の調査で河川または谷を挟んだ北東側にも貯蔵穴が広がることが判明した。また、SK24は4個体以上の甕がつぶれた状態で出土している。そのうち1個体の甕の底部には穿孔があり、何らかの祭祀が行われた遺構と考えられる。

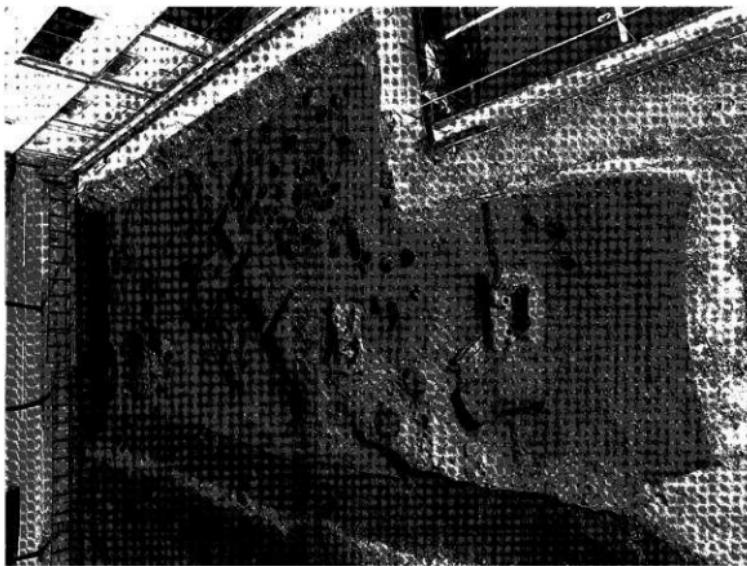
本調査地点の遺構は大きく4期に分けられる。第1期は弥生時代前期で、SK07の貯蔵穴が相当する。第2期は弥生時代中期中葉～中期後半である。SC01、SB01、SE04、SE84、SK08、SK24、SK61、SK76、SP60が相当する。第3期は弥生時代後期中葉～古墳時代初頭である。SE03、SE05、SE06、SK23が相当する。第4期は中世で、SD01が相当する。

今回の調査で比恵遺跡群北東端の状況の一端が明らかになった。さらなる資料の増加を期待したい。

〔参考文献〕

菅波正人編「比恵遺跡群(11)」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集』1992 福岡市教育委員会

図版 1



2. 調布区北側全景 (北東から)

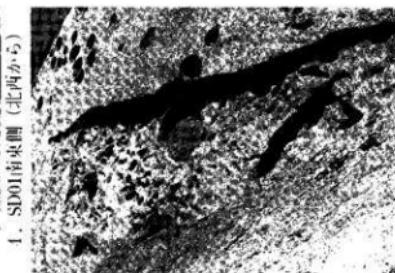


1. 調布区南側全景 (北東から)

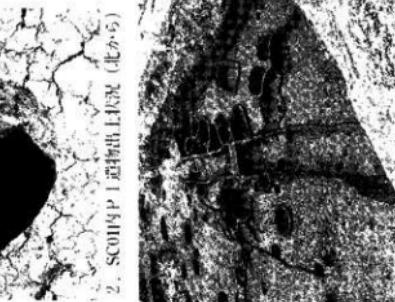
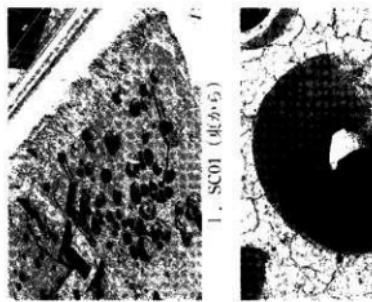
図版2



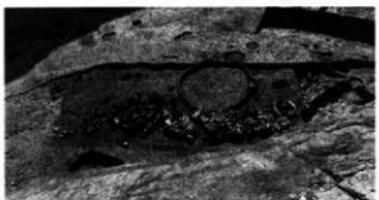
7. SD02北側 (東から)



6. SD02南側 (西から)



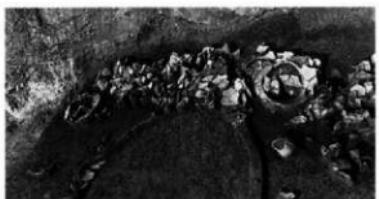
3. SC02・SD25 (東から)



1. SD02遺物出土状況（北西から）



2. SD02西側遺物出土状況（北から）



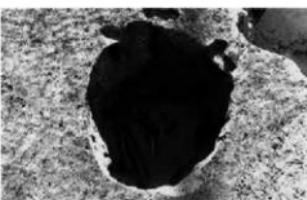
3. SD02中央付近遺物出土状況（東から）



4. SD02東側遺物出土状況（東から）



5. SE03完掘状況（北西から）



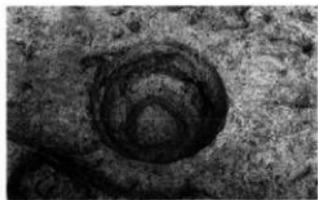
6. SE04完掘状況（北東から）



7. SE05完掘状況（東から）



8. SE06完掘状況（西から）

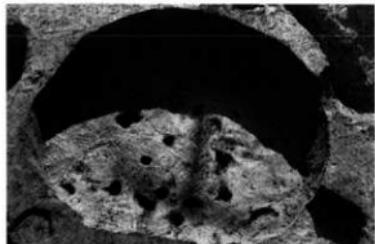


9. SE22完掘状況（東から）

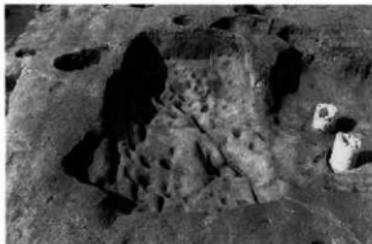


10. SE84遺物出土状況（北西から）

図版 4



1. SK07完掘状況（北から）



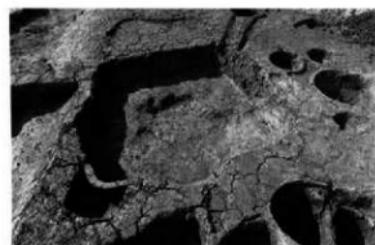
2. SK08完掘状況（北西から）



3. SK23遺物出土状況（南西から）



4. SK24遺物出土状況（東から）



5. SK61完掘状況（北西から）



6. SK76遺物出土状況（北東から）

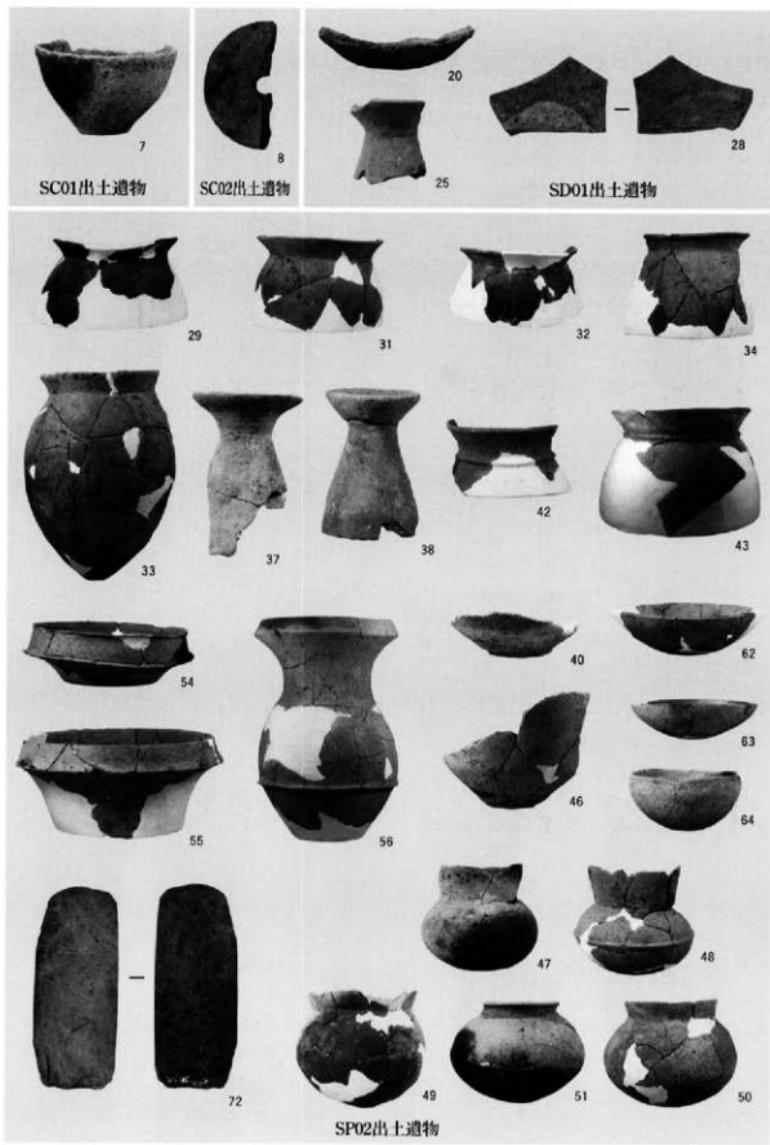


7. SP60断面（北東から）

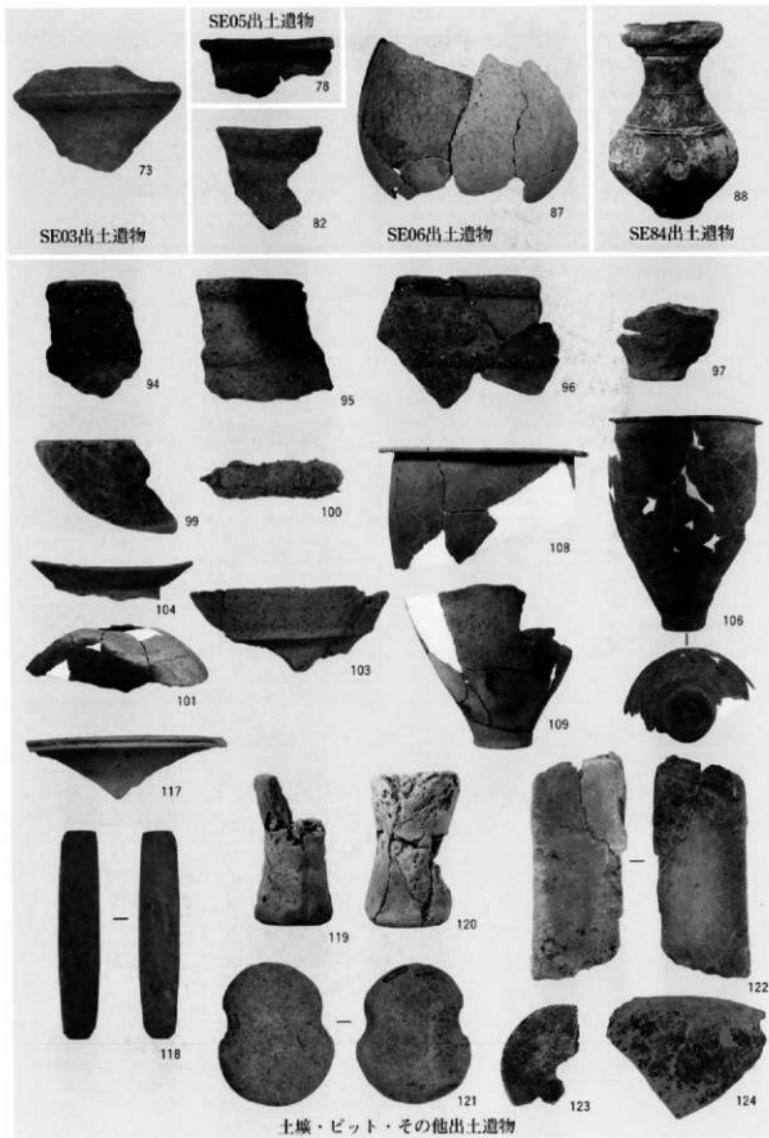


8. 作業風景

図版 5



図版 6



土壤・ビット・その他出土遺物

福岡市埋蔵文化財調査報告書第671集

比恵 30

—比恵遺跡群第69・70・71次発掘調査報告—

2001年（平成13年）3月30日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 有限会社浦永印刷
福岡市東区原田1丁目9-23

